

529
194

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4

始



事 圖

内務省
13.11.15
本 長

説 小 説



ウーソレオ・カンレアワ

作 イ キ ル オ ゴ
譯 秋 千 村 下

1 9 2 4

版 出 閣 芳 聚

大 正
14. 1. 15
内 交



129-194

序

マキシム・ゴオルキイは一八六八年の生れであるから今年で五十七歳になる譯である。いまは勞農政府に反いて、一つは病ひを養ふためにイタリーに在ると聞く。

彼が處女作「マカアル・テユードラ」を發表したのが廿五歳の時で、それから現在までに發表された作は、戯曲では誰でも知る「どん底」外數篇であるが、小説に至つては長篇短篇共に實に多數である。そしてそれ等の大部分は既に多くの人々に依つて翻譯され紹介されてゐる。

しかし茲に譯出した「ワアーレンカ・オレソウ」の一篇のみは未だ翻譯されてあるのを見ない。また何人にも紹介されたことを聞かない。「ゴオルキイ全集」なるものも出てゐるが、その中にもこの作は出てゐない。私が茲に譯出してこの一冊とした理由はこゝに在る。

理由はまだ外にもある。卷末の「ゴオルキイ小傳」を見ても解る通り、彼の生ひ立ちは貧窮と飢餓と絶望の連続であつた。そしてさういふ生活に堪え切れずに自殺を企てたほどであつた。従つて

彼の作の殆んどはさうした生活の中で経験した事實、體驗した思想を盛つたどん底の生活のみを描いてゐる。長篇では「三人」「懺悔」「國事探偵」を始め、短篇では「廿六人と一人」「チュルカツシ」「旅の道づれ」等、凡てプロレタリアの世界の描寫である。この意味で彼は純粹のプロレタリアの作家である。然るにこの「ワアーレンカ・オレソウ」のみはさういふ世界の描寫ではない。プロレタリアの作家としてゴオルキイを知る者は、この作を讀んで寧ろ奇異な感じさへ持ちほしな
いかと思はれる。

男主人公イポリット・セルゲーエヴィチは大學の講師として生活に困らない智識階級の人である。女主人公ソアーレンカ・オレソウは女學校を出た田舎娘でこれも決して生活に追はれてゐる階級の人ではない。而してかうした二人の戀愛とその争闘を心ゆくまでに描いたのがこの作である。男主人公は女主人公のはち切れさうな健康な美しい肉體に魅惑されて狂ほしいまでに思ひ悩む。しかし田舎娘の女は、いゝ意味の粗野と、飽くまでも濁らない純眞さと、不自然な慾望に負けない健全さを持つてゐる。男の豊富な智識も、高尚な人格も、女の肉體を得るための扶けとはならない。かへつてその爲めに男は臆病となり無力な動物にさへなる。そして女の傀儡となる。智識階級の不

自然な生活に馴致された男と、いゝ意味の原始的な健全な生活に育つてゐる女との戀はつひに合致しない。そして前者はつひに後者の勝利者となることは出来ないのである。かうした戀のいきさつを經として、男主人公の妹の戀愛事件、女主人公の家庭生活、ウオルガ河畔の美しき自然等をゴオルキイ持ち前の見方で思ふさまに描いた場面を織り込ませてゐるのがこの作である。これを以て見れば、この作がいかにゴオルキイのものとしては特殊のものであるかと解るであらう。理由といふのはこれである。

この作の中にもプロレタリアを身方としてゐる作者の思想も所々に伺はれはする。通俗小説にかぶれてゐる女主人公の思想に對し、また百姓だちの生活に對してまるで同情の眼を持たない氣持に對して不愉快を感じ非難する一節などはそれである。けれどそれはそれほど強くは現はれてゐない。寧ろ眞實の思想を持つ男と、眞實の思想を持たない女、持つ術を知らない女との對照である。肉體的には無條件に惹きつけられながら、思想的には飽くまで合致しない女との對照である。男はどうにかして眞實の思想を持つことを女に教へようとする。けれどそれもつひに失敗に終る。男はこゝに二重の寂しさを呪はねばならなかつたのである。而してこの二人の對照はそのまゝ、現代の日本

に於ける男女の對照に見られることを言つて置きたい。

吾々はこの作に依つて、今迄隠されてゐたゴオルキイの一面を伺ひ知ることが出来ると同時に、戀愛と思想との不合致から生れる苦しみと寂しさに悩まされてゐる吾々の問題に對して或る暗示を受けることが出来るであらうと思ふ。この譯を出版した理由はこゝにも在る。

大正十三年七月

譯

者



カレンカ
ワレン
オレソーウ

マキシム・ゴオルキイ作
下村千秋譯

イポリット・セルゲーエヴィチ・ボルカノフは、或る州の大學の講師として赴任した二三日目に、ウオルガ河の遙か上流の森林地帯の所有地に住んでゐる妹から、一通の電報を受け取つた。電報は簡単に次のやうに書かれてあつた。

「オットシス、ドーゾスグキテ、タノム。エリザウエータヨリ」

此の電報はイポリット・セルゲーエヴィチの心を不愉快に掻き亂した。といふのは彼のその時の計畫や氣分をぶちこはしてしまつたからであつた。

彼はその夏休みを、田舎の同僚の家で過さうと心を極めてゐたのであつた。そこで彼は、學校での講義の下調べをしようと思つてゐたのであつた。ところが、電文から推し計つて見ても解る通り

すつかり不幸な生活に入つてゐるに違ひない良人を失つた妹を慰めるために、セント・ペテルブルグ、即ち彼の赴任地から遙々一千露里餘りの道を旅しなければならなくなつたのである。

彼が妹と逢つた最後は、その四年前で、それ以來殆んど交渉がなかつた。そのすつと以前から、彼と妹との間には、遠く離れて住んで居り、そして生活趣味にも相違のあるやうな間柄には大抵共通な、さつぱりした形式的の交渉のみしかなかつたのであつた。

彼は電報を見て、妹の良人に就ての記憶を憶ひ起した。妹の良人は、がつしりした身體の、至つて好人物で、よく食つてよく飲んだ。圓い顔で、その顔中に赤い脈が網のやうに匍つて居り、その眼は小さくて可愛らしかつた。彼はよく左の眼を妙な風にしかめては、氣持ちよく笑ひながら、*Regardez peroi, regardez par là……*”といふやうな唄を實にまづいフランス語で唄つたりしたものであつた。

で、イポリット・セルゲーエヴィチには、あの元氣な若者が死んだとはどうしても信じられなかつた。それに平凡な人間は大てい長生きするものと思ひ込んでゐたので。

彼の妹は、半分輕蔑した謙遜さを以て、良人の弱點につけ込んでゐた。が、馬鹿ではなかつたか

ら、「石を射るものはその矢をも失ふ」といふことはよく理解してゐた。さういふ彼女であるだけに今その良人に死なれたところで、それほどひどく憐んでゐるとは想へなかつた。

しかしそれだからと言つて、彼女の頼みを拒むことは容易ではなかつた。それに彼には、外の何處よりも、妹の家が一番よく勉強が出来るのもあつたので……。

で彼はこの問題をしつかりと考へた後で、妹の所へ行くことに決定した。そして、それから二週間後の六月の或る暖かい夜には、彼はもう、波止場から村までの四十露里（一露里は約十丁）を辻馬車で揺られて、すつかり疲れ切つた身體を、公園を見下すテラスの上で、香りのいい茶を喫しながら、卓子を挟んで妹と差し向ひに坐つてゐた。

テラスの欄干に添つて、ライラックやアカシヤの林がわつさりと繁り合ひ、傾いた太陽の光りはその繁みを透して、繊細な金色のリボンを宙に織りなしてゐた。樹影の模様は卓子にもついて、卓上の田舎らしい種々の食物の近くまで匍ひ寄つてゐた。漂ふ空気には、リンデンの樹やライラック樹や、陽に焼かれる濕つた土などの匂ひがいつぱいに充ちてゐた。公園にはいろいろの小鳥が高らかに啼いてゐた。そして蜜蜂や地蜂がテラスまでひつきりなしに飛んで來ては、八釜しくうなりながら、

卓子の上を匍ひ廻らうとした。エリザウエータ・セルゲーエウナは、蜜蜂や地蜂を公園へ追ひやらうとして、ナブキンを手に取つてはぢれつたさうに打ち振つた。

イポリツト・セルゲーエヴィチは、妹は最早、夫の死んだ事で特に苦しんでゐるやうなことはないといふことを確かめることができた。また彼女は、彼を即ち彼女の兄を見詰める時は、いかにも何かを探し出さうといふ風であること、そして彼と話し合つてゐる時は、何か隠さうとしてゐる風があることを彼は確かめることができた。彼はそれ迄は習慣的に、彼女を、家を守ることにのみ全く心を集中してゐる主婦として考へてゐた。そして結婚生活の破壊の爲めに今はすつかり心を破られて神経質になり、蒼褪めて疲れ切つてゐるに違ひないと豫想してゐた。が今かうして、彼女の健康さうに日焦けた平和な、しつかりした卵なりの顔を見、更らに大きな艶のある眼を聰明さうに輝かしながら馬鹿に快活にしてゐるのを見ると、彼は愉快にも失望したのであつた。で彼は、彼女の話に耳を貸してゐる時は、その話の中に隠されてゐるものを聴き出さうとし、彼に隠し立てをしてゐるものを探し出さうとした。

「わたしはもうこの事には覺悟をきめてゐますの——」と彼女は、高い靜かな中音で言ひ出した。

その聲は上すべつた調子で、人を魅するやうに顫へた。——夫は二度目の發作の後で、殆んど毎日心臓が痛む、心臓の鼓動が不規律だ、ちつとも眠れないと訴へつゞけてゐたの……けれど、そんな風なのに、畑から家へ連れられて來た時は——その時わたしは立つてゐられなかつた程ですわ……夫は馬鹿に昂奮して、何か怒鳴つたんですつて……それはオレソウさんを訪ねた前日のことなのよ……オレソウさんてお方は、地主なの。退職の陸軍大佐で、酒飲みの皮肉家で、痛風病ですつかり弱つてゐるのよ。それはさうと、その人には一人の娘さんがあるのよ——財産も持つてゐますわ、ねえ兄さん！ 兄さんはその娘さんとお知り合ひにならなさいけませんわ……」

「どうしても逃げる事が出來ないなら。」とイポリット・セルゲーエヴィチは、微笑しながら妹の顔をちらりと見てさう言つた。

「そりや出來ないわ！ その娘さんはしよつちうこの家へ來るのですもの……それに、そりや勿論ですけど、今からは、前よりはもつとしよつちう來るやうになりますわ——」と彼女も微笑みながらさう答へた。

「その娘さんは、ハズバンドを探してゐるんぢやないかね？と言つて、僕はそのお婚さんにはなれ

ないが。」

妹は彼の顔をまぢまぢと見詰めた。その彼の顔は、卵なりの瘦せ形で、ぼつちりと尖つた黒い髻を生やし、長い白い眉毛を持つてゐた。

「どうして兄さんがお婚さんにはなれないの？ 勿論わたしは、オレソウの嬢さんに對して何の考へがあるといふ譯ではなく、たゞ通常の話として言ふのですけど——兄さんには、その娘さんと知り合ふのは何の譯かちやんとお解りでせうに……けど、たしかに兄さんは、結婚といふことをお考へになつてゐるのでせう？」

「いや、まだそんな時ではないよ——」と彼は、冷たく光る白つばい眼を眼鏡から引き釣りながら答へた。

「さうオ……。」とイリザウエータ・セルゲーエウナは思ひ悩む風に「結婚しようとする者には、三十歳といふ年は、遅くもあり早くもありませんわね……。」

彼女が良人の死に就ては何も言はなくなつてしまつたことは彼を喜ばしたが、それなら彼女は、あんなに大袈裟に、あんなに人を驚かすやうな方法で彼を呼び寄せた譯は何處にあるのだらう？と

彼は考へた。

「男の方は、二十歳の年か、でなければ四十歳の年に結婚するのがいいんですわ。」と彼女は沈んだ調子で言ひ出した。「さうすれば、自分のことも、また相手のことも欺くやうなことが無くつて済みますもの……でも、最初の結婚に失敗したなら、したら自分の純な感情で、失敗の傷を醫すのですわ、そして第二の結婚の時に……少なくとも四十男の持つべき殆んど永久に確實な外的な地位に依つて……。」

彼女の言つてゐることは、彼に向つて言つてゐるよりも、彼女自身に向つて言つてゐるやうに彼には感じた。で彼は、敢て言葉を挟まうとはせず、肘掛椅子に脊を憊りかけて、香しい空気を胸いつばいて吸つてゐた。

「さつきも申したやうに——夫は、その前日オレソウさんの所を訪ねたんですよ、そして、いふ迄もなく、そこで一杯御馳走になつたんですよ。ね、そしてその……。」エリザウエータ・セルゲーエウナは悲しさうに頭を振つて、「そして、今は……わたし一人ぼつちになつちまつたのよ……」……夫と一緒に暮すやうになつてから、僅かに二年目なんですけど、わたし、心から孤獨を感じてゐ

るのよ。ね、わたしの今の境遇はすゝぶん變ですわね！ わたしはいま二十九よ、そしてわたしは夫と子供たちの爲めばかりに事へて來て、自分の爲めには生きて來なかつたわ……そして、その子供達も死んぢまつて、わたしは……いま何でせうね？ わたしはどうしたらいいんでせう？ どうして生きて行つたらいいんでせう？ わたしは、いつそのこと、この地所を賣り拂つて、そして外國へ行かうと思つたのですけど、夫の兄弟が一人、この地面の後繼に就て苦情を言ひ出したんで、それが訴訟沙汰になりさうなんですの。土地はわたしのものですもの、法律上の根據なしには、その兄弟になんぞ決してやりませんわ、第一、兄弟の欲求することに何の理由も認められませんもの。兄さんはそれをどうお考へになつて？……。」

「俺は法律家ぢやないからね、お前も知つてゐる通り——」とイポリツト・セルゲエーヴィチは笑つて、「だが……もつと言つてごらん、何とかしなければなるまい。その兄弟は——その男はお前に手紙をよこしたのかね？」

「え……それが實に亂暴よ。その男は賭博打ちなの、すっかり落ちぶれて、もうどん底に沈んぢやつてるの……夫も、その男と随分似た所はありましたけど、嫌つてゐたわ。」

「何とかしよう！」と言つて、イポリット・セルゲーエヴィチは満足に両手を揉み合した。彼は妹が彼を呼び寄せた譯を知つたので喜んだのであつた。彼は、明瞭しないこと、決定しないことは何でも嫌ひだつたので。で彼の先づ考へねばならぬことは、腹の底にうんと落ちつきを持つことであつた。もし何かの厄介なことがその落ちつきを亂すやうなことがあつたなら——即ち面倒な心配事や苦しみ、彼の心に湧き起つたならば、それは、まだ能ふ限り十分に理解し得ない事件を、はつきりとさせる爲めに、拗拗に彼を煽動するのだと考へた。

「正直な所をいひますと」——とエリザヴェータは靜かに言つて、尙ほ兄の顔を……すに、「その男のしつこい欲求はわたしを驚かしましたの。イポリット、わたしはもう精も根も盡きつちまいましたわ。わたしはほんとうに休まして貰ひたいわ……だのに、また何か起りかけてゐるのよ。」

彼女は苦しうに溜息をして、彼のコップを取り除けながら、彼の耳には不愉快にひびく哀愁を含んだ調子で話しつづけた。

「死んだ夫のやうなあゝした男と八年間も暮したといふことは、わたしに休息する資格を與へたのだと思ひますわ。どんな女だつて、わたしのやうな境遇にゐれば、——それに女つてもものは義務や

尊敬の念に對する進んだ考へは殆んど持つてないものですから——その重い鎖を遠うに絶ち切つてわたしでせうに、わたしは、その鎖の重さに死ぬばかりになつてゐても、それを背負つて來たのですわ、その上私の子供だちまで死んでしまつたといふことは——あゝ、イポリット、子供だちに死なれてしまつた時のわたしの苦しみを、ちつとでも察して下さりさへすりや！」

彼はいかにも可哀さうだといふ表情をして彼女の顔を覓詰めた。が、彼女の愁嘆は彼の靈には觸れて來なかつた。彼は、彼女の言ひ方が、深刻に痛感する人に取つてはどうしても自然とは思はれない、何かの小説に書いてあるやうな言ひ方であつたので、それが厭だつた。その上、あつちこつちへ妙に視線を走らせては、ふと何かを見たまゝちつとしてゐたりするその光つた眼付が厭だつた。彼女の態度はしとやかで、慎み深くしてゐるのに心の裡の冷淡さが、綺麗におつくりをしたその身體全體から吐き出されてゐるのであつた。

名も知らぬ美しい小鳥が、テラスの欄干の上によつて、囀りながらビヨンビヨン跳ねてゐたが、やがて飛び去つて行つた。兄妹はしばらく黙つて對座したまゝ、小鳥の方へ視線を注いでゐた。

「だれか、お前の所へ來るのぢやないかね？お前には解るだらう？」と兄は、煙草に火をつけながら

訊いた。彼は、快よい安樂椅子に凭れながら、實に辭かな夕べを楽しみ、テラスにゐながら、戸外の静かなさゝやきを聞き、やがて凡ての物音を消して、數々の星を輝き出させる夜の來るのを待つてゐるのだと考へると、黙つて座つてゐられたならどんなに嬉しいだらうと思つて見た。

「ワアーレンカさんが見えますわ、かつてちよつとの間、パネルツエフ夫人だつた方……御存じでせう？リウドミラ・ワシリイウナ……やつぱり良人運が悪かつたの……けど、あの方は邪魔物を避ける術を知つてらしたつたのよ。夫の所へは、そりや澤山な人がよくゐらしたつたのよ——けど一人だつて面白い人はゐなかつたわ！つまり、話して見たいと思ふやうな人がゐなかつたの……百姓のこととか、獵のこととか、田舎の下らない話とか、人の噂とか、——話すことはそんなことばつかりだつたのよ……でも、一人ゐましたわ……獨身者で辯護士の——ペンコフスキーさんといひますの……まだ若くつて、そして非常に立派な教育のあるお方なの。ペンコフスキーさん御存じでせう？おや！どなたかいらつしたやうね。」

「來たのは……そのペンコフスキーさんぢやないかね？」とイポリツト・セルゲーエヴィチは訊いた。

何の譯か、彼のその質問が彼女を笑はせた。彼女は笑ひながら椅子から立ち上つて、彼には始めて聞く聲でかう言つた。

「ワアーレンカさんよ！」

「おゝ！」

「兄さんが、あのお方をどうおつしやるか、聞きものですわ……あの方は、どんな人でも征服しますわ。ほんとうに、あの方は、精神的に見てもほんとうに偉いお方ですわ！けど——兄さんは、兄さん御自身の見方をなさる方がいゝわ。」

「そんなことはどうでもいゝよ。」と彼は、身體を肘掛椅子の上に長々と伸ばしながら、氣乗りのしない風に言ひ放つた。

「すぐ歸つて來ますわ。」とエリザウエータ・セルゲーエウナは、立ち去りながらさう言つた。

「だがその方は、お前の案内がなくとも、一人でこゝへ來るだらうに。」と彼は干渉がましく言つた。

「えゝ、でもすぐ歸つて來ますから！」と彼の妹は部屋の方から答へた。

彼は肩を擧めて、公園の方を見詰めながらそのまゝ椅子に掛けてゐた。せわしく歩む馬の蹄の音が聞えて、車のがらがら鳴る音が聞えて来た。

イポリット・セルゲーエヴィチの眼の前には、夕の薄明の中に包まれて、古い節くれだつたリンデンの樹や、楓や、オーク樹が立つてゐた。ぎこちない枝が、互ひに入り交つて、それ等は香りのいゝ新緑の屋根を分厚に造つてゐた。どの枝も老朽して、皮は割れ、小枝は折れ、それが上に伸びやうとし、光りの方へ出ようとして、互ひに結びつき、そして元氣のいゝ親しい一家族を造らうとしてどもゐるやうに見えた。けれどそれ等の幹には、朽ちてがさがさになつた黄ろい苔がいつばいにひつついてゐて、その根元には若木がワツサリと生ひ伸びてゐた。その爲めに親木には澤山の枯枝が出来、その枝は恰度枯死した骨格のやうに宙にふわふわしてゐた。

イポリット・セルゲーエヴィチは、古さびた公園から吹いて来る微風の下に、さうした様を見ながら、肘掛椅子に凭れたまゝいゝ氣持ちにうとうとして来た。

樹々の幹や枝の隙間には、地平線の眞赤な色が輝いてゐた。その活々した背景に對して、樹々は一層陰鬱に一層老朽したやうに見えた。テラスから遠くのほの暗い中へ消えてゐる並木道の上の鏡

い影は、移るともなくうつらうつら行つた。そしてあたりの静けさは、様々の夢をかもしながら刻々に深くなつて行つた。イポリット・セルゲーエヴィチの空想は、さうした夕の不思議な力に包まれるまゝにかつて知つた女の幻影や、その女の傍にゐる自分の様々の幻影などを描いて行つた。幻影の二人は互ひにかたく寄り添ひながら、並木道を遠くまで、黙つて歩いて行く、女の肉體の暖かみが彼に傳つて来る……と、

「御機嫌よう！」と厚みのある胸聲がひゞいて来た。

彼は飛び上り、少し慌て氣味で周囲を見廻した。

彼の前には、若い娘が立つてゐた。彼女は中肉中背で、身には灰色のガウンを纏ひ、頭からは、眞白なふわふわした、まるで花嫁のヴェールか何かのやうなものをかぶつてゐた——それが最初に彼の眼に止まつた全部であつた。

彼女は手を差し出して、かう言つた。

「イポリット・セルゲーエヴィチさんちやなくつて？ わたしオレソウ嬢よ……わたしは、あなたがけふお着きになることを前から知つてましたの、それでわたし、あなたがどんなお方か、それが

知りたくつて参りましたの。わたしは、まだ一度も學問のあるお方にお目にかゝつたことがありませんのよ——だからわたし、學問のあるお方はどんな風かちつとも存じませんの。」

強い、あつたかい、小さな手が彼の手をかたく握つた。と彼は、このだしぬけの攻撃にちよつとどきまぎして、黙つたまゝ頭を下げたきりであつた。この慌て方に、彼は自分のことが腹立しくなつた。彼は頭を下けたまゝ、もし頭を擧げて彼女の顔を見たなら、そこには開け放しの下品な媚びだけがあるだらうと思つた。だが顔をあげて彼女を見てみると、そこにはつゞまじやかな顔いつばいに輝いて、何のつくらう所もなく愛らしく微笑んでゐる、大きな黒い眼があつた。

彼は、恰度さうした健康美を誇る顔を、昔のイタリーの繪畫で見たことを思ひ出した。活々とした唇を持つ小さな口、三日月なりのきりゝとした眉、その下の大きな眼、それ等は凡て繪の女そつくりであつた。

「ちよつと失禮……………灯をつけさせませう……………どうぞお掛け下さい……………」と彼は彼女に言つた。

「どうぞお構ひ下さいますな、わたしは、こゝを自宅と同じやうにしてゐるのですから」と彼女は

言ひながら椅子に掛けた。

彼は卓子の前に立つたまゝ彼女と相對して、彼女を見た、そして、これは無作法だと思つた。何か話し出す義務があると思つた。けれど彼女は、彼のさうした凝視にはちつとも臆せず、彼女の方から話し出した。どういふ風にしてこゝへ來たか、田舎が好きかどうか、この田舎に長く停つてゐるつもりかどうかなどと彼女は訊いた。彼はポツポツ言葉を切りながら、心に浮ぶまゝを断片的にいろいろと答へた。彼は、擲られでもしたやうに、ポーツとなつた。いつもはつきりとしてゐる頭が、いまは、急に、混沌として起つて來た感情に包まれて、呆んやりしてしまつた。彼女と共にゐる爲めに起つたかうした恍惚状態は、心の中で、或る苦しみと闘つた。そして好奇心は、恐怖に似た何物かと闘つた。

しかし相手の娘は、健康にはち切れさうな身體を椅子に凭せかけながら、彼の反對の側にふつくと坐してゐた。そのしつかりと包まれた着物の上からは、と肩や胸や腰の豐滿な輪廓がふつくら所々に覗はれた。そして彼女は、人を威壓するやうな調子を含んだ滑らかな聲で、見知らぬ二人が始めて會つた時に極つて話すやうな、いろいろの世間話を話すのであつた。彼女の黒い栗色の髪は

人を魅惑するやうに渦巻いて、眉毛と眼の色はその髪よりも黒かつた。黒い襟の上の皮膚、薔薇色の透き通るやうな耳の周囲の皮膚は、血管を循る血液の速かな循環まで解らせるほどにびくびく震へてゐた。そして、小さな白い歯並を現はして笑ふ度に唇が現はれ、上衣の悉くのひだからは、人を渾迷させるやうな魅力が吐き出されてゐた。くるりとした鼻の曲線と、ふくらみ切つた唇の間から現はれる小さな歯並とは、何物でも奪ひ取らずには置かないやうなものがあつた。自然の魅力に充ちた身體のこなし方には、御馳走されて寵愛されてゐる小猫の優美さがあつた。

イポリット・セルゲーエヴィチは、自分自身が二つに分れたやうな気がして來た。一つの自分は彼女の肉慾をそよる美しさにすつかり吸ひ込まれて、その奴隷のやうにその美しさを貪つてゐる自分、も一つの自分は、それ自身その力を失つてしまつて、最初に感じた感情の存在を、機械的に否定してゐる自分であつた。彼は娘の質問に答へた。それから自分から娘に何かを問ひ掛けた。さうして彼は、彼女の恍惚とした風貌から、視線を外らさうなどとは思つても見なかつた。彼は既に自分自身に向つて、彼女は愉快な女性だと言つた。さう言つて、心の裡でその自分を笑つた。けれどさうしたことは、二つに分れた彼自身を一つにはしなかつた。

その夜ワアーレンカ・オレソウは妹の家に泊ることになつた。

次の朝、部屋一ぱいに充ちてゐるキラキラしい太陽の光の中に眼覺めたとき、彼は前夜のこと、若い娘のことを憶ひ出してまた微笑した。彼は、丹念に身ごしらへをし、學者にふさはしい冷靜さと嚴肅さを保ちながらお茶の席へ出た。が、彼の妹が一人で卓子の前に坐つてゐるのを見ると、彼は吾れ知らずにかんざした。

「おや、何處へ……………」

彼はそれを訊いてしまはない前に、妹のするさうな笑ひを見て口を噤んだ。そして黙つたまゝ、卓子の前に腰を下した。妹のエリザウィータ、セルゲーエウナは、始終笑ひながら、そして彼の心ならざる澁面には一向お構ひなしに、彼の様子を細大漏らさず覗ひ見てゐた。その彼女の意味あり氣な微笑は彼を怒らせてしまつた。

「ワアーレンカさんはもうすつと前に起きて、わたしと一緒にお顔を洗つたの、いま公園に行つてゐらつしやるでせう……………」でも直ぐお歸りになりますわ。」とエリザウィータ・セルゲーエウナは言つた。

「お前達のすることは實に解らないよ——。」と彼は笑ひながら言つて——「お茶が済んだら直ぐ、僕の荷物をほどくやうに言ひつけて下さい。」

「そして、中のもも取り出させるんですか？」

「いや、いや、さうする必要はない。それは僕がするよ、それに、何もかもごつちやになつてゐるだらうから……お前にやる本や砂糖菓子も入つてるよ……。」

「有りがとう、兄さんは思ひやりがあるのね……おや、ワアーレンカさんがお歸りになつたわ。」
ワアーレンカは、眞白なガウンを被て、ドアの所にすらりと立つた。そのガウンは肩から足先にさらりと流れて下の方に澤山のひだをなしてゐる。その様子は、子供がブルーズ（緩き上衣）を被たのに似てゐた。その爲めに彼女もいかにも子供らしく見えた。彼女はドアの所でちよつと躊躇してゐたがやがてかう訊いた。

「わたしを待つてゐて下さつたの？」そして、まるで空の雲のやうに音もなく卓子に近づいた。

イポリット・セルゲーエヴィチは黙つて首を下げた、それから彼女と握手をした、と、彼女の腕は肘まで露はだつたので、その身體から匂ふ葦の花のデリケートな香りがふんと香つて來た。

「あなたのお身體は何で香らしてゐらつしやるの？」とエリザウエータ・セルゲーエウナは訊いた。

「いつもより香りますか？イポリット・セルゲーエヴィチさん、あなたは香りがお好きですか？わたしは——葦に好きですの、葦の花が咲くと、わたしは毎朝顔を洗つた後で、葦の花を摘んで來てそれで両手を靡きますのよ——豫備校（女子大學の）で教はつたの……あなたは葦の花がお好き？」

彼は茶を飲んでゐた、そして彼女の方を見なかつた、が彼女は自分を見てゐることを知つてゐた。

「僕はまた實際に考へて見たことはありません——好きか嫌ひかといふことを。」と彼は、肩をゆすりながら冷淡に言つた、が、思はず彼女の顔をチラリと見た時は、彼は微笑した。

ガウンの雲のやうな白さの影になつて、彼女の顔はすばらしい櫻色に彩られ、その深い眼は晴れ晴れした喜びに輝いた。彼女は、健康な、活き活きした、無意識な幸福を吐き出してゐた。さうした彼女は北の空にでも夜明を出現させるほどの光のやうに立派であつた。

「あなたはお考へになつたことがないんですつて？」と彼女は訊いて——「でもどうしてそれを……」

……あなたは植物学者なんですのに。」

「だが、花造りぢやありませんから——。」と彼は簡単に言つた。そして、これはちよつと亂暴な言ひ方かなと思ひ返して、思はず視線を外らした。

「だつて、植物学者だつて、花造りだつて、つまりはおんなじことぢやありませんか？」と彼女はちよつとためらつた後で訊き返した。

彼の妹はあたり構はず笑ひこけた。彼は、その笑ひ聲の爲めに氣分を悪くした。それで彼は心の中で氣の毒さうにかう言つた。

「うん、この女は馬鹿なんだ！」

しかしやがて彼が、植物學と花造りとの相違を彼女に説明してやつた時には、彼はさつきの、彼女に對する判断を取り消して、彼女は單に無學なんだと考へ直した。彼女は、彼の學者らしい眞面目な話を聴いてゐる時は、注意深い學生の眼そのまゝで彼を見詰めてゐた、これは彼を喜ばせた。彼は話してゐる間に、彼女を見る視線を時々妹の顔へ注いだ、と、妹は、ワアーレンカの顔をあらかじめもせずちよつと見詰めてゐる、その凝視の中には、強い嫉妬が現はれてゐた。彼は、妹に對して

輕蔑の念を起した、それで彼の話はちよつとまごついた。

「え、まゝ、そして、それはどうなんです。植物學は興味のある學問なんですの？」と若い娘はゆつくりと言つた。

「うん、そこで、學問といふものは、人間に取つて有益だといふ考へを以て研究しなければならぬといふことが解つたでせう……。」と溜息をしながらさう説明した。啓發された智識もなく、たゞ美しいばかりの女は、可哀相だなと彼は思つた。が、彼女は、沈思する風に匙でコップの端を叩きながら、かう訊き返した。

「でも、牛蒡はどうして育つかなんてことを研究することが、何の益になるのです？」

「それは、一人の人間の生活現象を研究して、それから様々のことを推し計つて行くのと同じですよ。」

「人間と牛蒡……。」と彼女は笑つて「人は誰れでも、他のどの人とも同じやうに生きてゐるのでせうか？」

彼は、この興味のない會話が自分をちよつとも疲らせないのはおかしいことだと思つた。

「わたしも、百姓達と同じ風に食つたり飲んだりしてゐるのですか？」と彼女は、頬を撫でながら熱心に訊きつゞけた。「そして、他の多くの人達もわたしと同じ風に暮してゐるのですの？」

「あなたはどんな風にお暮しですか？」と彼の方から訊いた。この質問は、會話の方向を變へるだらうと思つたからであつた。彼はさうなればいゝと願つた、といふのは、ワアーレンカをきつと見詰めてゐる妹の凝視の中に在る嫉妬に對して、いまは意地の悪い冷笑さへ感じて來たからであつた。

「わたしがどんな風に暮しますか？」と娘は急に顔を染めて、「ねえ。」と言つたが、さも満足さうに眼を閉ぢたりなどして、かう言ひつゞけた。「ねえ、わたし、朝起きて、もしお天氣がよかつたら、わたしはすぐに堪らなく楽しくなるの。丁度、長い間欲しいと思つてゐた、立派な美しい贈り物を貰つたやうな氣がするの……わたしは身體を洗ひに走つて行きますの——泉の湧き出す小川がありますのよ——その水は冷たくつて、身を切るやうですの。そこに一と所非常に深い場所がありますのよ、わたしは、その深い所へ、堤から真逆様に、チャブン！そりや、もう身體がカツカツとして來ますわ……高い所から水へ飛び込んで御らんない、頭の中が頻りにゴウゴウ鳴るものですわ……それから浮び出て、岡へ上るの、すると太陽が身體中を見下して笑ひますわ……やが

てわたしは家の方へ行く森の中道を抜けて行きます、種々の花を集めながら、酔ふほどに森の空氣を吸ひ込みますの。家へかへると、お茶が出てゐます、わたしはお茶を飲みます、わたしの前には花が生けられてあります……そして太陽はわたしを見詰めてゐます……あゝ、わたしがどんなに太陽が好きか、あなたにはお解りになりませんか？やがて日が高くなると、家の中の仕事を始めますの……家ではみんなわたしを可愛がつて下さいますわ。みんな氣が利いて、直ぐにわたしの言ふ通りをして下さるの……さうして、晩になるまで、何もかもまるで車がまわるやうに、うまく運んで行きますの……太陽が沈む、と月と星がお顔を出します……まアあの顔だけは、いつも美しくつて新しいわね！わたしにはそれをうまく言ひ現はせんせんわ、……生きるといふことはどうしてこんなにいゝのでせう！……でも、あなただつて、わたしと同じやうに感じていらつしやるでせうから、さうでせう？さうした生活が何故いゝのか、何故面白いのかあなたはよくお解りでせう？」

「えゝ……勿論です！」と彼は合鍵を打つて、妹の顔に浮んでゐる毒氣のある笑ひを手を以て拭き消さうとするやうな風をした。

彼はワアーレンカを見詰めてゐた、そして頻りと彼女を讚美してゐた。その間中彼女は身體全體に溢れてゐる昂奮の力を彼にも分け與へやうとしてワクワクしてゐた。が彼の此の恍惚状態は、彼女に對する彼の憐憫の情を、痛ましく思ふ感情にまで高めて行つただけであつた。彼は眼の前にゐる彼女を、植物の生活の美しさと大した變りのない、粗野な詩に充ちた、しかも溢れるやうな美しさを持つた、けれど頭腦に依つては少しも高尚にされてゐない、そんな人間としか思へなかつた。「そして、冬にはどうですか？ あなたは冬はお好きですか？ 何處も彼も眞白で、健康で、刺戟的で飽くまでも迫つて来る……」

と、ベルが鋭く鳴り出して、彼女の話を遮つた。エリザヴェータ・セルゲーエウナが鳴らしたのであつた。やがて圓い親切さうな顔にいたづららしい眼を睨かした、丈の高い女中が部屋へ飛んで現はれると、エリザヴェータ・セルゲーエウナは面倒臭さうな聲で、

「お皿をお下げ、マリーシャ！」
するとマリーシャは、足を引きずりながら、馴れ切つた風で、部屋を出たり入つたりして片づけをした。

かうした事が、昂奮した娘の心を稍々落ちつけた。彼女は、何かを振り落さうとでもするかのように肩をゆすつて、それから寧ろ恥かしさうにイポリット・セルゲーエヴィチに訊いた。

「下らない話で、うるさかつたでせう？」

「いや、そんなこと、どうして仰言るのです？」と彼は打ち消した。

「いゝえ、ほんとうに——わたし、自分の馬鹿を見せましたわね？」と彼女はそれを言ひ張つた。

「どうして？」とイポリット・セルゲーエヴィチは叫んだ。さう叫んでから、それが實に親しげに眞面目であつたことに吾れながら驚いた。

「わたしは野蠻なの……つまり、わたしはちつとも教養されてないの……」と彼女は言ひ譯するやうに言つて「けれどわたしは、あなたとお話することが出来て嬉しいわ……何故つて、あなたは學者で、そして……わたしが想像してゐたのとは違つたお方ですか？」

「ぢや、僕をどんな風に想像していらしたんです？」と彼は微笑しながら訊いた。

「わたしは、あなたを、いつもいぢ／＼な立派なことばかりをお話する方だと思つてましたの……何故とか、如何にしてとか、これはさうではない、あゝであるとか、悉くの人を下賤で、自分一人

が賢明であるやうな、そんなことばかりを……お父さんの所へよく訪ねていらつした一人の友達がありましたのよ。やつぱりお父さんと同じ陸軍の大佐で、あなたのやうに學問のあつた方なの……けど、軍事上の學者なんでしたの……そんな人をなんと言つたらいいでせうか……軍人の人達の學問のある方のことを……その人は、御自分の意見をそりや大袈裟におつしやるお方だつたの、他に何んにも知らうともしないで、たゞ御自分の法螺ばかり吹いていらつしたのよ……」

「そして、僕もそんな人のやうにお思ひになつてたんですか？」とイポリット・セルゲーエヴィチは訊いた。

と、彼女は頭を攪亂されたやうに、顔を蔽らめ椅子から飛び上り、突拍子もなく部屋の中を走り廻り出した。走り廻りながら、彼女は譯も解らなく言つた。

「あゝ、あなたはどうして、そんな風にお考へになれるのでせう……いま……出来るならわたしは……」

「まア、こちらをごらん、可愛いゝお子さんだち……」とエリザウエータ・セルゲーエウナは眼を

三角にして二人を凝視しながら、「わたしは、家の中を片づけに行きますから、お二人は……よくしてゐて下さいね！」

そして妹は笑ひながらスカートを鳴らして出て行つた。イポリット・セルゲーエヴィチは、答めるやうな眼付で妹の後を見送つてから、自分に考へた。たとへこの娘には教養がなくともその立派な美しさにふさはしい話をしなければならぬと。

「ねえ、わたし今考へてゐることお解りになつて——あなたはボートに乗ることお好き？ 森の方へボートで行きませうよ、そしてそれから森の中を散歩させよう、そして夕飯時までにかへさせよう、いいでせう？ こんなにお天気がいいんですもの、わたし實に嬉しいんですの。それからわたし、自分の家にゐないといふことも……お父さんは脚氣で悩んでゐるので、家にゐれば、お父さんのことばかり願ぎ廻つてゐなければならぬのですもの。そしてお父さんは、病氣の時は氣むづかしいんですもの。」

彼女の自由な我儘に面喰つて、彼は直ぐには確答をし得なかつた。やがてそれに返事をした時は彼は前夜心に起つた考へをまた思ひ出した。その考へを持つたまま、彼はその朝も寢室から出て來た

のであつたのだ。しかし確かに彼女は、彼の心を征服しようといふ彼女の欲望を疑つてゐる彼の心に、それ以上の根據を興へはしなかつたではないか？彼女の言葉の中にも媚を呈するやうなことは一つもなかつた。それならばつまり、何故かゝる………疑ひもなき生地のままの若い女と、一日を遊び暮らさうとしないのか？

「あなたは舟を漕ぐことお上手？下手だつて、構ひませんわ………わたしが一人で漕ぎますわ、わたしは力があるのよ、そして舟は大へん軽いのですもの、出かけるでせう？」

二人はテラスに出て、そこから公園の方へ下りて行つた。丈の高い瘦せた彼の身體と並ぶと、彼女は餘計に背が低く肥つて見えた。彼は彼女に腕を差し出したが、彼女はそれを執らなかつた。

「執らないわけ？だつて疲れてゐる時はいゝけど、疲れてないときは、歩くのに邪魔になるだけですもの。」

彼は、眼鏡の中から彼女を見詰めて微笑した。それから彼女の歩調に自分の足を合せて歩いて行つた。さうして歩くのは彼には非常に嬉しかつた。彼女は軽やかにそしてとやかに歩いた——眞白なガウンが身の周圍に波打つた、が褶一つ歪みはしなかつた。彼女は片手にバラソルを持ち、片手

で自由にしなやかに身振りをしながら、村の郊外の美しさのことを話しつゝけた。

肘まで露はにした、強さうに褐色をした彼女の腕は、金色の肌毛に蔽はれ、それが宙を動く時はイポリット・セルゲイ・エヴィチの視線が貪るやうにそれに注がれずにはゐなかつた………そして亦も彼の靈の奥底に、混沌とした譯の譯らない何物かの恐怖が顔へ出した。彼はそれを消さうとして自分に訊いた——この若い女の後について行つて如何するつもりなのだ？と、それに答へるものがあつた——好奇心と、彼女の美しさを味はうとする穏やかな純な欲求とからだ。

「あそこが川よ！お先にいらつしつて、舟に乗つてゐて下さい。わたし、直ぐにオールを持つて來ますから………」

オールが何處にあるか教へてくれるやうに彼女に言はうとしてゐるうちに、彼女はもう森の中へ行つてしまつた。

静かな冷たい川の水の面に、森の樹々が逆さまに映つてゐた。彼は舟の中に坐して、水面の影を見詰めた。その影は、曲つた節だらけの枝を水の上に出して堤の上に立つてゐる實際の樹よりも、もつと立派にもつと美しかつた。その影は、チラチラと動いては、變形した元の姿に還らうとしなが

らしよつちう型の崩れる僅かの元型を元として、水の中にはつきりとした調和のある幻影を造り上げてゐた。

この静けさと、まだ左程暑くもない太陽の光りとに包まれ、そして生の悦びに充ちた雲雀の歌の漂ふ空気に浸りながら、かうした透明な繪を讚美してゐると、イポリット・セルゲーエヴィチは、自分の裡なる生命の中に、頭腦を休ませるやうな高潔な快よい平靜の感覚が湧いて来るのを感じた。やがてそれは、何かを知らう何かと言はうと、絶えず制し難いまでに働いてゐる彼の頭腦に眠氣を催さした。全く静寂が四邊に罩めて、木の葉一つ動かない。その静寂の中に、自然の無言の朗歌が止むことなしに歌ひつゞけられ、打ち勝ち得ざるものとして死と恒に相戦つてゐた生命は、今や無言の中に立派に生きてゐた。そして靜かに働きながら凡てのものを殺さうとしてゐる死は、決して勝利を得なかつた。さうして、蒼空は勝ち誇つた美しさに輝いてゐた。

川の水面の影繪の背景の中に、顔一ぱいに微笑を湛へた透き通るやうな美しい姿が映つた。その姿は、手にオールを持つて立ち、彼を傍へ招くかのやうに、無言のまゝ、堪らなく愛らしく、それはまるで天から降つて來たかのやうであつた。

イポリット・セルゲーエヴィチは、それは公園から現はれたワアーレンカの姿だといふことを知つた。そのワアーレンカも彼が見てゐることを知つた。けれども彼は、音をさせるか、動かして、いまの恍惚状態を破るに忍びなかつた。

「まア、あなたは、何といふ空想家でせう！」といふ彼女の驚いたやうな叫び聲が、四邊にひびいた。

そこで彼は残念さうに振り返つて娘の方を見た。娘は、はじめめた道を下つて元氣よくさつさと汀へ下りて來た。

彼女を一目見ると、残念と思つたことも消えてしまつた、といふのは、本物の彼女が實際に恍惚たる美人であつたからである。

「わたし、あなたは夢を見ることが好きだらうとは、想つて見ることも出来ませんでしたわ！ そんなにかめしい眞面目なお顔をしてゐらつしやるのですもの……あなた、舵をとつて下さいね、いゝでせう？ 上の方へ漕いで行きませうね……川上にはもつと美しい景色がありますよ……それに、大抵は、流れに逆つて漕いで行く方が面白いものですわ。何故つて、自分で漕いで、實際

に経験して見ると、それがよく解りますもの……。」

舟は、汀を離れると眠つたやうな水面に靜かに揺れた。が次ぎにオールを一漕ぎ強く漕ぐと、舟は直ぐに堤に並行した。それから二度目のオールで舟は左右に揺れながら、軽々と前に進つて行つた。

「丘になつてゐる堤の下を漕いで行きませうね、陽蔭になつてゐますから。」と彼女は、馴れた漕ぎ方で水を切りながら言つた。「たゞ此處だけが流れがゆるいのよ……。デネーブルの上は——ラツチエツキイ小母さんはそこに竿敷を持つてゐますの——そこは實に怖ろしいのよ、ほんとうに！うっかりすると、オールをもぎ取られてしまひますわ……。あなたは、デネエブルの早瀬を見たことがなくつて？」

「僅かに入口の敷居だけサ」とイポリット・セルゲーエヴツチは洒落れて見た。

(譯者註。ロシアでは敷居を Порог といひ、早瀬を Порои といふ。つまり敷居と早瀬とはその發音が同じである爲め、さう洒落れたのである。日本で「君は海を見たことがあるかね？」といふ質問に對して「僅かに硯の海だけサ」と答ふるが如きである。)

「わたしその早瀬を通つたことがありますの」と彼女は笑ひながら言つた。「素敵だつたわ！ある時なんぞ、その早瀬で舟が。もう少しで粉々になる所でしたの、その時はほんとうに、もうちつとで濡れ死ぬところでしたのよ……。」

「でも、要するにそんなに素敵なことぢやなかつたでせう？」とイポリット・セルゲーエヴイチは今度は眞面目に言つた。

「まあ、どうして？わたし、死ぬことなんぞちつとも恐ありませんわ……。……。どんなに命が可愛くたつて。彼の世にだつて、きつと此の世と同じやうに、面白いことがあるに違ひありませんの。」

「だが恐らく、あの世には何んにも無いでせう……。」と彼は、好奇心を以て彼女を見ながらさう言つた。

「それなら、救ひはどうしてあるのでせう？」と彼女は叫んで、それから確信を以て「勿論、救ひはありますわ！」と言つた。

彼は敢て彼女に反對しようとはしなかつた——彼女の思ふ通りに言はせて置けと思つた。そして

何か特殊な機會が來た時に、彼女の考へ方を否定して、そこで彼の考へてゐる不幸な小さい世界をすつかり展げて見せようと思つた。彼女は、舟の横木に相對して置く小さな足を、舟の底に突つ張つて、彼と相對して坐り、オールを動かす度に身體を後方に曲げた。と、彼女の薄いガウンの下の處女らしい胸の輪廓が、身體の運動に震へながら、ぐつと高く弾かれるやうに盛り上るのが見えた。「おや、この女はコルセットを嵌めてゐないぞ。」とイポリット・セルゲーエヴィチは胸の中で言つた、そして視線を下の方へ向けた。けれどその視線は、彼女の可愛い、足の上に止つた。舟底に突つ張つた足が思ひ切つて伸されると、同時に足は膝の邊まで透いて見える。「この女はどうしてこんな馬鹿な身なりをしてゐるのだらう？」と彼は惱ましい思ひで胸の中で言つた、そして振り返つて高い岸の方を見た。

公園はいつの間にか過ぎて、いまは絶壁の下を漕ぎ上つてゐた。その絶壁の上には、卷いた豌豆の蔓が風にゆれてゐる、それから長細い南瓜の花や、水を見下して絶壁の端に立つてゐる向日葵の薄衣のやうな葉や、その大きな圓い黄ろな花などが風にゆれてゐるのが見えた。それと反對の岸は低く平らに遠くまで展がつて向ふの緑の森まで伸びてゐる。そこには若草がわつさりと生えていか

にも水々しく活々とした色をしてゐる。そこに咲いてゐる青白い花や青黒い花が、子供の美しい眼のやうにいかにも可愛らしく彼の方を見詰めてゐる。そのすつと向ふの正面には、暗いほどの緑の森が見えて——川はその方へ、冷たい劍のやうに貫いて行つてゐる。

「あなた、暑くない？」とワアーレンカが訊いた。

彼は彼女をチラリと見た、そして顔を赤らめた——彼女の眉の上、波打つ髪の房の下には、汗の粒が光つて、その胸は大きく速かに波打つてゐる。

「失禮！」と彼はあやまるやうに叫んだ——「周囲の景色を眺めてゐて、自分のことも忘れてゐたので………疲れたでせう………僕にオールを貸して下さい！」

「お貸ししません！わたし、疲れたやうに見えて？そりや侮辱ですわ！あと二露里漕がなければならぬのですよ………いゝえ、あなたはそこにぢつとしていらつしやい………すぐよ、丘へ上るのは、そして散歩するのよ。」

それ以上彼女と言ひ争ふことの無駄なことは、彼女の顔を見てよく解つた。で彼は、心苦しさを肩を動かし、「この女は、たしかに俺を虚弱な男だと思つてゐるのだ。」と心に不愉快に思ひながら

何の答もしなかつた。

「ねえ——これが、わたしたちの家の方へ行く道よ。」と彼女は岸の道を顎で指して、「こゝに浅瀬がありますわ。こゝから家まで十四露里ありますの。わたしの家の方もいゝ景色ですわ、あなたのお家の方よりもつと美しい景色ですわ。」

「あなたは、冬の間もこの田舎で暮したことがあるの？」と彼は尋ねた。

「ないでせうとおつしやるの？ねえ、わたしは家の中のことを一切やつてますのよ、お父さんは椅子から立つことも出来ないのですの……何處へ行くにもお父さんは運ばれて行くのよ。」

「でも、そんな風にして暮してゐるのが退屈になつて來なければならぬ筈ですか？」

「どうして？わたしは重い責任を持つてますのよ……そして私だちを助ける者はたつた一人きりよ——ニコンといふ、父の部下だつた人ですの。その男はもう老ひばれて、その上に酒飲みなのですけど恐ろしく丈夫で、よく仕事をしてくれますわ。百姓だちはその男を恐がつてますの……百姓だちを擲るのですもの、そしたら一度、その男は百姓だちにひどく擲られたことがありましたわ……そりやひどく……その男はほんとうに親切よ、そしてお父さんとわたしの爲めに、身も心も

捧げてゐますの……わたしだちを犬のやうに可愛がりますわ、わたしだちもその通り可愛がつてやりますの。あなたはこんな小説をお読みになつたことがあるでせう、主人公が軍人で、グラムモント伯爵といつて、それにやつぱり部下の、サチ・ココといふのがゐる？」

「讀んだことがありますの……。」と、若い學者は丁寧に白状した。

「讀まなければいけませんわ——そりや立派な小説よ。」と彼女は信念を以て彼に忠告して、「ニコンがわたしを喜ばせたときは、わたしは「サチ・ココ」と呼んでやるの。始めはさう呼んでやるとよく怒つたわ、で、ある時その小説を讀んで聞かせてやつてから、さう呼ばれると、自分が恰度サチ・ココのやうに愛相を言はれてゐるのだといふことを知るやうになりましたわ。」

イポリット・セルゲーエヴィチはぢつと彼女を見詰めてゐた。と、恰度歐洲人が、繊細に彫り上げられた幻想的な形を持つた支那の彫刻を見てゐるやうな、混沌と熱情と好奇心とが錯綜して胸に湧いて來た。彼女は、ロイス、グラムモント伯爵に對する清廉な犠牲心のみを持つたサチ・ココの様々の行ひを、順序よく彼に話して行つた。

「ちよつと、ワアルワアーラ・ワネーリエウナさん。(譯者註、ワアーレンカの本名、ワアーレンカは愛稱)

と彼は言葉を挟んだ。「あなたはロシアの作家の小説をお読みになつたことがありますか？」

「え、読みましたわ！でもわたし好きませんの——詰らないんですもの、あんまり詰らないんですもの！ロシアの作家はいつも、だれもよく知つてゐるやうなことばかりを書くのですもの。何の興味もありませんわ、そして書いてあることはみんな實際のことばかりなんですもの。」

「でもあなたは、實際のことを好みませんか？」とイポリット・セルゲーエヴィチは親切に訊いた。

「まア、おつしやる迄もないこと！わたしはいつも實際のことばかりを話しますわ、その人と面と向つて真直ぐに、そして……。」

彼女はちよつと躊躇して、考へてからかう訊いた。

「それはいいことでせうか？それがわたしの癖なのですがかういふわたしは人に好かれるでせうか？」

彼は、そのことに就て何かを言ふ暇がなかつた。といふのは彼女は性急、大きな聲で次のやうなことを彼に命令したからであつた。

「舵を、右の方へ……はやく！向うの、オーク樹の方向へ……まア危ない人！」

舟は彼の舵通りに動かなくなつた。そこで、オールを持つて力一杯に水を掻いたが、舟は横さまに岸へ走つて行つた。

「大丈夫、大丈夫。」と彼女は言つて、急に立ち上り、岸へヒラリと飛び移つた。

イポリット・セルゲーエヴィチは、やうやつと聲を出して、両手を彼女の方へ伸した。が彼女は、鎖を持つて済して立つたまゝ言ひ譯するやうに彼に訊いた。

「びつくりさして？」

「あなたは、水の中へ飛び込むのぢやないかと思つたよ。」と、彼は柔かに言つた。

「たれが水の中へなんて落ちるのですか。もつとも、こゝはそんなに深くはありませんけど」と彼女は自分に言ひ聞きをして、下を見ながら舟を岸の方へ引つ張り寄せた。彼は艫の所に坐りながら、彼女の事は自分がしなければいけなかつたのだと思つた。

彼が堤の上によつて、彼女の傍に立つと、

「あんな森を見たことがあつて？」と彼女は言つた。「こゝは素敵でなくつて？セント・ペテルブルグの郊外にはあんな美しい森はないでせう、あつて？」

二人の前には狭い道がついてゐた。その道は様々の大きさの樹の幹で両側から圍まれてゐた。足の下には、百姓だちの馬車の車に碎かれた、傷だらけの木根がいつばいに匍ひ廻つて居り、頭の上には、樹枝の厚い天幕が張られて、そここゝからは、高くすんぬけた蒼い空が覗かれた。太陽の光線は、ヴィオリンの絃の如く細く、宙に震へながら狭い緑の回廊を斜めに横切つてゐた。朽ち葉や、草や、樺の木匂ひが四邊に漂つてゐる。いろいろの小鳥が飛ぶ、それが、森の中の嚴かな静けさを破つては、快活に歌ひ、氣忙はしく囀つてゐる。何處かで啄木鳥が木を叩いてゐる、蛛がぶんぶんなり廻る、そして二人の前には、道案内でもするかの如く、二匹の蝶が、互ひに追ひつ追はれつしながら飛んで行つた。

二人は静かに歩を移して行つた。イポリット・セルゲーエヴィチは黙つてゐた。そして、彼女が親しげに話してゐる間中、自分の思想を發表してゐる彼女の獨創的な話に對して横槍を入れようとはしなかつた。

「わたしは百姓の生活を書いたものは好きませんの。百姓だちの生活の中にどんな興味があるものでせう？わたしは百姓だちをよく知つてゐます、そして百姓だちと一緒に暮してゐます、けれど、作

家だちは、百姓のことを正確に書きません、ほんとうのことを書かないのです。非常に虐げられてゐる人間のやうにしか書かないのです。けど、ほんとうの百姓はたゞ下賤なだけですわ。哀れんでやるやうな所は一つもありませんわ。百姓だちはたゞ一つの事をしようと思つてゐる切りなの——それはわたし達を欺すこと、わたし達から何かを盗まうすることです。そして、いつもしつこく貰ひに来て、いつもぶつぶつと泣きことを言つてゐて、ほんとにあの人間共は氣持が悪くて、汚なくて……その辯俐巧で、いゝえ！俐巧どころか、するいの。あの人間共がしよつちうどんなに私を苦しめてゐるかは、あなたにはお解りにならないでせうね！」

彼女はもう話に夢中になつて、憤怒と不愉快の情を顔一ぱいに現はしてゐた。言ふまでもない、百姓達が彼女の生活の大部分を占めてゐた。で彼女は憎まずには百姓だちのことを話せなかつたらしかつた。イポリット・セルゲーエヴィチは、彼女の力ある議論に驚いた。が、彼女の意見からかうした議論を聞かうとは思はなかつたので、かう言葉を挟んだ。

「あなたはどこの國の小説が一番好きですか？」

「そりやフランスですわ」と彼女は首を振つた。「ロシアの小説の主人公は下賤でのろまで、いつも

何かを呪つて居て、そしていつも何か譯の解らないことを考へてゐて、その辯誰のこと、哀れに思つてやつて、それでゐて自分が一番哀れな、實に非常に哀れな奴なのです！その主人公は先づ考へるの、そして話すの、やがて戀の告白を始めるの、それからまた考へるの、やがて結婚するの……結婚すると、妻に向つて意地悪の無茶を言つて、たうとうその女を棄てゝ了ふの……そんな筋にどんな興味があります？わたしは興味どころか腹が立ちますわ。何故つて、それは詐欺師とおんなじですもの——もしそんな主人公でなかつたら、きまつて、やくざの案山子見たいな男が小説の中に突つ立つてゐますわ。そしてロシアの小説を讀んでゐる間は、決して現實の生活を忘れることが出来ませんもの——それがいゝのでせうか？でも、フランス人の作を讀むと、作中の人物に對して身震ひを感じます、或ひは同情します、惱みます、作中の人物が闘つてゐる時は、自分も闘ひたくなります、死んだ時は自分も一緒に泣きます……そして燃えるやうな興味を以て、小説の終りまで讀み通します、讀んでしまつた後でも昂奮の餘り殆んど泣きさうになります、何もかも泣かせやうなことばかりですもの。誰だつて生きてはゐますけれど——けれどロシアの小説を讀んだのでは、人間はどうして生きてゐるのか全く解りません。特別なものを書くことができないのに、何

故小説なんぞ書くのでせう 實際、それは不思議ですわ！

「ワアルワアラ・ワシーリエウナさん、僕はあなたのおつしやることに對して言ひたいことが澤山あるのだが……。」と彼は、彼女の暴風の潮のやうな辯論を止めた。

「さう、そんなら言つて！」と彼女は微笑しながら大きな聲で言つた。「勿論あなたはわたしの議論を打ち破るでせう……。」

「言ひませう。が先づ始めに訊きますが、あなたはロシアのどういふ作家のお讀みになりましたか？」

「そりやいろいろの作家のを……でも、どの作家も似たり寄つたりですわ。たとへば、サリースは……彼はフランスの作家を眞似てゐますわ、しかも下手に眞似てゐますわ。彼はロシアの人物を描いてゐますけれど、そんな人物に就てだれが興味のあることを書けませう？それからわたしは他の澤山の作家のを読みましたわ、——モードフツエフやマーケツツチやブーシキンヤ——でもその名を聞いただけでも、その作家たちの書くことは面白くないことがお解りでせう！あなたはそんな作家たちのお讀みになつて？でもフランスのフォーチン・ド・ボイスゴビイのは？ボンソン・

ダ・ターレールのは？アーセン・ハウツセイのは？それからピエール・ザコンネのは？チユマス・ガブリウ・ボルネのは？そりや素敵ですわ！それで……わたし、小説の中で一番好きな人物は悪漢なんですの、いろいろの悪い計畫を實にうまくたくらむ人物で、人を斬殺したり、毒殺したりする人物で、賢くて、強くて……それ等がたうとう捕縛される段になると、わたしはすつかりのぼせ上つてしまつて、もう少しで泣き叫びたくなることさへあるの。あらゆる人が悪漢を憎みます、凡ての人間が悪漢に對抗します——悪漢は凡ての人に對抗して只一人ですわ、あれこそ、英雄ですわ！他の正しい人々は、勝利を導くともう眠になりますわ……そして、大ていの場合、あなたも御存じでせうが、さうした人々が、何かを強く欲求してゐる間、何處か遠い未來に進んでゐる間、何物かを求めてゐる間、そして自分自身を苦しめてゐる間は興味がありませんが……その目的物に達して、そしてそこで止つてしまふと、もうその人達にはちつとも興味がありませんわ……寧ろ無味乾燥ですわ！」

彼女は自分の話に昂奮して、恐らくはそれを誇りに思つてゐるのだらう、彼と並んで靜かに歩きながら、首をしなやかに動かしては眼を輝かしてゐた。

彼は彼女の顔を覗き込んだ、そして苛々しながら頻りと首をねぢ曲げては、彼女の心を包んでゐる所の汚ない下品なヴェールを、たゞ一掃きで除き去るやうな反駁論を考へた。しかし彼は、彼女に對して何かを答へねばならぬといふ氣持に支配されてゐながらも、またも自分の議論に夢中になつて、そして彼の前に自分の赤裸々な心を眞面目に現はす彼女を見る爲めに、その發明な獨特のお喋りをもつと長く聞いておどくなつた。彼はかつてかうしたお喋りを聞いたことがなかつた、そして彼女の凡ての話が彼の眼には忌はしく、聞くに堪へ得ないものであつたが同時に、彼女の喋つた凡てのものは、彼女の、寧ろ貪慾な美しさの爲めに、完全と言ひたい程よく調和されてゐた。彼の眼の前には、その粗野な心を現はしてゐる、一人の無骨な人間がゐるだけであつた。同時に彼の肉慾をそゝる所の誘惑的な美しさを持つた一人の婦人がゐるだけであつた。これ等二つの夫れ夫れに持つてゐる直截な力に依つて、彼はすつかり壓倒されてしまつた。そこで彼は、それ等の力に對抗する何物かを持たねばならなかつた。もしさうしなければ彼は——それ等の力の爲めに彼女と會ふ前迄平靜に暮して來た自分の考へや氣分の常軌を踏み外してしまふだらうと思はれのであつた。彼は理論に對しては明確な頭を持つてゐた。そして彼自身の周囲の人々とは立派に議論し得た。し

かし今、下品な小説や、百姓や軍人の社會や、酒飲みの父などに依つてすつかり破壊されてしまつた所の彼女の靈魂を、清淨化し、そしてその精神を正しき道に進ませようとする爲めには、どういふ風に話すべきであらうか、そしてまた何を言ふべきであらうか？といふことに迷つてしまつたのである。

「まアわたし、何て馬鹿なことをおしやべりしたでせう！」と彼女は、溜息をしながら叫んだ、「不愉快だつたでせう、さうでなくつて？」

「いや、しかし……。」

「ねえ、わたし、あなたと知つて非常に嬉しいわ。あなたがいらつしやらない前は、わたし話相手がなかつたのですもの。あなたの妹さんはわたしを好かないのよ、いつもわたしのことを怒つてばかりゐるのよ……わたしが、お父さんにウオツカを飲ませるからでせう、それにわたし、ニコンを打つたからでせう……。」

「あなたが？ニコンを打つた？え……どうしてそんなことをしたんです？」イポリット・セルゲエヴィチは慌てゝさう訊いた。

「ほんとうに何でもなく、たゞお父さんのカザツクの鞭で打つたの、それだけのことなのよ！それはね、みんな穀物を扱いてゐたのよ、そりや馬鹿に忙がしかつたの、それなのにニコンは、あの動物は、酒を飲んでゐるんですもの、わたしどうして怒らずにゐられませう！みんなが仕事をどんどんやつてゐるのに、そしてニコンは八方のことに眼を配らねばならないのに、どうして酒なんぞ飲んでゐられるでせう？働いてゐる百姓達は、あの人達は……。」

「しかし、ねえ、ワアルワアラ・ワシーリエウナさん。」と彼は、できるだけはつきりと、しかし優しく言ひ始めた、「使用人を打つといふことはいふことでせうか？それは高尚なことでせうか？考へてごらんなさい！あなたが崇拜してゐる小説の人物は、自分を崇拜してゐる部下達を打ちましたか？……サチ・ココは……。」

「お、その人物打ちました、ほんとうに！或る日、ルイス伯爵は、ココの耳の上を平手で打ちました。それはわたしも哀れな小さな軍人、ココが可哀相になりましたわ。けれど、打たないなら、どうしたらいいのです？わたしが打つことが出来るといふことはいふことですわ……わたしは強いから出来るのですもの……わたしがどんな筋肉を持つてるかごらんなさい？」

彼女は腕を肘の所から折り曲げて、それを誇らしげに彼の前に差し出した。彼は、彼女の腕の上に自分の手を重ねて、指で強く押した。が直ぐに思ひ返し、慌て、顔を赧らめながら周囲を見廻した。樹木ばかりは黙つて立つてゐた、たゞ……。

大抵の場合、彼は女の前では謹直ではなかつた、がこの女にだけは、その單純さと眞實の爲めに謹直にさせられた。たとへ彼は、危ないと思はれる感情を彼女にそゝられたにしても。

「あなたは羨ましい健康を持つてゐますね。」と彼は言つた。そして胸の所のガウンの合せ目を掻き合せてゐる彼女の小さな陽に焦けた手を、穴のあくほど、また物思はし氣に見詰めてゐた。「そしてあなたは非常に善良な心を持つてゐると思ひます。」と自分にも思ひがけないことを言つてしまつた。

「わたしには解りませんわ！」と彼女は片手を振りながら、「殆んど——わたしは個性を持つてませんもの、時々、わたしは自分の嫌ひな人達に對してさへ恥かしくなることがありますわ。」

「ほんの時々ね？」と彼は笑つた、「しかし確かに、大ていの人はいつとも憐憫と同情を受けてゐるものですね。」

「どうして？」と彼女も笑ひながら訊いた。

「大ていの人、非常に不幸であるといふことがお解りになりませんか？たとへば、あなたの知つてゐる百姓だちのことを考へてごらんさい。彼等にとつては、生きるといふことはどんなに困難なことか知れないのです。そして彼等の生活には如何に多くの不義、災難、苦惱があるか知れないのです。」

彼はこれを熱烈に叫んだ、と彼女は彼の顔を注意深く見守りながらかう言つた。

「あなたがさうおつしやるなら、それは非常に最もなことか知れません。けれど、あなたは百姓だちのことを知りません、あなたは田舎に暮したことが有りませんもの。百姓だちは不幸です、それはほんとうです——けれどそれを鬼や角いふ必要はないでせう？百姓だちは狡猾ですもの。それに、だれだつて彼等が幸福になるのを邪魔しやしませんわ。」

「しかし彼等は、自分の空腹を充分に充たすだけのパンも持つてゐないのです！」

「わたしはさうは思ひませんわ！随分澤山のパンを持つてゐますわ……。」

「なるほど彼等は随分澤山持つてはゐるでせう！しかしまだ随分澤山の土地が外にあります、一人

で一萬デシヤチナ（譯者註。一デシヤチナは英國の二・七〇エーカーに當る。一エーカーは我國の四畝二十四歩に當る）も所有してゐる人々があるのです。たとへば、あなたはどれだけの土地を所有してゐますか？」

「五百七十二デシヤチナ……でも、それをどうなさるのです？ そんなこと出来ることでせうか？……、わたしのことをきいて下さい！ それを百姓だちに呉れるなんて出来ることでせうか？」

彼女は、大人が子供を見るやうな眼付で彼を見詰めた、そして柔かに笑つた。この笑ひは彼を困亂させそして怒らせた。彼の心の裡には、彼女の考への誤りを正さうとする欲求が閃めいたからであつた。

で彼は、明瞭に、稍々鋭くさへ言ひながら、彼女に話し始めた。即ち財産の分配の不公平に就て、大多數の人間の権利の缺除に就て、生きる爲めの僅かの場所、或ひは一切のパンに對しての命懸けに争闘に就て、或ひは富者の勢力と貧者の救ひ無きことに就て、それから精神——人生に於ける指導者である精神が、長い長い間の不義不正の爲めに破壊されてしまつたことに就て、或ひは勢

力のある人間に取つてのみ有利である所の、偏執を持つた軍隊に就てなどを。

彼女は、彼と並んで歩きながら、黙りつゝけてゐた。そして好奇心と驚きを以て彼を見守つてゐた。

二人を圍んで、森のほの暗い静寂が漂つてゐた。その物悲しい調子を壊さずに、何かの物音がその静けさの中を過ぎて行つた。こやなぎの葉が細かく震へてゐる、そして木々は何物かを、もう我慢ができない程熱心に待ち望んでゐるかのやうであつた。

イポリット・セルゲーエヴィチは、はつきりと言ひ出した。

「誠實な凡ての人間の義務は、人間の頭腦や、精神を奴隷とする者との争闘に助力することである。そしてその争闘の苦しみを終らせるか、でなければその争闘の進行を促進させるかに努力せねばならない。天才の勇壯な行爲はさういふ場合に必要なのです。そしてあなたが探し求めてゐた所の勇壯なる行爲はこの争闘の中に在るのです。それ以外に——勇壯なものはありません。そしてこの争闘の英雄たちは、人を尊敬させ、人の模範となるべき價值を持つたもののみです……あなたはあなたの注意をこの點に明瞭と向けなければなりませんよ。ワールワアラ・ソシーリエウナ、あなた

の求むる英雄だちはかうした人々の中に求むべきです、あなたの精力はさういふことに使はるべきです……………僕にはあなたが、眞理を受け容れることを飽くまで拒む人になるやうな気がしてなりません！しかし、何よりも先にあなたはもつと深山の本を読まねばなりません、そして人生に於ける眞實の姿を理解しなければなりません……………突想で汚なくされた……………あゝした下品な小説は火の中へ投げ入れてしまわねばいけません……………」

彼は話を中止し額を拭つて——長いお喋りに疲れもしたので——彼女の返事を聞かうと待つてゐた。

彼女は自分の眞直ぐ前の遠くの方を、眼を細めて見詰めてゐた。その顔には樹影が顛へた。五分間ばかりの沈黙の後、彼女は靜かにさも感心したやうな言葉で、

「まアあなたのお話は、何て立派でせう……………大學にゐるだけだつて、そんなに立派にお話することは出来ないでせうね？」

若い學者は失望の溜息をついた。そして彼女の返答に對する期待は、彼女に對する鈍い怒りと自分に對する憐みとに代つてしまつた。實に取るに足らぬ僅かの理窟しか持つてゐない凡ての物に對

して、あれ程に解り易い明確はつきりしたものを彼女はどうして理解し得ないのであらうか？それとも彼女の感情の中心を突き得ないのは、彼の言ふことの中に明らかに何か缺けてゐるのだらうか？

「あなたはほんとうに立派にお話しなさいます！」と彼女は彼の返答を待たないで再びさう言つて深く息をした。その彼女の眼には非常な満足があることを彼は讀んだ。

「しかし僕はそんなに偉いことを話したでせうか？」と彼は訊いた。

「いゝえ！」と若い娘は、考へることもなしに答へた。「たとへあなたは學者でもわたしはあなたと議論しますわ。何故つて、わたしだつてちつとは理窟を知つてゐますもの！あなたは、人間は恰度一つの家を建てゝゐるやうなもので、どの人間も働くことに於ては平等だといふのと同じ意味のことを言ひましたわね。従つて人間ばかりでなく、凡ての物が——煉瓦も、大工も、材木も、家の主人も——凡てのものが平等だといふのと同じことを言ひましたわね。けれどそんなことが言へるでせうか？百姓達は働かねばなりません、あなたは教へなければなりません、そして政治家は、人民が當然爲すべきことをしてゐるか如何かを見る爲めに監督しなければなりません。それからあなたは人生は戦ひだとおつしやつたわね……………でもその戦ひは何處にありますの？あべこべに人々は非

常に平和に暮してゐるぢやありませんか。でも、もしも人生が戦ひならば、勝利を得た人々もなければなりませんわ。それに、公德とはわたしの解らないものの一つですわ。あなたは、公德とは凡ての人間の平等に依つて成り立つものだと言ひますけれどそれは眞實ではありません！わはしのお父さんは陸軍大佐です——お父さんがどうして、ニコンや百姓達と平等だと言へませう？そして、あなたは——あなたは學者です、けれどあなたが、わたし達のロシア語の先生と平等でせうか？その先生はウオツカばかり飲んで赤い顔をして、頑固で、鼻の穴をまるで喇叭を吹くやうにブーブー鳴らす先生と、ハ、ハ、ハ、ハ！」

彼女は、自分の議論は反駁され得ないものと考へてゐるかのやうに得意になつて話した。で、彼は彼女の楽しさうな議論を賞讃した。また、彼女にかうした喜びを起さしたといふことで、自分にも満足を感じた。

然し彼の心中では、言葉では充分に説明し得なかつた自分の思想が彼女に向つてどういふ風に働かかけて行つたかといふ問題を解かうと力めた。

「わたしはあなたが好きです、けれど嫌ひな人もあります……………それで何處に平等があります

の？」

「あなたは僕が好き？」とイポリット・セルゲーエヴィチは、寧ろだしぬけに訊いた。

「え、……………非常に！」と彼女は頭を力強くうなづかせて、そして直ぐにかう訊いた。

「それをどう思つて？」

明らかな凝視を以て彼を見詰めてゐる彼女の無邪氣な眼を見て彼は吾れ知らずびつくりした。

「これがこの女の媚び方なのだらうか？」と彼は考へた。「この女は女としての自分自身を知る爲めに多くの小説を讀んだに違ひないのだ……………」

「あなたはどうして今のやうなことをお訊きになるの？」と彼女は奇好心の眼を以て彼を見守りながら言つた。

彼女の凝視は彼を困亂させた。

「どうしてつて？」彼は肩をゆすつて、「それが自然だと思つたからです。あなたは女……………僕は男ですもの……………」彼は出来るだけ優しく言つた。

「それで、それがどうなの？結局あなたがそんな事をお訊きなさる譯が一つもないぢやありません

か。どうせあなたは、わたしと結婚しようとはなさらないでせうから！」

彼女はこの言葉を、彼の心を亂しもせず、単純に言つた。この言葉は單に彼の心を打つた、そしてその言葉の力は、彼の盲目的な本質的な考へを満足させるには何等の役にもならなかつたが、彼の頭腦の働き方を他方へ轉換させる役には立つた。そこで彼は冗談の調子で彼女に言つた。

「そんなこと誰が知つてます？……そして、それから……人を好かうといふ欲求と、結婚しようといふ欲求と、又は結婚したといふこととは、同じではありませんよ、それはあなたもしつかり知つて置かねばなりません。」

彼女はだしぬけに大きな聲を出して笑ひ出した。彼はその笑ひ聲ですぐに元の平靜に返ることが出来た。そして彼は心の中で、今の自分を憎んだ、彼女をも憎んだ。彼女は胸を顫はしながら、豊かな喜び聲をあげて快活にも四邊の空氣をひよかせた。しかし彼は黙つてゐた、そして罪を犯したものと如くに、自分の言つた冗談に對して復讐心を持つた。

「おゝ？それぢや、どんな……どんな奥さんをお世話しませうね！滑稽ですわぬ……駝鳥と蜂

が夫婦になつたやうではね！ハ、ハ、ハ！」

そこで彼も笑ひ出してしまつた——それは彼女の珍妙な比較に對してとなく、彼女の心を動かした原因が解らなかつた自分自身に對してとあつた。

「あなたは魅力のある娘です！」と彼は眞面目に言つた。「あなたのお手を貸しなさい……あなたの歩くのは馬鹿にのろい……僕が引いて上げよう！もう家へ歸る時間ですよ……もう遅いです、僕達は四時間も歩き廻つてゐたのだから……エリザウエータ・セルチーエウナが、僕だちを怒つてゐるに違ひませんよ、夕飯に遅れたもので……。」

彼等は引き返した。イポリット・セルゲーエヴィチは彼女の持つてゐる謬見を正してやらねばならないと思つた。けれど彼女が傍にゐる爲めに、何故か自分の思つてゐる通りのことを言ふことが出来なかつた。しかし心の裡に呆んやりながらも酸酵してゐる譯の解らない不安が、彼女の議論を靜かに聴かうとする心を邪魔し、そして彼女の議論を断定を以て拒否しようとしてゐるので、先づその不安を心の底に押し込めてしまふ必要があつた。でもしこの妙な力のない名のつけようのない感覚が彼の心を邪魔しなかつたならばその冷靜な理論を以つて、彼女の無智な無用物を彼女の頭

腦から取る去ることは實に容易なことであつたのである。その名のつけようもない感覚とは何であつたか？それは、彼女には全く無關係であり、且つ彼女の思想の根本には立ち入ることを好まない所のものであつた。しかしかうした責任の回避は、自己の主義に忠實である者に収つては恥しいことである。彼はかうした考への中に頭を突つ込みながらも感情に超越した精神力の優越を深く信ずることが出来た。

「今日は火曜日でせう？」と彼女は言つて、「さうね、勿論。すると、けふから四日目に色の黒い小さな紳士が来るでせう……………」

「どなたが来るんですつて、それも何處へ、ええ？」

「小さな色黒の紳士で、ベンコフスキーさんといふ方かね、この土曜日に來ることになつてゐますの。」

「どんな譯で？」

彼女は彼を探るやうに見守りながら笑ひ始めた。

「御存じないの。その方は官吏の……………」

「あゝさう、妹から聞いた……………」

「妹さんがあなたにおつしやつたの？」とワアーレンカは言つて元氣づきながら、「それぢや——二人は直ぐ御結婚なさるのですか？」

「あなたは何を言ふんです？どうして彼等は結婚するのかね？」とイポリット・セルゲーエヴィチは心亂れてさう訊いた。

「どうして？」とワアーレンカは言つて、少し慌てゝ、急に赤を赧らめた、「どうしてかわたしは存しませんわ。でもさうするのはいゝ事なのですわ！けど、あなたがそれを御存じないなんてそんなことがあるでせうか？」

「僕は何んにも知らなかつた！」とイポリット・セルゲーエヴィチは不意にきつぱりと言つた。

「それだのにわたしは話してしまつたわ！」と彼女はがっかりしたやうに言つて、「でも素敵なことですわ、ほんとうに！どうぞ仲好しのイポリット・セルゲーエヴィチさん、その事に就てはあなたは知らないことにしてゐて下さいな……………わたしは何んにも申し上げなかつたことにしてね！」

「よろしい！だが失敬したね、僕はほんとうに知らなかつたのだよ。とにかく僕はいま或る一つの

事件を知つたのだ——妹がベンコフスキー君と結婚しようとしてゐることを……それでいゝだらう？」

「えゝ、さう！でもね、妹さんが御自分でその事をあなたにおつしやらなかつたのですから、或ひはそんな事はないかも知れませんわ。あなたは今のことを妹さんにはおつしやらないでせうね？」

「勿論言ひやしない！」と彼は誓つて、「僕はこゝへ、葬式をして来て、結婚式に臨むといふことになつた譯だね、面白いもんだ！」

「どうぞ結婚式のことには就ては一言も被言らないで下さいね！」と彼女は彼に嘆願して「あなたは何んにも御存じないのでありますもの。」

「そりやほんとうにさうだ——所で、ベンコフスキー君といふ人はどんな人だね？それを訊きたいね。」

「そりや御存じなさるがいゝわ！そのお方は、どつちかと言へば色の黒い、優しい、無口な方ですの。ちつちやい眼と、ちつちやい唇と、ちつちやい唇と、ちつちやい唇と、ちつちやい唇と、そしてちよつとした、嬌者よ。やさしい小唄が好きで、小さなチーズのパンが好きな人。」

「さう、で、あなたはその方を好かないのだね？」とイボリツト・セルゲーエヴィチは、その男の外貌を耻しめるやうな彼女の説明を聞いて、その男に氣の毒に思ひながらさう言つた。

「そのお方もわたしを好かないの？わたしは……わたしには、ちつちやい、やさしい、おとなしい男などは我慢が出来ませんわ。わたしの好きな男は、丈の高い、強い男でなければいけませんわ大きな聲で話をして、大きな火のやうに輝く眼を持つてゐて、大膽な情熱を持つてゐて、そして人の迷惑なんてことは知らないやうな男、大きな抱負を持つてそれをきつと實行するやうな男——それがわたしの好きな男ですわ！」

「だがそんな男はもうゐないでせう！」とイボリツト・セルゲーエヴィチは、冷淡に笑ひながら言つた。彼は、男に對する彼女の考へに對して、不愉快を感じ、そして腹が立つたのであつた。

「まるでゐない筈はありませんわ！」と彼女は確信を以て叫んだ。

「しかしワアルワアラ・ワシーリエウナさん、あなたはまるで野獸のやうな男をいゝと思つてゐるのですね！そんな怪物が何處に人を惹きつけるやうな所があるのです？」

「そりや野獸では全然ありませんわ、強い男です！力——人を惹きつけるものはこれです。近頃の

男はみんな、リウマチスや、咳の病や、いろんな病氣を持つて生れついでゐるのですもの——それで立派だと言ひませうか？たとへば、顔かほ面めんだらけの紳士、郡長のコクヅツチのやうな、でなければ綺麗な小ちやい紳士ベンコフスキーのやうな男、そんな男を亭主に持つなんて、何處に興味がありますの？猫背の、ホツ草の莖のやうにひよろひよろした門番のムウキヒン、でなければあの商人の悴の、でぶでぶ肥つた、喘息持ちの、禿げ頭の赤鼻のグリシヤ・チャーノネボフ、あんなやぐさ亭主からはどんな子が出るでせう？ねえ、人は……一人であつてはならぬといふことは考へねばならないこととせう？何故つて子供を産むことはほんとうに重大な仕事ですもの！それなのにやくざな男共はそれを考へませんわ……彼等は何んにも愛さないので。彼等は何んの役にも立ちません、だからわたしは……、もしもそんな男と結婚したなら、その男を擲つてやるわ！」

イポリット・セルゲーエヴィチは、彼女の言葉を遮つて自分の説を言ひきかした。即ち、男に對する彼女の考へ方は一般に間違つてゐる、それは彼女が今迄男といふものに殆んど接してゐないからである、そして、彼女が今話した男だちのことでも、單に外的な見方からのみ見てはならない——それは正しくないことである。たとへ、醜い鼻を持つた男でも立派な驢を持つてゐるかも知れぬ、

顔は面かほだらけでも輝きらかしい心を持つてゐるかも知れぬ、といふやうなことを言ひきかした。

彼は、いま彼女の言つた言葉の真相を知ることが骨の折れることであり六ヶ敷しいことであると思つた。彼が彼女と會ふ迄は、彼は單にそれ等の男達の存在のみを知つてゐたのであつた。のに、今はそれ等の男達は凡て汚ないぼろくそ男に見えて來たのである。それ等の男達は凡ては彼女心に合はず、彼女はまたさうした男達を受け容れようともしないのだらうと彼は思つた。

「川へ來てよ！」と彼女は、彼の言葉を遮つて喜ばしさうに叫んだ。

そこでイポリット・セルゲーエヴィチはかう思つた。

「俺が黙つたので、この女は喜んでゐるのだ。」

二人は向ひ合つて坐つて、再び川を漕ぎ下つた。ワアーレンカはオールの柄を握つて、速かに、力一ぱいに漕いだ。水は舟の下で、ゴロコロと鳴り、小波は岸の方へ寄つて行つた。イポリット・セルゲーエヴィチは、舟の移るにつれて動く岸の景色を眺めてゐた。彼は、けふの散歩の道々、喋つたり聞いたりしたことですつかり疲れてゐた。

「ねえ、まア何て舟が速いでせう！」とワアーレンカは言つた。

「さうね。」と彼は、彼女の方を見向きもしないで簡単に答へた。が彼女を見なくつても、彼女の身體がいかにか誘惑的に曲り、その胸がいかにか堪らなく波打つかを眼の前に描くことに於ては何の變りもなかつた。

公園が見えて来た……間もなく二人は並木道を歩いてゐた。と、エリザウエータ・セルゲーエウナの優しい姿が、意味あり氣に微笑みながら、二人を迎へに來たのに會つた。彼女は手に何かの新聞を持つてゐた。

「まア、長い御散歩でしたわね！」と言つた。

「長かつたでせう！その代り、うんとお腹がすいちまつて、わたし——ブツ！わたしあなたを食べちゃいます！」

そこでソニーソソカは、エリザウエータ・セルゲーエウナが叫ぶのも構はずキヤツキヤツと笑ひながら、彼女の腰を抱へて、自分の周囲を輕さうにくるくる廻したりした。

夕飯はまづくてそして退屈であつた、何故つて、ワアーレンカは空腹を充たすことに夢中になつてゐて、物も言はないし、エリザウエータ・セルゲーエウナは彼のことを怒つてゐるし、彼は彼で、

しよつちう自分の顔に注いでゐる妹の見探るやうな視線に氣をつけてゐたので、

夕飯が済むと直ぐに、ワアーレンカは自家へ退却した。そしてイボリツト・セルゲーエヴィチは自分の部屋へ退却して長椅子の上に長くなり今日の様々の印象を思ひ浮べ始めた。彼はその日の散歩の出來事の小さな端々まで思ひ浮べた。その端々が何か妙にごちやごちやした沈澱物を造り上げてゐるやうに感じた。がその沈澱物も、自分の精神と感情のしつかりした調和の中に順次に食はれて行つた。彼は自分の氣持ちの中に、或る有形的の崇高ささへ感じた。その有形的の崇高さは、不思議な重さを以て彼の心を壓迫するのである——といつの間にか血液が凝結してしまつて、いつもより遙かにのろく循環してゐるかのやうな氣がして來た。これも一種の疲勞であつた。それが段々と逆戻りを始めると、未だ何の形ともならない或る欲求の前觸れとなつて行つた。さうしてこれは名のつけやうのない感覺のまゝで止つてゐるばかりで、それは堪らなく不愉快であつた。その不愉快さはそれに名をつけようとするイボリツト・セルゲーエヴィチの努力をも無駄にしてしまふのであつた。「この混亂が無くなる迄は、この名のない感覺を分解することを止めてゐなければなるまい。」彼はかうした結論に到達した。

しかし一方に鋭い不満の念が顔を出して来た。同時に自分の情熱を支配する能力を失つたその日の自分を責める心が湧いて来た。またその日の自分が、眞面目な人間としては適はしくない態度を示したといふことに對しても責める心が湧いて来た。彼は、獨りである時には人と相對してゐる時より遙かに嚴肅で、そしていつも確乎してゐるのであつた。茲に於て彼は今、自分自身を吟味せざるを得なくなつた。

言ふ迄もなく、彼の若き女は恍惚たる美人である。しかし彼女を一目見るや否や、何かかうある混亂した感情の暗い渦の中に引き込れて行く——さういふ力が彼女には餘り多分にあり過ぎると彼は思つた。しかしおきやんであること、個性の力がないといふことで、彼女がさう立派な女に見えなかつたことは事實である。しかも彼女は彼の肉慾を強烈に刺戟した——それは確かである、しかし彼はそれに對しては飽くまで闘はねばならないと思つた。

「俺は闘はねばならぬか？」だしぬけに、さうした短かい鋭い質問が彼の頭の中に閃いた。

彼は眉を擧め、そしてその質問を、まるで自分以外の誰かから問はれでもしたやうに、自分の心をその方へ向けた。今迄は如何なる場合に於ても、彼の心の裡に起つてゐたものは、女に對す

る情熱の發現などではなく、寧ろ、女との意見の衝突に依つて耻しめられた精神の反抗であつた。即ち、その反抗なるものが、恰も子供のやうに微弱である爲め、征服者として邁進し得ないところの精神の反抗であつた。彼は、彼女と具體的のことを話さなければ駄目だと思つた。何故なれば彼女は理論的の議論は理解し得ないことが明らかであるからであつた。彼の義務は、彼女の頭腦に滲み込んでゐる所の粗野な概念を根絶し、その粗雑な頑固な空想を破壊することであつた。彼は、彼女のさうした謬見を持つた凡ての心を剝ぎ、そしてその靈を純化して清淨なものとしなければならぬと思つた。さうしたならば彼女は、物の眞實を受け容れることが出来るやうになるだらうし、またそれを自分の裡に擱むことが出来るやうになるだらうと思つた。

「自分にそれが出来るだらうか？」全く別な疑問が再び彼の心の裡に閃めいた。そして再び彼はそれに言ひ抜けた。彼女が新らしいものを受け容れた時は一體どうなるか？またその反對に、彼の心内に既に在るものは何であらうか？兎に角、彼女の靈が、囚はれた謬見から解放された時には今迄の頑迷な、盲目な考へとは全く違つた、調和ある教養の中にすつかり滲み込み、そして今迄の二倍の美しさになるだらうと彼は思つた。

彼がお茶に呼ばれた時は、彼は既に彼女の世界を改造してやらうと固く決心してゐた。この決心は、彼の直接の責任として自分から負つたものである。で彼は、冷静に落ちついて彼女に會ひ、そして彼女の言ふこと爲ること悉くに對し嚴格な批評家となつて交際しようと思つた。

「ね、ワアーレンカさんを如何思つて？」彼がテラスへ出て行くと、彼の妹はさう訊いた。

「非常に魅力のある娘だね。」彼は眉を擧げながら答へた。

「さう？それはさうですわね……でも兄さんは、彼の女の教養のないことに氣づきやしなかつたかと思ひましたわ。」

「その點では俺は實際、びつくりした程だよ。」と彼は言葉を合せて、「しかし遠慮なく言へば、彼女は多くの點に於て、教養された女が、その教養されてゐるといふことに勿體をつけてゐるやうな女よりは遙かにいゝよ。」

「え、ほんとに彼の女は美人ですわ……そして望ましいお嫁さんですわ……實に立派な土地を五百デシヤチナも持つて居りますし、凡そ百本の建築材木も持つて居りますの。そしてその上に伯父さんの確かな所有地まで受け継ぐことになつてゐるのですよ。そしてどつちの所有地も抵當

などに入れられてゐませんの……。」

彼は、妹はやつぱり自分の言ふことはいつまでも解らない人間だと思つた。がしかし彼は、妹が何故にそんなことを言ふ必要を見出したかに就ては、自分自身に對して説明しようと思はなかつた。

「俺は、そんな見方で彼の女を見てやしないよ。」と彼は言つた。

「さうでせうとも、だから……わたし眞面目にその事を注意して上げるのですわ。」

「有りがとう。」

「兄さんは少し怒つてますのね？たしかに。」

「その反對だよ。何も怒ることがないぢやないか？」

「ほんとに何もありませんの？でも、わたし苦勞性ですから、それが氣になつたの。」

彼女は晴やかに微笑した、といふよりは取り入るやうな風に微笑した。その微笑は彼にペンコフスキー君のことを思ひ出させた。そして彼もまた彼女を笑つた。

「何を笑つていらつしやるの？」と彼女は訊いた。

「さういふお前は何を笑つてゐるのだね？」

「わたし、嬉しいのですもの。」

「俺も嬉しいのだ、恰度、二週間前に自分のつれあひを埋葬などはしなかつたやうにね。」と彼は、聲を出して笑ひながら言った。

と、彼女は急に眞面目な顔になり、溜息としてかう言った。

「きつと兄さんは心の中では、わたしが死んだ夫に對して悲しんでゐないのを責めてゐるのですわ。わたしは利己的だと思つていらつしやるのでせう？でも兄さん、兄さんはわたしの夫はどんな人だつたか御存じですわね。そして私の生活はどんなだつたかも手紙に書いて上げましたわね。わたしはしよつちう自分にかう言つてゐました、『神様！わたしは、自分の妻と、何でもない百姓の女や道行く女との區別もつかなくなつたほど酒に飲まれて酔ひどれてしまつた時の夫ニコライ・ステパノヴツチ・パネルツェフの獸のやうな肉慾を満足させる爲めに、たゞその爲めにのみ造られた女でせうか？』と」

「そんなことは言はないがいよ！」とイポリツト・セルゲーエヴィチは妹の手紙を憶ひ出しながら言つた。その手紙には、夫の性格の缺陷に就て實に多くのことが書かれてあつた。夫はリキールばかりを飲んでゐること、夫の懶惰のこと、尙ほ酒色以外の凡ての悪行などが書かれてあつた。

「兄さんはそれを疑つていらつしやるの？」と彼女は責めるやうに訊いてそして溜息をつき、「疑つたつてそれは事實です。夫はしよつちうそんなだつたのです……夫は、窓と戸の見境が無いやうな時、わたしと一緒にゐるのか、それとも誰か外の女と一緒にゐるのか、それを見分けることも出来なかつたのです！たしかに……わたしはさうした年年を過して來たのですわ……。」それから彼女は長い間、くどくどと自分の哀れな生活のことを話した。彼はそれを聞きながら、彼女が言ひたいだけ言つて了ふのを待つてゐた。と、彼のワアーレンカこそは、自分の生活に對してどんなに不平を言ふことがあつてもそれを不平がるやうなそんな女ではなからうといふことが、獨りでの心の湧いて來た。

「運命は、かうした長い間のわたしの悲しみに對して、何か報いて呉れるやうな気がしてなりませんの……きつと近いうちに——報酬がありますわ……。」

そこで彼女は口を噤み、何か問ひたげな視線を兄の方へ投げて、かすかに顔を染めた。「お前は何か言ひたいのだらう？」と彼は、彼女の方へ身體を伸して熱心に訊いた。

「ねえ……わたし他分……また結婚するかも知れませんか……。」

「そりやいゝことだらう……、お祝ひするよ……だがお前は どうしてそんなに混亂してゐるの
だね？」

「ほんとうに、自分にも解りませんか？」

「相手は誰だね？」

「もう兄さんにお話したと思ひますわ……ペンコフスキーさん……未來の長官……そしてそ
の上に、詩人で空想家……他分兄さんも彼の人の詩をお讀になつたでせう？出版しましたから
……。」

「俺は讀んだことはないよ。いゝ人かね？いや、勿論いゝ人に違ひないだらう……。」

「わたしはそれほど精巧ではありませんから、はつきりさうだと答へることは出来ませんわ。でも
自分を欺くことなく言へば、彼の人はわたしの過去の生活を埋め合せの出来る人だと言つてもいゝ
やうに思ひますの。彼の人はわたしを愛して呉れます……わたしは自分で小さな哲學を考へ出し
ましたの……兄さんから見れば卑劣醜いものかも知れませんが……。」

「臆せず哲學を考へ出すが、それが目下の流行だからね……。」とイポリット・セルゲーエヴィ
チは冗談を言つた。

「女と男とは永久に闘ふところの二種族です、……。」と彼女は優しく言ひ出した。「信頼とか、
友情とか、さうした感情などは、わたしと男との間に持つことは殆んど出来ません。けれど愛だけ
は持つことが出来ます……愛とは、こちらを非常に愛する人をこちらでは僅かにその人を愛する
者の勝利をいふのです。わたしはかつては征服せられ、その犠牲となりました……けれど今はわ
たしは勝利を得たのです。そしてその勝利の實を享樂することが出来るのです……。」

「そりや猛烈な哲學だね……。」とイポリット・セルゲーエヴィチは、ワアーレンカはそんな風なこ
とは考へることが出来ないだらうと、それを嬉しく思ひながらさう言葉を抉んだ。

「わたしの生活がそれを教へたのですわ……ね、あの人はわたしより四つ年下なの……あの人は
丁度大學を出たばかりなのよ……それはわたしに取つて危険だといふことは知つてゐますわ……
……それに、まア如何言つたらいいでせうか？つまりわたしは、わたしの財産権を少しも冒されな
いであの人と結婚したいと思つてますの。」

「さう……それで、どうなんだね？」とイポリット・セルゲイエヴィチは熱心になつて訊いた。

「それで、さうするには如何したらいいか教へていただきたいの。もし出来ることなら、わたしは彼の人にわたしの財産に關しては何の法律上の権利も與へたくないのですから……それからわたしといふ人間に關しても同じやうにしたいのですから。」

「それは法律結婚によれば、さう出来るだらうと俺には思はれるが、けれども……。」

「いゝえ、わたし、法律結婚はしたくないの。」

彼は妹を見詰めて、そして妙に氣むづかしい氣分になりながら考へた。

「なるほど、妹は伶俐者だ！もし神が男を造つたものならば、もし男なる者が神に造られたものならば、男は遂に神に嫌はれなければならぬやうに、生活に依つて造り直されてゐたであらう。」

妹は尙も結婚に就ての意見を、自信あり氣に彼に説明した。

「結婚といふものは、どんな困難をしてもちやんと譯の解つた契約をしなければなりませんわ。それでわたしがベンコフスキーさんに對してどんな手段を執るべきかはもう解つて居りますの。……たゞ、その手段を執る前に、夫の兄弟の煩さい欲求に對するいゝ方法をはつきりさしときたいので

すわ、どうぞその問題を考へて下さるな。」

「その問題を片つけることは明日にして呉れないかね？」

「もちろん、兄さんの御隨意ですわ。」

それから彼女は長い間、自分の意見を述べつゞけた。それからベンコフスキーのことを澤山澤山話した。ベンコフスキーのことを話す時は、彼女は唇に微笑を湛へながら、そしてどういふ譯か兩眼をしかめながら謙遜して話した。イポリットはちつと聞いてはゐたが、彼女のさうした運命に對した何等の同情も持てなかつたし、また彼女の話にも何等の興味も感じなかつた。

二人が別々になつた時には太陽はもう没してゐた。彼は、彼女の話にすつかり疲れて自分の部屋へ引き下つたが、彼女は今の會話ですつかり元氣づき、眼を自信あり氣に輝かしながら、家の中のことをし始めた。

イポリットは、自分の部屋へ行くと、ランプをつけて、本を取り出しそれを讀まうとした。しかし最初の頁を讀んだだけで、本など讀んでゐられないやうな氣になつた。で、彼は思ふさま身體を伸し、本をふせて、身體の具合をよくしようと椅子の中で動き廻つた。がどうも椅子が固かつた。

それで彼は長椅子の方に移つてその上に横たはつた。始めは全く何んにも考へなかつた。やがて、自分直ぐにベンコフスキー氏と知り合ひにさせられるなど思つた。彼はワアーレンカがその紳士に就て言つたことを思ひ出して思はず微笑した。

と、今度は、彼の考へることも空想することも悉くワアーレンカのことだけになつてしまつた。さうしていろんなことを考へてゐる間に彼はこんなことを考へ出した。

「ところで、もしも俺がああ美しい代物と結婚したならどんなものだらう？彼の女はたしかに興味ある妻になるに違ひない……………彼の女の口から、通俗小説の安っぽい話はしないといふ條件さへつけるならば……………」

彼は、ワアーレンカの夫としての立場になつて見て、あらゆる點から自分の位置を考へつくした後でつひに笑ひ出してしまつた。彼は理窟なしに自分にかう言つた。

「駄目だ！」

さう言つて彼は悲しくなつた。

二

土曜日の朝のこと、ちよつと不愉快なことがイボリツト・セルゲーエヴィチに起つた。着物を着てゐる時に、彼は小卓子の上のランプを床の上に突き落してしまつたのである。ランプは粉々になつて碎けて石油壺からこぼれた石油の數滴が、まだ一度もはいたことのない靴の二つにかゝつたのである。靴は勿論拭いたがしかし胸の悪くなるやうな石油の匂ひが、お茶にも、パンにも、バターにも、妹の綺麗に結つた髪にさへも漂つてゐるやうな氣がするのである。

彼の氣分はそれで大分濁された。

「その靴をお脱きになつて、陽に乾かしてごらんなさい、そしたら石油は蒸發してしまひますわ。」と妹は彼に教へた。「その間、夫のスリッパをはいてゐらつしやいね、新らしのが一足ありますから。」

「心配はいらん、石油は直き乾いてしまふよ。」

「乾くまで待つてゐるのはそりや大へんなことですわ。ほんとに、スリツパーを持つて來さしちやいけませんか？」

「いや……そんなものはかないよ。そんなスリツパーは棄てしまへ。」

「どうして？新らしいのよ、天鷲絨の……役に立ちますのよ。」

石油のことで彼は不愉快になつてゐたので、もつと言ひ合はうと思つた。

「それが何の役に立つのだね？お前ははきやしまし。」

「勿論わたしははきませんわ、けれどアレキサンダーがはくでせう。」

「そりや誰だね？」

「まア、ペンコフスキーのことよ。」

「アハ！」彼は固い笑ひ聲を出した。「なるほど、お前の死んだ夫のスリツパーの爲めには實に大した忠義だね、おまけに経済的だ。」

「兄さんは意地悪ね、けふは。」

彼女は少し怒つて、しかしその眼は非常に見探るやうに彼を見た。彼は、彼女の眼の中にそんな表情を認めて不愉快にもかう考へた。

「こいつ奴、ワアーレンカがゐない爲めに俺が怒つてゐるのだと思つてゐやがるのだな。」

「ペンコフスキーは、他分た飯迄には着くでせう。」と彼女は、ちよつとためらつた後でさう言ひ出した。

「この女は、俺に、未來の義弟に對して優しくして貰ひたいのだな。」と彼は自分に言ひ聞かしてから、

「そりや、非常に嬉しいね。」と答へてやつた。

彼の腹立しさは、壓迫するやうな不愉快の念の爲めに一層進んで行つた。しかしエリザヴェータセルゲーエウナは、自分のパンにバターを平らに丹念につけながらかう言つた。

「わたしの考へでは、經濟といふことは非常に立派なことだと思ひますの。殊に、この地上の生産物の上に生活してゐるわたし達の同胞の上に、非常な飢饉が襲つて來た時にどうしてペンコフスキーが、死んだ夫のスリツパーをはかないでゐられませうか？……。」

「そんならもしお前が夫の經帷子を取つてあつたなら、それも彼に着せようといふのだね。」とイボリット・セルゲーエヴィチは毒々しく言ひながら、煮たクリームをクリーム壺から熱心に皿へ移してわた。

「それに、わたしの夫は、相當の着物をずぶん澤山残してありますの。ベンコフスキーは決して不愉快がりませんわ。何故つて、彼の人は澤山の兄弟があるのですよ——彼の人の外に三人の小さい男と五人の女兒とがありますの。それに家の屋敷はさつと十倍の抵當に入つてゐるのですよ。ねえ、わたしは、大へん爲めになる題目を選んで、その子供達に文庫を買つて上げましたわ——その中には少しは價值のあるものもありますわ。見て御らんない、他分兄さんにも読みたいものがあるでせうから……アレキサンダーは、ほんとに僅かの月給で暮してゐるのですからね。」

「お前はベンコフスキー君をすつと前から知つてゐるのかね？」と彼は訊いて「ベンコフスキー君は厭がるだらうが、お前はその人のことを話して置く必要があるよ。」

「まる四年前から、そして……親しく交際するやうになつたのは七八ヶ月前からなの。非常にいい人だといふことが直ぐに解りますわ。大へんやさしくて、そしてすぐと馬鹿に昂奮して、それに

一種の理想家で、デカタンだと思ひますわ。けれど、大抵の若い人達はデカタンの傾向を持つてゐますわね……そして或るものは理想主義に走り、或るものは物質主義に行きますのね……わたしには、どちらも非常にいゝことだと思はれますわ。」

「僕の友人が定義した如く『百馬力の懷疑主義』を宣言する人間もゐるしね。」とイボリット・セルゲーエヴィチは眼鏡の上から覗きながら言つた。

彼女は聲を出して笑つた、そしてかう言つた。

「その言葉は寧ろ下品ですけれど、たしかに穿つてはゐますわね。實際わたし自身も懷疑主義の領分に入つてゐますもの。それは健全な懷疑主義で、凡ての能力の翅を拘束したものです……人間的生活に對する正しい意見を持つには、これは無くてはならないものなのですものね。」

彼は持つて來た本を揃へなければならぬと考へたのでお茶を急いで済しそしてそこを去つた。けれど石油の匂ひが、戸を開け放して置いて、未だ部屋中に漂つてゐた。彼は澁面しながら一冊の本を執ると、公園へ出て行つた。暴風や雷雨に濡された古木が、親し氣に寄り添つて密生してゐる中に人の心を消沈させる程の寂しい沈黙が醸されてゐた。彼は本も開かず、何んにも考へず

に、何も欲することなく、本通りの並木道を歩いて行つた。

河へ来た。そこにボートがあつた。こゝで水に映つたワアーレンカの影を見たのだなと思つた。その影には天使さながらの美しさがあつたことを思つた。

「さうだ、俺はまるで小學校の生徒のやうだ！」と彼は、ワアーレンカを思ひ出して喜んでゐる自分に氣づいてさう獨り言を言つた。

河の岸にしばらくゐる後で、彼はボートへ乗り移り、横木に腰を掛け、そして水の中の影を見守り始めた。その影は三日前には實に美しかつたのである。今日とてもそれは同じやうに美しい。けれど今日はその透き通つた背景の中に、彼の異常なる若い女の眞白い姿は現はれて來ない。イポリットは煙草に火をつけたが、直ぐにそれを水の上に投げてしまつた、といふのは、この土地に來た自分は恐らく馬鹿なことをしたに違ひないのだといふ考へがふと心に浮んだからである。實際のところ、彼はこの土地に何の用があつたのだ？それは明らかに、妹の美名を保つことを助ける爲めだけであつた。もつと簡単に言へば、何等の禮儀も盡さずしてベンコフスキー氏を家に引き入れようとする妹を助ける爲めであつたのだ。しかしそれは大した用事でないぢやないか………それ

に彼のベンコフスキーといふ男もたとへ他の事には伶俐過ぎる程伶俐であつても、もし眞實に妹を愛したのなら伶俐者だとは言へない男だ、などと考へた。

彼は半ば沈思の状態で、三時間ばかり坐つてゐるうちに、考へるには妙な風に癡痺してしまつて、その考へに判断を下すことも出來ずに、徒らに本題から迂るばかりであつた。彼は立ち上つて靜かに家へ歸つて行つた。彼は無益な時間を費したことを腹立しく思ひ、そして出来るだけ速く勉強に取り掛らうと固く決心した。彼がテラスへ近づくと、瘦せがたの若い男の姿が眼に入つた。革紐をしめ、麻の上衣を被てゐる。その若い男は並木道の方を背にして立ち、卓子の上にとんで何かを見てゐる。イポリット・セルゲーエヴィチは、これがベンコフスキーなのだらうかと怪しみながら歩みをゆるめた。やがて若い男は眞直ぐになり、しとやかな態度で額にかゝる渦卷いた髪の毛の長い房を後に掻き上げると、並木道の方へ向き返つた。

「おや、彼はまるで中世紀の騎士だね！」とイポリット・セルゲーエヴィチは胸の中で叫んだ。

ベンコフスキーの顔は卵なりで、その色は蒼白であつた。そして眼窩の中に深く落ち込んだ、大きな、巴旦杏の恰好をした黒い眼が、きつさうに輝くせい、少し面やつれして見えた。その美し

口は、小さな黒い髭の影となり、その圓い額は、丁寧にもつれさした波打つ頭髮の房に蔽はれてゐた。身體は小さく、中以下であつた。がそのしなやかな様子や、優しい骨組みや、美しい均勢やがかうした缺點を隠してゐた。彼は近視の者が見るやうな眼付で、イポリット・セルゲーエヴィチの方を見詰めた。それには人を思ひやる風があつた。がその蒼ざめた顔には病人らしい所があつた。その天鵝絨のベレッタや服装から見ても、彼は中世紀の建物の中に陳列されてゐる繪畫から抜け出して來た騎士そのまゝの姿に見えた。彼がテラスの階段を登り切ると、

「ベンコフスキーです！」と彼は低い聲で言つて、音學家のやうな長い細い指を持つた白い手をイポリット・セルゲーエヴィチの方へ差し出した。

若い學者は心から握手した。

ちよつとの間、二人は遠慮した沈黙を保つてゐた。それからイポリット・セルゲーエヴィチは、美しい公園のことを話し始めた。若い男は、簡単に、しかし丁寧に明瞭にへた。その様子には單に相手の紳士的態度に應ずるだけで、相手にはさつぱり興味を持たないといふ風があつた。

間もなくエリザウエータ・セルゲーエウナが出て來た。彼女は襟にレースのついた、ゆるやかな

白いガウンを被、腰の所に先の方が房になつてゐる長い黒い紐を結んでゐた。かうした身づくりが彼女のしとやかな容貌によく調和して、その小さなきちんとした身體を美しい姿にした。その兩頬には満足氣な色が現はれて居り、その眼には活々とした輝きがあつた。

「夕飯が直きに出來ますから……。」と彼女は言つて、「アイスクリームを御馳走しますわ、でもどうしてそんなに退屈さうにしてゐらつしやるのアレキサンダー・ペトロヴィチさん？さうさう、あなたはシュニベルト（フランスの音樂家の名）をお忘れにならなかつたでせうね？」

「シュニベルトも本を持つて來ましたよ。」と彼はちつと彼女を見ながら心おきなく答へた。

イポリット・セルゲーエヴィチは、彼の顔の表情を見て取つて、この美しい青年は、人の存在も認めないで、自分勝手なことをする男に迷ひないと思つた。そして、失敬だと思つた。

「いゝお天氣ね！」とエリザウエータ・セルゲーエウナは、ベンコフスキーの方へ微笑を捧げながら言つて、「夕飯が濟んだら歌ひませうね？」

「お望みなら！」とベンコフスキーは彼女の方へ頭を下げた。

彼は此をしとやかにしたのであつたが、それでもイポリット・セルゲーエヴィチは氣を悪くした。

「わたし非常に嬉しいわ。」と妹は媚びるやうに言った。

「君はシューベルトがお好きなのですか？」とイポリットセルゲーエヴィチは訊いた。

「僕はベートウベンが一番好きです——彼は音楽家のシュークスピアです。」とペンコフスキーは横顔を彼の方へ向けながら答へた。

イポリット・セルゲーエヴィチは嘗つて、音楽界のシュークスピアと呼ばれるベートウベンを聞いたことがあつた。その時、ベートウベンとシューベルトとを比較して見て、彼はベートウベンに對しては何等の興味も持てない妙な感じを抱いたことを憶ひ出した。

然るにこの青年はベートウベンを好むといふのだ。彼は眞面目に訊いた。

「どういふ譯で君は、ベートウベンを特に音楽家の頭に置くのですか？」

「ベートウベンは他の凡ての作曲家よりも遙かに理想家だからです。」

「さうですか、ちや君も、それを眞實の意見として考へてゐるのですね？」

「疑ふ迄もなく。あなたは非常な物質主義者ですね。」とペンコフスキーは言つて、その眼を妙に輝かした。

イポリット・セルゲーエヴィチは考へた。

「この男は議論をしたいと見えるな！しかしこの男は正道のところ美しい青年である、そして恐らくは非常に名譽を重んずるだらう。」と。

それから彼は、この理想家は死んだ男のスリッパをはかせらるべく運命づけられてゐるのだと思ふと、何だか可愛相にもなつて來た。

「それちや、君と僕とは敵同士ですね？」と彼は微笑しながら言った。

「紳士だち！」とエリザウエータ・セルゲーエウナは部屋の中から二人の方へ聲を掛けた、「あなたは達はたつた今近づきになつたばかりだといふことをお忘れにならないで下さいね……。」

女中のマーシヤは、皿の音をかちかちさせながら夕飯の食卓を用意してゐた、そしてペンコフスキーを偷み見ては、その眼に自らなる喜びを輝かしてゐた。イポリットも彼を見てゐた。そしてこの青年と交つて行くには出来るだけ優しくしなければならぬと思つた、それから主我的の會話は避ける方がいゝと思つた。何故なら彼は大抵の場合、議論しながらその極點まで昂奮するに違ひないからと思つた。しかしペンコフスキーは、眼を燃えるやうに輝かしながら彼を見詰めてゐた。

その顔は神経的に顫へてゐる……彼は明らかに、議論することを熱心に望んでゐるのであつた。そしてその欲求をやつとのことで制へてゐる風であつた。イポリット・セルゲーエヴィチはきちんとした禮儀を守る厳格なお役人のやうな人間に自分をはめ込まうと考へた。

もうテーブルに坐つてゐた彼の妹は、冗談の調子で、あたり觸りのないことをベンコフスキーの方に或ひは彼の方に話しかけてゐた。二人の男はそれに簡単に答へてゐた——一方は肉身の無遠慮な親しさを以て、他方は戀人を尊敬する態度を以て。そして三人が三人とも或るごちなさと煩はしさの氣分に囚はれて、お互に見守り合つたり自分自身を見守つたりした。

マーシヤはテラスの食卓へ最初の食物を運んで來た。

「どうぞ夕食について下さいね、紳士たち！」とエリザウエータ・セルゲーエウナは二人を招いて「あなた達、ウオツカを召し上りますか？」

「あゝ、僕は飲まう！」とイポリット・セルゲーエヴィチは言つた。

「失禮ですが私は飲みたくないですが。」とベンコフスキーは言つた。

「そんなこと構ひませんわ。でもあなたは、召し上れるの、それとも駄目なの？」

「私は飲みたくないの……。」

「物質主義者と一緒には。」とイポリット・セルゲーエヴィチはベンコフスキーの言はうとした言葉をさう考へた。

パイ付きの美味しいスープの爲めか、それともイポリット・セルゲーエヴィチの禮儀の正しい爲めか、とにかく青年の黒い眼の蔭鬱な輝きは、稍々和らげられ静められたやうに見えた。二番目の食物が運ばれると、ベンコフスキーは話し始めた。

「あなたの質問に答へた先刻のわたしの言葉が、あなたに挑戦したやうに——二人は敵同士であるやうにあなたには取れたでせうか？それだつたら失禮しました。けれど私達の交際は自由にしたいものです、そしてみんな規則のやうに守つてゐるお役人風の虚禮などはすつかり棄てなければいけないと思ひますが。」

「僕も君の言ふことは全く賛成します。」とイポリット・セルゲーエヴィチは微笑しながら答へて、

「もつと簡單であれば更らにいゝと思ひます。その筆法で、遠慮のないところを言ふならば、僕は君の率直な言ひ方を愉快に思つてゐるのですよ。」

「ですが私達は思想の根底に於ては實際敵同士ですね、でさうであるといふことが、同時にそれ自身の意義も明らかにしてゐる譯です。今あなたはかう言ひましたね——もつと簡單であれば更らにいゝと思ひますと、わたしもさう思ひます。たゞ私はそれ等の言葉に對して、あなたと反對の解釋を下すのです。」

「どういふ風にですか？」とイポリット・セルゲーエヴィチは訊いた。

「あなたの議論は、あなたの持論のまゝを眞直ぐに主張されるのだといふことに疑ひなければ。」

「勿論、僕はさうです……。」

「それなら、私の意見から考へれば、あなたの簡單といふことに就てのお考へは下等ぢやないかと思ひます。ですがその問題は差し置きませう……。」とかくあなたが、もし人生は單に思想のみを含んで、そして凡てのものを創り造すところの一つの機械だとお考へになつてゐられるならば、あなたは自分の心を冷たく感じないでせうか。そしてその心は、凡ての不可思議な恍惚たる美しさに對しては一滴の同情心もなく、その美しさを單なる化學物、即ち物質の原子の混合體と同一視して了ふやうにことはないでせうか？」

「フム……。」自分の心は自分に一番はつきりしてゐるが、僕は人生に對する偉大なる機械論を持つてゐても、さういふ冷たさは感じませんがね。寧ろその人生は凡ての空想よりは遙かに詩的ですね……。」君も御存じと思ふが人の感覺と精神の抽象的な醜態とは他人には解るものぢやありませんよ。ですから、眞の美とはどんなものかといふことも誰にも解るものぢやありませんね。どんな場合でも、それは生理的感覚だといふのが正常でせう。」

このやうにして、ベンコフスキーが相手の譚見を憐れむ調子で、愁はしげに悲しげに低い聲で話すのに對し、イポリットは、精神的の優越を意識しながらベンコフスキーの虚榮を傷つけるやうな言葉を用ひないやうにして話した——さういふ言葉は立派に教養された人の議論の中に實に屢々用ゐられる言葉で、その言葉に含む眞理は、眞の眞理に近いものであるのだが。エリザウエータ・セルゲーエウナは、二人の落ちついた話し振りを見ながら、輕やかに笑つてゐた。それから落ちつき拂つて、肉の骨を丹念に噛みながら夕飯を食つてゐた。マリーシャは戸の後から覗き見ながら二人の紳士の話を聞き取らうとしてゐるらしかつた。それは彼女の顔に緊張した表情が現はれ、眼は圓くなり、そしていつもの狡猾相な、媚びるやうな表情が失くなつてゐるのでよく解つた。

「あなたに——物質のことを言ひます。けれど、吾々の周囲の悉くのもの、及び吾々自身が、もし單なる化學物であり機械であるならば、止むことなくして働いてゐるものは何でせうか？ あらゆる處に運動があります、あらゆるものが運動です、それ以外のものは、ほんのぼつちりも有りません——もし私自身が、今迄の自分でないならば、そしてまた次の瞬間の自分とも違ふものならば、如何にして現在の自分を掴み、如何してそれを認識したらいいのでせう？ あなたも私も——單なる物質でせうか？ なるほどいつかは吾々は、腐敗の悪臭を放ちながら聖畫の下に横はるでせう……そして地上に吾々のものとして残るものは、恐らく色褪せた寫眞ばかりとなるでせうし、その寫眞は吾々の喜びをも苦しみをも誰に告げることも出来ず、そして吾々が存在してゐたといふこともやがて忘れられてしまふでせう。しかし、吾々が考へながら苦しみながら生きてゐるといふ事がたゞ消滅する爲めにのみ生きてゐるのだと信ずることは恐ろしいことではありませんか？」

イポリット・セルゲー・エイヴチは彼の言ふことを注意深く聽いてゐた、そして胸の裡でかう言つた。

「もし君が、君の信念を眞實だと信じてゐやうとも、君はやがて死ぬだらう。だがまだ君はこゝで

叫んでゐる。そして君が叫ぶのは、君が一個の理想家だからではなくして、君が薄弱な神経を持つてゐるからなのである。」と。

しかしペンコフスキーは、燃えるやうな眼で彼の顔を見詰めながら話しつゝけた。

「あなたは科學のことを話しました——それは非常にいいことです——わたしは、私を拘束する神秘の束縛をゆるめる所の偉力の前に膝まつくが如くに科學の前に膝まつきます……しかも科學の光明に依つて、私自身は私の遠い先人、その人は、雷鳴の研究はその發見者エリヂヤに負ふ所が多いといふことを信じてゐるその人と同一立場にゐることを知ることが出来ます。私はエリヂヤその人を信じやしません、しかし雷鳴は電氣の作用に依るのだといふことを知つてゐます。けれどそれを知ることエリヂヤその人より明確であるといふことが出来ませうか？ それを知ることには於て、エリヂヤよりも更らに複雑であり得ませうか？ それは運動に就てと同様に説明し得ないものです。また或る者の代用をさせようとしてはいつも失敗してゐる凡ての動力を説明し得ないと同様に説明し得ないものです。そして時には、科學の全仕事は、複雑した概念を集合することだけである——それで凡てであるといふやうに思はれたりします。それは信じてもいい事だと私は思ひます。すると

人々はかう言つて私を嘲笑します、「科學は信する必要はない、たゞ知ればいゝのだ」と。私は物質とは如何といふことを知らうとしました。すると人々は、その文字通りにかう答へます。「物質とは空間を占めてゐるものである、吾々の感ずる感覺の容觀的原因はその物質に存するのである」と。何故そのやうに言ふのでせう？それで私の疑問に對する答となり得ませうか？それでは、自分の精神の強烈なる疑問に對する解決を熱心に眞劍に求めてゐる者に取つては侮辱です。……それでは私は、存在物の目的を知らうとして——私の精神の上向も侮辱された譯です。しかし私は生きてゐます。生きるといふことは容易なことではありません。そして生きてゐるといふことが、智識の獨占者に對して明白なる返答を求める權利を私に與へてゐます——即ち、私は何故に生きてゐるのかといふ疑問に對して。」

イポリツト・セルゲーエヴィチは、すっかり昂奮しきつてゐるベンコフスキーの顔を横目に見た。そして此の青年に對しては、言つてゐることをけしかけけるやうな熱烈な感情の力を以て、青年の言葉に共鳴するやうな言葉で返答しなければならぬと思つた。しかしさうだと知ると、反つて反對して見たいやうな氣になつた。けれどベンコフスキーの大きな眼は一層大きくなり、熱し切つた哀愁

がその眼の中に燃えてゐるのが解つた。さうして彼は溜息をつき、その白い細い右腕を勢よく振り廻したり、かと思ふと顛へながら拳骨を固めて脅したり、とまた空中の何物かに掴みかゝる如くにしては力抜けしたりした。

「しかるにその疑問に對して何等の確答も與へないうちに、人はどんなに酷く生活に虐げられたでせう！それなのに人は生活を輕蔑します、その輕蔑の中に含まれてゐるものは——それは何でせうか？私だちは自信を以て人に反駁することも出來ず、その上に、人に同情することも出來ないので。何故といふに人々は皆精神上のパンを求めてゐるのに、人は彼等に否定の石を與へるからです。人間は既に生の靈を奪はれてゐます。そしてもしその靈の中に何か在るならば、それは愛や苦痛の偉大なる力ではなく、たゞ理窟の奴隷となつてゐる自分に對して、また靈の力に壓倒されてゐる自分に對して自から責める自分があるだけです。しかもその自分も今や病氣と非常な貧困に依つて、冷たくなりそして死につゝあるのです！そして人生は永遠の闇の如くになりつゝあるのです。その苦しみと悲しみを持ちながら私達は英雄の出現を望んでゐるのです……その英雄は何處にゐるのでせうか？」

「この男は何といふ神経衰弱者だらう。」とイポリツト・セルゲーエヴィチは胸の中で叫んで、不愉快な戦慄を感じながら、彼の前に哀愁的な昂奮に顫へてゐるその三文詩人を見守つた——彼は、彼の未來の義弟の暴風のやうな雄辯を堰き止めようとした。がそれは成功しなかつた。といふのは、彼の反駁の刺戟に亂されて、青年は何事も耳に入れないし、そして、何物も見えない風であつたらである。彼は、自分の心から湧き起つて來る不平を長い間自分の裡に閉ぢ込めて置かねばならなかつた。だが彼は、自分から見れば墮落した生活をしてゐる人々の一人と、さうして話が出来るところを喜んだ。

エリザウエータ・セルゲーエウナは輝く眼を皺めながらベンコフスキーを賞讃した。その眼には肉慾の欲求の閃きがあつた。

「君の力強い立派な言葉の中には」とイポリツト・セルゲーエヴィチは、疲れた話し手が自から間を置いていふやうなやり方で相手を柔げやうと思ひながら、加減しいしい親しげな調子で話し出した。「君の言葉の凡てには、多くの眞情、多くの眞理が明らかに響いてゐます……。」

「冷淡であつて、しかも慰撫するやうなことを俺にどうして言ひ得よう。」彼がお世辭のいくさりを

言つた後で、別な力に驅られながらさう自分自身に言つた。

さうして彼がもちもちしてゐる所を彼の妹が救つた。彼女はもう腹一杯に食つて、そこに坐つたまゝ椅子に凭れかゝつてゐた。彼女の黒い髪は古風に結はれてゐた。その王冠の形をした結び方が彼女の様子をいかにも主人公らしくした。彼女は、ナイフの刃のやうに薄白い歯並を現はして唇を笑ひに顫はしながら、しとやかな態度で彼の言葉を止めて、かう言ひ出したのである。

「一言わたしに言はして下さいね！私は或る賢人の格言を知つてゐます、それはかうです、「眞理は存在する、けれどその眞理を解釋しようとする者は間違つてゐる」——これに反對する人もありませんが、それも嘘です、私は眞理の存在を信じはしないけれど、サボース（善魔）とサタン（悪魔）の存在は信じます。またその二つは何處かに存在してゐるに違ひありません、何故なれば人生を支配してゐるものはその二つだからです。そして人生を創つたのもその二つだからです。解りましたか？私の言つてゐることも、あなた達の言つてゐるのと同じ言葉を言つてゐるのですから解るでせう。たゞ私は、あなた達が御自分の智識からは何んにも會得しないやうな氣がするので私の智識をさうして見せたのですわ。」

彼女はさう言ひ終ると、魅惑するやうな輝かしい笑みをもらしながら、二人にかう訊いた。

「今の私の言葉をどうお思ひになりますか？」

イボリツト・セルゲーエヴィチは黙つたまゝ肩をゆすつた——妹の言葉に心を亂されたからである。が妹は、ベンコフスキーにすつかり心を奪はれてゐるといふことを知つてほつとした。

しかしベンコフスキーに不思議なことが起つた。エリザウエータ・セルゲーエウナが話し始めると、彼の顔は恍惚となつて、彼女の言ふ一つ一つの言葉を謹聴してゐたが、最後に彼女から質問を掛けられると、彼はびつくりしたやうな表情をした。そして彼は何かを答へようとして、唇をぶるぶると顫はしたが、一言も出て來ない。と、彼女は泰然と落ちついて、ベンコフスキーの表情を見詰めてゐた。その眼に輝く満足の色を見ても、彼女は、自分の言葉がベンコフスキーの心を打つたといふことを知つて喜んでゐるに違ひなかつた。

「私には今言つた言葉の中には、少なくとも、哲學の全部が含まつてゐるやうに思はれますが。」
彼女はちよつと躊躇した後でさう言つた。

「お前の言つてゐることは、或る點までは正しいね。」とイボリツト・セルゲーエヴィチは、厭な笑み

をもらしながら言つた、「しかし、同時に……。」

「それなら、自分の心の中に未だ燃えてゐるプロミウスの火の最後の焰まで消さうとしてゐるやうな人間に、自分の努力を高めることが出来るでせうか？」とベンコフスキーは、彼女を悲しさうに見詰めながら言つた。

（譯者註、プロミウスはギリシヤ神話中の神の名。プロミウスは土偶を作り、天より火を盗み來つて之に生命を與へた。するとヂュエースの神大に怒り、彼を縛してコーカサス山に連れ行き、鷹をして彼の肝臓を食はしめたといふ傳説。）

「でも、何か自分に一致するものゝ存在を認めさへしたら、それは出来るでせうに——。」と彼女は微笑しながら言つた。

「お前は、存在の定義に對して、餘りに危険な判断を下してゐるやうに思はれるが。」と彼女の兄は冷淡に言つた。

「エリザウエータ・セルゲーエウナさん！あなたは婦人です、だから聞かして下さい——あの偉大な婦人の智識運動は、あなたの心には如何感じましたか？」とベンコフスキーは再び昂奮して訊い

た。

「面白いと思ひましたわ……。」

「それだけ？」

「でもわたしは……さア、どう言つたらいいでせうね……あれは、多くの婦人の向上を意味してゐるのだと思ひますわ……多くの婦人は人生といふ堡の外に置かれてゐるのです、それは婦人は家庭的だからです、でなければ、自分達の美しさの力を認めないからです、男子に優る眼識力を知らないからです……その他の無数の原因に依つて、さうした婦人達は實に多くゐます……それはさうと、アイスクリームが欲しいわね！」

ペンコフスキーは黙つたまゝ、彼女の手から小さな緑色の皿を受け取つて、それを自分の前に置くと、壓迫された情熱に顫へる手で額を神経的に撫でながら、皿の上の冷たい白い塊をちつと見詰めた。

「ねえ、今話した哲學は、生活に對する趣味を汚さないばかりか、食慾も汚さないといふものですわね。」とエリザヴェータ・セルゲーエウは冗談を言つた。

然し彼女の兄は彼女を見詰めてそして、此の女はこの青年と馬鹿氣た戯談をしてゐるのだと思つた。彼は凡ての會話に對して退屈を感じ始めた。彼はペンコフスキーを可哀相に思つたが、その可哀相には何等心からの暖かさも含まず、従つて何等の力も無かつた。

「Sio Visum Veneri」彼は食卓から立ち上りながらさう言つて、煙草に火をつけた。

「歌ひませうか？」とエリザヴェータ・セルゲーエウナはペンコフスキーに訊いた。

ペンコフスキーがおとなしく頭を下げて、彼女に答へると、彼等はテラスから家の中へ入つて行つた。と直ぐに、ピアノの音がひびき、それに和したヴァイオリンの音が鳴つて來た。イポリット・セルゲーエウイチは、テラスの欄干の傍の肘掛椅子に快よく凭れてゐた。地面から屋根に張つた綱に絡みついた野葡萄の蔓は、レースの幕のやうに擴がつて、太陽の光りを遮つてゐた。彼はさうして坐しながら、妹とペンコフスキーが話し合ふことを悉く聽いてゐた。

「あなた、最近に何かお書きになつて？」とエリザヴェータ・セルゲーエウナは、ヴァイオリンを一つ鳴らした時に訊いた。

「えい、僅かばかり。」

「読んで聞かして下さいね！」

「いや、読むのは厭だ、ほんとうに。」

「あなた、わたしをちらさうとなさるの？」

「私が？そんなことはないよ、……たゞね、いま腹案中の詩を詠みたいと思つてゐるんですよ。」

「では、それを詠んでね！」

「えゝ、よみませう……でもまだ考へ出したばかりなんですからね……あなたにうまく直して貰はねばなりませんよ……。」

「それが聴かれてわたしほんとうに嬉しいわ！」

「私には何だか解りません……恐らくあなたは眞實のことを言つて下さるでせうね……私にはいゝのか悪いのか解らないんですから……。」

「實際俺は、此處を去るべきではないか？」とイポリット・セルゲーエヴィチは考へた。が、動くのが面倒臭かつた。それに彼等二人は、テラスに自分があるといふことを注意してゐるに違ひないと思つたので、それで安心してそのまゝにしむた。

「汝が静けき美しさ、

汝が冷たき輝きは吾れを惱ます……。」

ベンコフスキーの低い聲がひびいて来る。

「汝は、吾が夢を笑ふか？」

汝は恐らく、吾れを知らざるなり？」

とベンコフスキーは悲しげに訊いた。

「その事を今日になつて訊くとは、ちと遅すぎはしないかね。」とイポリット・セルゲーエヴィチ思つて、苦笑した。

「汝が眼には何等の幸福もなく、

汝が言葉には——冷たき嘲笑のみひよく。

かくて吾が靈のはげしき狂ひも

汝にはたゞ不思議なるべし……。」

ベンコフスキーは、激し過ぎた爲めか、言ふべき詩が無くなつた爲めか、ちよつと言ひ止める、と

また、

「されど吾が靈の狂ひはいと美はし！

この狂ひにこそ、詩の旋風はあり、

吾が生命もこゝにあるなれ！

暴風の如き熱情もて凡てを透視し、

かくて凡ての謎を解き、

人々の爲めに幸福への道を見出さん……」

「俺は此處を去らねばならぬ！」とイポリット・セルゲーエヴィチは心を決めた。それは、青年の感傷的な嘆き聲の爲めにゐた、まらな心になつたからである。その青年の嘆き聲には、自身の心の平和な「さよなら！」と訴へてる調子と、彼女に向つて絶望的に「お願いです！」といつてゐる調子とが同時にひびいてゐるのである。

「吾れは汝が奴隷——汝が爲めに吾れは玉座を建てん、

吾が心の狂ひの中に……」

かくて吾れは待つべし……」

イポリット・セルゲーエヴィチは、その詩を途中で聴き止めて公園の並木道へ下り立つた。

彼は妹に驚いた——彼女は、彼の青年にあれほどまでに戀させるほど美しくは見えないのに。確かに彼女は、反對の兵法に依つて、さうした効果を納めてゐるに違ひないのだ。彼は彼女の確かりした態度を知つて置かなければなるまいと思つた。何故なればベンコフスキーは弱い男だからである……で恐らく彼は、彼女の兄として、また教養された人間として、燃えるやうな熱情を以て昂奮して行く青年に對する彼女の態度の真相に就て、彼女に言つて置く必要があるか？ しかしさうした話がいま、どういふ結果を持ち來し得るであらうか？ 彼は、かうした戀愛事件をとりもつ所のキューピッドとヴェナスの役の大家ではなさ過ぎる……がそれはそれとして、若し彼の紳士が、自分の熱情の焰を立派に速かに消滅することに成功しなかつたならば、そしてもつと高尚なるものを感じることを知り、さうしてもつと健全な方法で議論することを學ばなかつたならば、それは實に墮落した心であることを妹に話してやらねばなるまいと考へた。

「もし、あゝした熱情の炬火がワアーレンカの心の中に燃え上つたならば、どんなことが起るだら

う？」

然し此の疑問を起しても、イポリット・セルゲーエヴィチは、それを解かうとはしなかつた。反つて、さうした特別の場合にはロアーレンカは何を爲るだらうかと、それを訊し始めた。恐らくは彼女はニコンの顔をひつばたくだらう、でなければ、病める父を肘掛椅子に乗せたまま、部屋から部屋へと引きずり廻すだらう。かうした事から、彼が再びロアーレンカの事を思ひ出すと、また腹立たしくなつた。實際に對する彼女の眼を開かせること、現代の智識的方面を彼女に熟知せしむること等はたしかに必要な事からさることである………。それにしても、彼女が餘り遠くに住んでゐること、そしてつとよつちう逢ふことが出来ないといふことは何といふ哀しいことであらう！公園は、静寂と、香氣ある清涼に包まれてゐた。家の方からは、ヴァイオリンの歌ふ音と、ピアノの感傷的な調子とが漂つて來た。甘い嘆願の言葉、柔しい呼び掛けの言葉、熱烈にも恍惚たる言葉、それ等が次から次へと公園へ流れて來た。

音楽は空からも降つて來た——空には雲雀が囀つてゐるのである。細かい羽毛の石炭の碎片のやうに黒く小さい椋鳥が一つ、眼を睜りながらリンデン樹の上にとまり、胸毛をふくらしては、その

下を歩きながら思ひに耽つてゐる男の周囲を見守りながら意味ありげに囀つてゐる。その男は兩手を後に組み合せ、微笑の眼で遠くの方を見詰めながら並木の下を靜かに歩き廻つてゐた。

お茶の時、ベンコフスキーは馬鹿に黙りこくつてゐて、狂喜し易い男のやうではなかつた。エリザウエータ・セルゲーエウナはまた、何かに元氣づけられたやうにはしやいでゐた。

この様子を見ると、イポリット・セルゲーエヴィチ、何かあたり觸りのない話を持ち出さねばならないやうに感じた、それでちよつと困つた。

「兄さん、あなたはセント・ペテルブルグのことは何んにも話して下さらないのね。」とエリザウエータ・セルゲーエウナは言つた。

「何を話したらいいのかわかぬ？實に廣い活氣のある都會で………天氣は蔭鬱で、しかし………」

「しかし人間は無味乾燥で。」とベンコフスキーは口を挟んだ。

「全部ではありませんね、少くも。ほんとに柔かく、古代の氣分そのままに包まれてゐるやうな人も澤山ありますよ、ペテルブルグの人間は實に様々ですよ！」

「その通りでしたら有り難いですね！」とベンコフスキーは叫んだ。

「ほんとに、もしさうでなかつたら、人生は堪らなく退屈でせうね？」とエリザヴェータ・セルゲ
ーウナは調子を合せて、「しかし田舎は何と言つても青年達を喜ばせませう、それなのに青年達はみん
な未だに墮落しつゝあるのでせうか？」

「あゝ、彼等は少しづつ幻滅して行くよ。」

「それは現代の智識階級の特徴ですね」とベンコフスキーは笑ひながら言つた。「この階級の大部分
がもし貴族だつたら、そんなことはなかつたでせう。しかし今日では、あらゆる下層社會のゆすり者、
たとへば商人とか官吏とかさうした者の小俵が二三冊の下らない通俗小説を讀んで、それでもうい
つぱしの智識階級の人間になつてゐるのですからね——田園はさうしたインテリゲンヂヤ（無産にし
て智識ある階級をいふ——譯者）の興味を湧かすことは出来ません。彼等は田園に就て何を知つてゐま
せう？ 彼等にとつては田園は、夏の間を過すにいい所である以外に何でせう？ 彼等にとつては田園
は場末の別荘です……そしてまた彼等は、人間としての本質的能力を持つお影で、その別荘の住
人となれるのです。彼等は田園へ出て來ます、そして生活します、そしてまた去つてしまひます。
その後には自分の生活を書きちらして様々の書き物や、繪屑や、がらくた物を残します——それは

彼等居住者、即ち別荘住人が田舎に残して行く所の極りまつたやり方です。しかしやがて來るべき
人間が彼等の後を受け繼いで、かうしたがらくた物を滅却してしまひませう。同時に千八百九十年
來の靈のない無力な智識階級の人間の耻づべき記憶をも滅却してしまふでせう。」

「それ等の人達は貴族の復活したのですか？」とイポリット・セルゲーエヴィチは訊いた。

「あなたは私を理解して呉れます、ほんとうに……さういふのは失禮かも知れませんが、全くお
世辭のない所で！」とベンコフスキーは昂奮した。

「僕は單に、來るべき人々とはどんな人間かを訊いただけですよ。」とイポリット・セルゲーエヴィ
チは肩をゆすりながらさう答へた。

「來るべき人々とは——若き國民です！ 即ち時代を作るもので、その人々は人間の自尊心に對して
進んだ感じを既に所有してゐて、更らに智識欲が熾んでつて、研究的精神が強く、恒に自分を物
を究明することに導かうとしてゐる人達です。」

「僕もさういふ人々を進んで歓迎します。」とイポリット・セルゲーエヴィチはそつげなく言つた。

「さうです、その國民は世界の上に新らしき信念——即ち和解の信念を創造し始めるものだといふ

ことを言はなければなりませんね。」とエリザウエータ・セルゲーエウナは話し出した。「私はいま或る非常に興味ある子供を知つて居りますの——イワンとグリゴリー・シエークホフといふので、この二人は私の蔵書の殆んど半分は読みました。それからアキム・ソツエレフといふのは、彼自身がいふやうに「凡てを理解する」少年です。わたしはこの少年を試験して見ました——わたしは物理學の或る本を與へてかう言つたのです——「この本を読んでそして槓杆と均勢の法則を説明してごらんとね。すると一週間後に彼はわたしを非常にびつくりさせた程の立派な成績でわたしの試験に合格したので。そして更らに、わたしの賞め言葉に答へて彼の言ふには「それがどうしたんですか？ あなたはこの事を知つてゐるのでせう、だから僕があなたと同じ様に知ることが出来たつて誰も邪魔しないでせう——書物といふものは凡ての人の爲めに書かれたものですから」あなた達はこれをどうお思ひですか？ 勿論お解りでせう……人々の自尊心は實に高く、傲慢と無作法の點にのみ進んだのですわ。彼等はいかに新らしく生れた所有物をこのわたしにさへ當て嵌めたのです。しかしわたしはそれを我慢します、そして那長に對しても不平を言ひません。何故つて、さうした土地にはどんな美しい花が咲き出づるかがよく解りますもの、さうしてやがて或る晴れた朝に起き上つ

た時にはその土地の残した灰しかないのでせうからね。」

イポリット・セルゲーエヴィチは微笑した。ベンコフスキーは悲しさに彼女の方を見た。

どの話題にも極く外面的に觸れて、お互ひの虚榮心には強く觸れないやうに用心しながら彼等は十時まで話し合つた。やがてエリザウエータ・セルゲーエウナとベンコフスキーは再び音楽をやり取り、イポリット・セルゲーエヴィチは二人にお休みを言つて自分の寢室へ去つた。ベンコフスキーの顔には彼と差し向つてゐなくても済むやうになつた事を喜ぶ色がありありと浮んでゐた……發見しようとするれば何でも發見し得るものである。やがて彼の探究心に對する報酬でもあるかの如く倦怠が現はれて來た。それは明からに彼が自分の知人に宛て、二三の手紙を書かうとして部屋のテーブルに向つた時に彼の經驗した所の力なき感覺であつた。彼は、ベンコフスキーに對する妹の特殊な關係の動機を知ることが出来た。それと同時に妹の計畫に對するベンコフスキーの態度をも知ることが出来た。それ等は凡て氣持のいいものではなかつた。がそれと同時に一方に於てはそれ等は彼とは全く没交渉であつた。そして彼の心は、眼の前に演ぜられつゝあるピグマリオンとガラテアの戀物語の焼き直しのやうなものに依つては少しも害なはれはしなかつた。それは恰も彼の心

中に於て妹に對して愛相をつかしてゐるものゝやうであつた。彼はテーブルに向ひながらメラッ
リツクな氣持でペン軸を叩いてゐたが、やがてランプの心を引つこませた。そして部屋の中が急に
暗くなると、彼は窓の外を覗き始めた。

月に照らされた公園には死のやうな静けさがあつた。そして月光は窓硝子を透してその青い光を
注いでゐた。

窓の下には、觸れ合つて顫へては柔かな音をさせながら、その木影が漂つたり消えたりした。イ
ボリツト・セルゲーエヴィチは窓の所に近づき、窓を開いて外を見た。木立の向うに。女中のマーシ
ヤの白いガウンが隠見した。

「どうしようといふのだらう？」と彼は微笑しながら自分に言つた。「女主人が戀に夢中になつてゐ
るのだから、下女も大いにするがいよ。」

日は遅々として過ぎて行つた——それは永遠無窮の大海の中の時の滴の如く——全く堪らなく退

屈であつた。毎日の生活には何等の感銘もなかつた。勉強することもできなかつた。それは太陽の
繞くやうな炎熱と、公園から來る催眠藥のやうな匂ひと、物悲しき月光の夜と、その他凡てのもの
ゝ爲めに、彼の心は物も言へないほど退屈を感じてゐるからであつた。

イボリツト・セルゲーエヴィチは、眞剣に勉強しようとする自分の決心を一日一日と延しながら全
で植物の様な自分の生活を心靜かに享樂しようとしたがやつぱり退屈を感じた。そして自分のだら
しなさに對して、また意志の無いことに對して自分を責めた、が、どんなに責めても彼は勉強する
氣にはなれなかつた。この退屈は精力を一所に集中しようとしてゐる肉體の努力から起るものでは
ないかと思つた。朝、深い健康な眠りから覺めて、四肢を思ふさま伸した時に感ずるのは、自分の
筋肉が如何に弾力に充ちてゐるか、皮膚がいかに脹り切つてゐるか、肺はいかに深く自由に呼吸し
てゐるかといふことであつた。

妹がしよつちう考へてゐる、哲學的思索の悪い癖に對しては、最初は腹を立てた彼も、やがて段
々と彼女のさうした悪い癖を直してやらうといふ氣になつた。そこで彼は巧みに、彼女の氣に觸ら
ないやうに哲學の無益を説明し始めた。彼女は段々と無口になつて行つた。事毎に就いて議論した

がる彼女の癖は、實際彼に不愉快な印象を與へたのであつた——妹の議論は、人生に對する自分の態度を自から究明しようとする自然な衝動から來るのではなく、自分の冷靜な精神を掻き亂さうとする物を悉く破壊し放棄しようとする所の豫め用意された欲求から來るのであつた。彼女は自分自身の爲めに實際上の計畫は造り出した。然し理論となるとそれは、人生や他人に對する自分の硬直な懷疑的な、寧ろ皮肉的な態度を人の前でうまく庇ふに役立つものとして興味があるだけであるらしかつた。イポリット・セルゲーエヴィチは、假令これ等の凡てをよく解つてゐたにしろ、彼は自分の妹を責めたり恥かしめたりしたいやうな心は少しも起さなかつた。彼は心の中では妹を諦めてゐるのである。しかしそれを高々と言葉に出して言つてもいゝと思ふやうな心は微塵もなかつた。といふのは、事實に於て彼の心は、妹のよりもつと暖かいといふやうなことは全くなかつたからであつた。

斯くて、ベンコフスキーが歸つて行つた後でイポリット・セルゲーエヴィチは、ベンコフスキーと妹の關係に就ては何時でも妹の相談に來ることを約した。が彼はこの約束を守らなかつた。そして自分にも氣のつかない間に、さうした事件を話すことを止めてゐた。といふのは、健全な感覺が非常

に熱してゐる青年に目覺めた時には、苦痛となるものは口にすることが出來ないからである。そしてもしこれが起つたならば——その青年は實に烈しく熱して、つひには焼き盡されてしまふことが明らかであるからである。妹は妹で、ベンコフスキーは自分より年若であり従つて自分の方には心配となるべき原因は一つもないと高をくくつてゐるらしかつた。然し若し彼女がさうした考へに罰を受けたとしたならば——その時はどうするのだらう？そしてもし人生が正しきものならば、その罰は當然に來るべきであつたらう……。

ワアーレンカはしばしば訪ねて來た。二人は一緒に河に舟を浮べたりした、時には彼の妹も仲間になつた。がベンコフスキーとは決して仲間にならなかつた。また二人は森の中を散歩もした。そして或る時は二十露里もある或る僧院へまで馬車を馳つたりした。ワアーレンカは絶えず彼を喜ばした。そしてその場の思ひつきの話をしては彼をびつくりさせた。しかも彼女はいつも交際の禮儀は失はなかつた。彼女の無邪氣さは彼を困らせた、そして彼に口も出せない程にした。また彼女の天性の正直さは彼をまごつかせた。しかし彼の方で彼女の心の平和を亂さうとした時はいつも、彼女の單純な率直さで押し除けられてしまつた。そしてそれはさうした彼の片戀の心をも傷つけた。

そこで彼は實にしばしば自分自身にかう訊いた。

「俺は、彼女のあゝした謬見や頑迷さを彼女の頭から追ひ出すだけの充分な力を持ち得ないといふのか知ら？」

彼女と離れてゐる時は彼は、變體的な行き方をしてゐる彼女の心を矯正するのが缺くべからざる必要だとはつきり感じてゐた。そしてこの必要を一つの義務として自分の上に持つてゐた。がしかし、ワアーレンカが彼の眼の前に現れた時は——彼は自分の決心を全く忘れはしなかつたけれど、それを彼女との關係に於ける最上級には決して置かなかつた。時には恰かも彼が、彼女から何かを學ばうとすることに熱心であるかの如く、彼女の言ふことに吾れを忘れて聞き惚れてゐた。そして彼女は、彼の心の自由を束縛してしまふ何物かを持つてゐるのだと思つた。どうかすると、既に用意してある反駁を以つて、はつきりと力強く彼女に説明して、彼女の謬見の明らかさを彼女に信じさせようと心構へしたこともあつた——が、彼はそれを口に出すことを怖れるかの如く、その反駁を心の中に閉ぢ込めてしまふのであつた。かくて彼は自身を反省して、かう思つた。

「これは、自分の信念に自信が無い所から來るのではないか知ら。」

勿論彼は自分ではその反對だと信じてゐた。彼女に向つて理窟を話せない理由といふのは、彼女が一般的に知られるてゐる考への初步さへも殆んど知らなといふことを、随つて彼女に話すことはいかに六ヶ敷しいかといふことを知つたからであつた。それは根本から始めて行く必要があつた。それから、彼女にはさつぱり理解できない所の複雑した抽象の中へいつも彼を導びいて行く彼女のしつこい疑問「何故？」とか「何の爲めに？」とかいふことに答へることから始めて行く必要があつた。或る日、彼の反駁論にすつかり破れた彼女は、自分の哲學を次のやうな言葉で彼に説明した。

「神は、他の人々と同じやうに私のことも創りました、それは神自身の好み通りに創つたのです。だから私の爲る事がそれ等をよく現はしてゐますの。わたしは神の思し召しのまゝ何でもしてゐますの。そしてわたしは——神がわたしに望む通りに生きてゐますの……たしかに神は、わたしが如何にして生きてゐるかを知つてゐますわ。ねえ、わたしの言ひたいのはこれだけです。だからあなたは、わたしと議論しようとしたつて無駄ですわ。」

彼は彼女を見る度にいつも男特有の熱し切つた情熱を起した、が彼はそれをちつと制へてゐた。そして絶えず増して行く意識を起させる敏活な努力を以て、かうした肉感の閃きを自分の裡に消滅さ

せようとした。或ひはそれを自分から隠さうと力めさへした。時には、彼は悪びれた笑みをもらしながら自分に言った。

「どうしたといふのだ？彼女の美しさを考へるといふことは……自然なことだ、そはばかりでなく俺は男だ、そして俺の肉體は一日一日と、この太陽と空気の影響のもとに強健になりつゝある。これも自然だ。しかし彼女の爲めに自制力を失ふに従つて、彼女の特殊な性質がすっかり俺を囚へてしまふのはどうしたことだ……。」

男の感情が、自分の残酷な眞實性を隠す爲めの假面をかぶらうとする時は、その理性は奇怪な活動性と軟柔性とを持つて来るものである。感情は、他の凡ての力と同様に正直銘のものであるがそれが生活の爲めに破碎されるか、或ひは理性の冷たい拘束を以て感情の爆發を制へやうとして無理をした爲めに反つてそれが破壊された時には、その正直銘は共に失はれて、残るものは單なる殘忍性ばかりとなるものである。しかも尙ほその感情は、その微弱さと臆病さを蔽ひ隠す必要がある爲めに、理性の偉大なる能力——その能力は、理性の眞價を偽はつて造つた所の能力であるが、その能力を目掛けてそれを得ようとしてゐるのである。しかもこの能力はイポリット・セルゲーエヴ

イチの心中に立派に成熟したのである。そこでその能力の助けを以て彼は、凡ての情熱から超越した純眞さと自由さを持つツァーレンカに對する自分の衝動に絶えず力を與へたのである。彼は彼女を愛する力を持つてゐなかつたかも知れぬ——彼はそれを知つてゐた、しかし彼の心の奥底には彼女を占有しようとする希望が燃え上つてゐるのである。そして彼自身では怖れることもなく、彼女を征服し得るだらうと豫期してゐるのである。そして、さういふ自尊心と、吾れと我が心の中に隠してゐるうちに、彼は己れのお人好しに對し疑ひを起すかも知れない凡てのものを自分の中に立派に隠し了せたのであつた。

或る日、夕方のお茶の時に、彼の妹は彼に向つてかう言つた。

「兄さんは御存じ——明日はワァーレンカ・オレソウ嬢さんの御誕生日ですよ。わたし達は馬車で行かねばなりませんよ。わたしは馬車で行きたいの……それは馬の爲めにもいゝことです。」

「馬車で行かう……そしてお祝ひして上げよう。」と彼もまた行つて見たいと思ひながらさう答へた。

「でも兄さんはわたしと一緒に行くのは厭でせう？」と彼女は好奇心を以て彼を見ながら訊いた。

「俺が？そんなことはないね……俺は何とも思つてやしないよ。とにかく俺も行くよ。」

「無理には申しませんよ！」とエリザヴェータ・セルゲーエウナは言つて、眼の中に輝いた微笑を隠さうとして眼瞼を閉じた。

「それは解つてゐる。」と彼は不愉快さうに言つた。

長い沈黙が起つた。その間にイポリット・セルゲーエヴィチは眞面目になつて、一體ワアーレンカに對する自分の態度は、まるで自分の自制力が彼女の魅力を防ぎ得ないだらうといふことを怖れてゐるやうではないかと自分自身に言つて見た。

「彼女が——ワアーレンカさんが俺に話したが、あの人は大へん美しい屋敷に住んでゐるさうだね。」彼はさう言つて顔を赧くした。妹にそれを見られただらうと思つた。が妹はそれに少しも氣づいた様子もなく——その反對に、彼女は彼にかう言ひ出した。

「どうぞ一緒に行つて下さいね！あの人の屋敷はほんとに、立派ですよ……兄さんが御一緒ならわたしも困ることはないでせうから……長くは居ませんよ、いゝでせう？」

彼は同意した。が彼の氣持ちは亂された。

「俺は何故自分をこまかさねばならないのだ？一體あの若い娘にもう一度逢ひたいと思ふ自分の心の中に在るこの汚ないもの、或ひはこの不自然なものは何であるか？」彼はぶりぶりしながらさう自分自身に訊いた。が彼はこの訊問に對して答へなかつた。

翌る朝彼は早く眼を覺した。と、彼の耳にひゞいて來たその日の第一聲は、彼の妹のかういふ聲であつた。

「イポリットが吃驚するでせうね！」

さう言つた後から高い笑ひ聲が起つた——そんな笑ひ聲を出す者はワアーレンカだけであつた。イポリット・セルゲーエヴィチは、にこにこしながら床の上に起き上り、夜具を押し除けて聴き耳を立てた。けれどさうしてだしぬけに彼の心を襲つて彼の心を充たしたものはまだ悦びといふほどのものではなかつた。寧ろ彼の神経を擽るやうな喜びの前兆といふべきものであつた。そこで彼は床から飛び上り、すっかり慌てゝしまつて何が何だか解らない程の急しきで着物を被始めた。何だといふのだらう？自身の誕生日に、ワアーレンカ自らが、俺と妹とを招きに來たのか知ら？何といふ

可愛い娘だらう！

彼が食堂に入つて行くと、ワアーレンカは後悔してゐるやうな奇妙な様子をして彼の前に視線を落した。そして彼の差し出した手も執らずにおぼつした聲で言ひ出した。

「御免下さいね、あなたを……………」

「ね、同情してやつて下さい！」とエリザウエータ・セルゲーエウナが叫んだ。「この人は家を出奔して来たのですよ！」

「そりやどうしたといふのだね？」彼はさう妹に訊いた。

「内所なの——」とワアーレンカが言つた。

「ハハハ！」とエリザウエータ・セルゲーエウナは笑つた。

「それは……………またどうして？」とイポリツトは更らに訊いた。

「わたしは婚様から逃げて来たの。」とワアーレンカは白状してまた笑ひ出した。「考へて見て下さいね、みんなどんなに恐い顔をするかを……………小母さんのラツチエツツキーがわはしを結婚させようとして夢中になつてゐるのですよ——それで小母さんは殿しい招待状をみんなに送つて、それから

澤山の御馳走造るの造らないのつて、まるでわたしが百人もの婿を取るかのやうなんです。わたしは御料理の手傳ひをしましたの……………けれど今朝わたしは起き上りさまわたしの馬に飛びのつて——こゝへ走らせたんです！わたしは書置きをして来たの、シチャーバコフスへ行くつて、……………御存じでせう？こつちとは全く反對の二十露里ばかり離れた所ですよ！」

彼は彼女を見詰めた、そして笑つた。その笑ひは彼の胸の中に快よい暖かさを湧き起した。今度も彼女はふつくらとした白いガウンに包まつて来た、そのガウンの褶は、肩から足先まで滑らかな線を描いて、彼女の肉體を恰かも雲の如くに包んでゐた。彼女の眼には晴やかな微笑が顔へて居り、その顔には活々とした閃きが漂つてゐた。

「あなたは厭ですか？」と彼女は彼に訊いた。

「何を？」と彼は一口で訊き返した。

「わたしのした事をです？それは失禮なことですよ、それはわたしにも解つてゐますの。」と彼女は眞面目になりながら言つて、それから直ぐにまた大きな聲で笑ひ出した。

「わたしはみんなのことを想像出来ますの！みんな立派に着飾つて、香水を匂はして……………そこで

泣きながら酒盛りをすることせうよ——あゝ、どんな風に酒盛りをすることせう！」

「お客さんは大ぜいですか？」とイボリット・セルゲーエヴィチは聞いた。

「四人……。」

「お茶が入りました！」といふエリザウエータ・セルゲーエウナの聲がした。

「あなたは、その悪戯を埋め合せをすることせうね、ワールヤ……。」さうは思ひませんか？」

「いゝえ……。」わたしは埋め合せなぞしたくはありません！」と彼女はテーブルに向つて坐つた時に或る決心を以てさう答へた。

「わたしが家へ歸つたらさうしますわ……。」けれど今夜はわたしあなた達と一緒に暮さうと思つてますの。それはさうとわたしは、今晚の招待のことをどうして朝からなぞ心配したのでせう？ それに誰だつてわたしをどうすることも出来やしませんわ。出来るでせうか？ そりや——お父さんは怒るでせう。けどわたしはお父さんの傍へは寄りつかないやうにして何も聞かないやうにしますわ……。」

……小母さん——小母さんはわたしを夢中になつて可愛がつてゐますもの！ お客さん？ あなたはどう思ひますの？ ねえ、わたしはお客さん達を四つ這ひにさして自分の周囲を這はせることも出来ま

すの……。」ハハハ！ さうしたら……。」面白いでせうね！ わたしやつてみようか知ら……。」でもあのロアーロニポフは働ふことが出来ませんわ。あの男は樽のやうな腹を持つてますからね！」

「ワァールヤさん！ あなたはどうかしてゐますよ！」と言つてエリザウエータ・セルゲーウナは彼女の話の止めさせようと力めた。

「いゝえ、大丈夫ですよ！」と彼女は笑ひながら言つたが、すぐには口を閉ぢなかつた。そしてはまた求婚者だちのことを話しつゞけた。その話し振りの活潑さには、二人の兄妹もいつかすつかり心を奪はれてしまつてゐた。

お茶を飲んでゐる間中も笑聲が起つた。エリザウエータ・セルゲーウナはワァールヤに對して謙遜する風であつた。イボリット・セルゲーエヴィチはもつと落ちつかう落ちつかうとしたがそれは出来なかつた。お茶の後で三人は、その日一日を最も楽しく暮すにはどうしたらいいかといふことを相談した。ワァールンカはボートに乗つて、例の森へ行き、そこでお茶を飲まうと言ひ出した。イボリット・セルゲーエヴィチは直ぐそれに賛成した。が彼の妹は六ヶ敷しい顔をしてかう言つた。

「わたしは一緒に行くことは出来ませんわ——わたしは今日のうちにサーニトーまで馬車で行かねばなりませんから。そしてそれは延ばすことが出来ませんもの。ね、ワァールヤさん、あなたがお歸りの時はわたしはあなたをあなたのお家まで馬車でお送りしようと思つてゐますわ、そしてそこでお別れしようと思つてますわ……でもいまはわたしどうしても遠出をしなければなりませんので……。」

イポリツト、セルゲーエヅイチは疑ひ深い視線を妹の方に注いだ——妹はその場で今言つたことを思ひついたのでといふことが彼に解つたのである。妹はワァールヤ一人を彼の傍に残さうといふもくろみがあるので。でも妹は残念さうな心配さうな顔をしてゐた。

ワァールヤは妹の言葉で一才沈んだが直ぐと元氣を取り戻した。

「まあどうしたらいいでせうね？　ほんとに生憎ですのね？　でもわたし達は、どうしても行きませう！　いいでせう？　今日はわたし遠くまで行つて見たいの……それはさうとグリゴリーとマーシヤを連れて行つてもいいでせうか？」

「グリゴリーは勿論行つてもいいんです！　でもマーシヤは……マーシヤがゐなくては夕飯の仕事

を誰がしますの？」

「でも夕飯を食べるものがありますの？　あなたはペンコフスキーさんの所へ行くのですし、わたし達は夕飯には歸らないでせうし。」

「さう、そんならマーシヤのことも連れていらつしやう。」

ワァールヤはあちこちと忙しさに立ち廻つた。イポリツト・セルゲーエヅイチは煙草に火をつけてテラスへ出て行つた、そしてそこを下りたり上つたりし始めた。彼は今日の遠足をすつかり喜んだ、がグリゴリーとマーシヤは免當臭がつてゐるやうに見えた。グリゴリーとマーシヤが邪魔になるだらうと彼は思つた——それは疑ふまでもないことである、彼等の眼の前では思ひのまゝに話すことも出来ないだらうと思つたからであつた。

それから半時間と経たないうちに、イポリツト・セルゲーエヅイチとワァールヤはボートの傍に立つてゐた。さうした間にもグリゴリーはせつせと立ち働いた——彼は顔に雀斑そばかすがあり鷺鼻で、赤い頭髮を持った青い眼の青年であつた。サモワルやいろいろの包みをボートの中へ積み込んでしまつたマーシヤは、グリゴリーに言つた。

「はやくしなよ、赤頭。御主人様達が待つてゐなざるのを知らないのかえ？」

「あと一分間ですつかり片がつくよ。」と青年は撓受を結びつけながら高い中音で答へて、マーシヤの方へ目くばせした。

イポリツト・セルゲーエヴィチはそれを見て、夜中に彼の窓の前をちらついていた者はいいつだらうなど、想つて見た。

ボートの中へ乗り込むとワアルルヤは顎でグリゴリーの方を指して、

「御存し？この男も評判の學者なんですよ、……法律家なの。」

「いま被言ることを聞きますと、ワアルワアラ・ワシーリエウナさん、私が法律家ですつて！」とグリゴリーは言つて丈夫さうな白い歯並を現はして笑つた。

「ほんとうですよ、イポリツト・セルゲーエヴィチさん。この男はロシアの法律をみんな知つてますの。」

「ほんとうに知つてるのかね、グリゴリー？」イポリツト・セルゲーエヴィチは或る興味を以てさう訊いて見た。

「お嬢さんは冗談をおつしやつてるのですよ……そりや空想です！だれだつて全部の法律を知つてやしませんよ、ワアルワアラ・ワシーリエウナさん。」

「ところで、君は法律を書いた人のことも知つてゐるの？」

「スペランスキー氏でせう？……その人はすつと、すつと昔に死にました。(スペランスキーは一八〇六年より一八一二年までアレキサンダー一世を扶けて功あつた政治家である——譯者)

「で、君はどうして法律書を読んだね？」とイポリツト・セルゲーエヴィチは訊いて、オールを輕々と動かしてゐる伶俐さうな卵なりの青年の顔をまともに見た。

「法律に就てはお嬢さんがおつしやつた通り——」と言つてグリゴリーはぎろりとした眼でワールヤの方を見てから、「十巻の法律書が偶然にも私の手に入つたのです……私はそれをさつと見通しました。そして法律といふものは興味のあるものでその上必要なものだといふことが解つたのです。そこで私はそれを読み始めたのです……いま第一巻を読んで居ります……その第一條に書いてあることはほんたうだと思ひました。それはかう書いてあるのです、「如何なる人も自分の法律に無智なることを許すべからず」と。そこで私は自分で考へたことは、法律を知つてゐる者、ないとい

ふことです。けれどもどの人も法律の全部を知る必要はないといふことも考へました……私の先生でさへ、もう百姓に關する條文は私から聞いてゐる位ですから。——實際法律の條文を読んで、そして理解することは非常に興味あるものですね……。」

「この男がどんな男かお解りになつたでせう？」とワアーレンカは言つた。

「その外に君は澤山の本を読んだの？」イポリット・セルゲーエヴィチは、ゴゴリの作の中のペトラシカを思ひ出して、さう質問をつゞけた。

「暇さへあれば讀みました。御主人の家にはつまらない本が随分澤山ありますので……エリザヴェータ・セルゲーエウナさんのだけでも、千冊位はあるでせう。たゞ大ていは小説やいろいろの物語の本ばかりで……。」

ボートは流れに向つて滑らかに進んで行つた。岸の景色は流れに沿うて動き、そして凡ての周囲の景色は恍惚となるばかりの美しさ——輝かしさと、静けさと、靉郁さとであつた。イポリット・セルゲーエヴィチは廣い胸を持つた漕手のグリゴリーを物珍らしさうに見てゐるワアーレンカの顔を見守つてゐた。漕手は拍子よい漕ぎ方で鏡のやうな水面を極き分けながら、文學に對する自分の

趣味を話した。學者はすつかり満足して彼の言ふことを喜んで聞いてゐた。伏目をした睫毛の下から二人の男の様子を見てゐたマーシヤの眼には愛と誇りとが輝いてゐた。

「私は、日の出や日没のことを書いた本……つまり自然のことを書いた本を讀むのは嫌ひです。私は千度以上も日の出を見ました。私は自分では……森や川のこと、みんな知つてゐると思つてゐます、それなのに私はどうして、それ等を書いた本を讀まねばならないでせう？どの本にもさうしたものが書いてあります……だが、私の考へでは、それは全く餘計なことだと思ひます。だれだつて日没を見ることは自分自身を見るやうに見ることが出來ますもの……さういふ物はだれも自分自身の眼で見ることが出來ますもの。ですけれど人間の生活を書いた本——それは興味があります。もしあなたがさういふ本をお讀みでしたら、あなたは御自分に向つてかうおつしやるでせう——「もしお前がこの境遇の中に置かれたら、どうするつもりだ？」と。たとへあなたがその本に書いてあることがみんな出鱈目であるといふことを知つてゐるとも。」

「出鱈目とは何だね？」とイポリット・セルゲーエヴィチは訊いた。

「それは、小説本のことです。それ等はみんな造つたものです。たとへば百姓のことでも……百姓

はあ、した本の中に出て来るやうな群でせうか？ 悉くの人が百姓を憐憫的に書いて居ります。そして百姓達を可哀相な馬鹿者にしてしまつて居ります……それは良くないことです！ 百姓達は読みもすれば考へもします。それなのに實際に於て、小説家達は百姓達を理解し得ないのです……何故つてさうした本の中に書かれてゐる百姓は……恐ろしく頑固で、そして悪者で……。」

かうした話はワアーレンカに取つては退屈に違ひなかつた。何故つて彼女は、ぼんやりした眼で岸の方を見ながら低い聲で歌を歌ひ始めたからであつた。

「ねえ、ねえ、イポリツト・セルゲーヴィチさん、舟を下りて森の中を歩かうぢやありませんか。こんな所に坐つて陽に焦がれてゐるなんて——折角の楽しい遠足の法に兼ねたことぢやないでせう？ グリゴリーとマーシヤはセウヨロフ谷の方へ漕いで行つて、そこで岡へ上つてみんなのお茶を用意してゐてお呉れね、そこで一緒にになりますからね……グリゴリー、ボートを岸へつけてお呉れよ。わたしは森の中や、青空の下や、太陽の光りの中で食つたり飲んだりするのが堪らなく好きなの……だれだつて、少しは自由な放浪者の氣質を持つてますものね……。」

舟から岸の砂の上へ飛び移ると、ワアーレンカは昂奮して言つた。

「ねえ、ごらんなさいよ、大地に觸れるとすぐに何かかう……靈を掻き亂すやうなものを感じるでせう。ねえ、わたし、長靴の中へ砂を一ぱい入れます……それから片足を水にぬらしますわ………かうすると不快と快感とそれがよく感じられてほんとにいゝわ……御覽なさい、ボートの速いと……」

二人の足下を流れてゐる川は、ボートに亂されて柔かな小波を岸に寄せてゐる。ボートは森の方向つて矢のやうに這つて行く。ボートの後に残つた船跡が太陽に照らされて銀のやうに輝いてゐる。グリゴリーがマーシヤを見て笑ふと、マーシヤは拳骨をかためて嚇してゐるのが見える。

「二人は戀し合つてゐるのよ。」とワアーレンカは微笑しながら言つた。「以前マーシヤは、エリザウエータ・セルゲーエウナさんにお願ひして、グリゴリーとの結婚を許して貰はうとしたの。けれどエリザウエータ・セルゲーエウナさんはそれをまだ許しませんの。あの方は結婚した召し使ひがお嫌ひなのよ。でもグリゴリーの年期はこの秋で明けますから、そしたらあの男はマーシヤを連れ出すでせうよ……！ 二人ともいゝ人間ですわ。グリゴリーは、賦拂込みで少しばかりの土地を貸して呉れとわたしに言つて來たのよ……賦拂込みでなければ、長期の借地権で貸して下さい……十デ

シヤチナ程ほしいと言ふの。けれどわたし、お父さんが生きてゐる間はそれが出来ませんの。氣の毒ねえ……あの男は何にでも器用なのよ……錠前屋の仕事も、鍛冶屋の仕事も出来ますの。あなたの妹さんの家には馭者の下働きとして奉公してゐるのよ……ココビツチさんが——郡長さんでわたしの求婚者なの——あの男のことをかう言ひましたわ、「あの男は危険な自己嫌厭者だ、——あの男は自分の長所を尊びません」と。」

「コ、ビツチつて誰ですか？ポーランド人ですか？」とイポリット・セルゲーエヴィチが訊くと彼女ははしかめ面をした。

（ワアーレンカが、コ、ビツチの發音をそのまま、眞似て言つたので、イツポリットはその發音から推察して、コ、ビツチはポーランド人だと思ひそれでさう訊いたのである——譯者）

「モルダビアン人か、それともチュウワツシ人か——それは存じません！恐ろしく長い厚い舌を持つた人で、口の中はそれで一ばいな。だからその舌が話の邪魔をするのよ……プツ！口が悪いわね！」

青い油の浮いた溝が二人の行く道を遮つてゐた。その周囲には油ぎつた泥がある。イポリット・セ

ルゲーエヴィチ足元をよく見てから、

「廻つて行かねばならんね。」と言つた。

「飛び越せないの？水は干上つてゐると思ひますわ……。」とワアーレンカは怒つたやうに叫んでちだんだ踏んだ……「遠い廻り道ちやありませんか。それにわたし、あんな方を廻るとガウンを切らして了ふわ……飛び越えて見なさいよ、何でも無いわ、さア——ソーン！」

彼女はびよんと跳ねて身體を高く飛び上らせた。ガウンがその肩から千切れて空中に舞ひ上つたやうになつた。が、彼女は向ふ岸に立つと、後悔して叫んだ。

「まア、わたしよく飛べたわね！駄目よ、あなたはお廻りなさいよ、あゝ恐かつた！」

彼は急に湧き上つた厭な考へを心中に抱きながらそして自分の足はじくじくした泥の中に埋つて行くのを感じながら、彼女の方を見て青さめた微笑を漏らした。溝の向うの、ワアーレンカは衣ずれの音をさせながらガウンを打ち振つてゐる。その打ち振る中から、靴下をはいたいゝ恰好のすりとした脚が露はに見えた。その瞬間彼は、彼女に對して或ひは自分に對して、何かを警戒するやうな心になつた。

しかし彼はかうした心を馬鹿げた子供ちみたものだと思へ直して、荒々しくその場を去つた。そして急いで道から外れて、道を區切つてゐる藪の中へ入つて行つた。さうしたけれども彼はやつぱり草に隠れた水の中を歩かねばならなかつた。濡れた足をして、それから自分にもはつきりしない或る決心を以て、彼は彼女の傍へ近づいて行つた。すると彼女は様子ぶつて自分のガウンを見せながら言つた。

「干見て下さいね——綺麗になつて？ほんとに厭ね！」

彼は見た——大きな黒い汚點が眼に入つた。その汚點は勝ち誇つたやうに面白いガウンを汚してゐた。

「吾れは君をげにも聖き純なるものとして見ることを好む。またかく見ることに馴れたり。されば君がガウンの上の一つの汚點さへ、吾が心に暗き蔭影を投げかけるなり……。」イポリット・セルゲーヴィチはおもむろにさう言つて口を閉ぢると、ワアーレンカの顔を見詰め始めた。ワアーレンカは唇に微笑を浮かべながら驚いたやうな顔をしてゐる。

彼女の視線は何かを問ふもののやうに彼の顔の上に注がれた。彼は胸の中が燃えるやうな気がし

た。そして今迄誰とも話したことのないうやうな不可思議な言葉を言ひ交はしてゐる最中に在るやうな気がした。彼はその瞬間までそんな言葉を知らなかつたのである。

「あなた、いま何とおつしやつたの？」とワアーレンカはしつかりと訊いた。彼は彼女の問ひが餘りに強くひびいたのにびつくりして、冷靜にならうとしながら眞面目に説明し始めた。

「僕は詩を口ずさんでゐたんです……ロシアの言葉でいふと散文のやうに聞えますが……でも詩だといふことが解つたでせう、解らない？イタリーの詩ですよ……たしかにさう思ふんだが、よくは覚えてゐない……それとも、散文だつたか知ら、何かの小説の中の……いまふと頭の中に浮んだのだがね……。」

「どんなでしたつけ——もう一度言つて下さらない？」彼女は急に思ひに沈んでさう訊いた。

「吾れは君を……。」そこで彼は口を噤み、手を舉げて眉毛を拭いて、「こりやいかん、僕はやつたいま言つた事を忘れちまつた！ほんとうに——僕は忘れちまつたんです！」

「さう……ぢや歩きませう！」さう言つて彼女は思ひ切つて前へ歩き出した。

それから四五分の間、イポリット・セルゲーエヴィチは、自分と彼女との間の疑念の障壁となつた

此の不可思議な光景を、吾れと我が心に理解しようとし、説き明さうとした——しかし、如何に努力しても、ワアーレンカの前に徒らに臆病になつた自分を意識するより外に何も湧いて來なかつた。ワアーレンカは黙りこくつて、頭を垂れて、彼の方を見もせずと彼と並んで歩いてゐる。

彼女の沈黙はますます深くなつて行つた。それは彼のことを思ひつゞけてゐる風に見えた。けれども意味には思つてないやうに見えた。彼は自分の口ずさんだことをどう説明していいか解らなかつた、で、彼は無理につくつた快活さでだしぬけに話し出した。

「あなたの求婚者だちは、あなたが私達とどんな風に毎日を通してゐるかといふことを知つて置く必要がありますね。」

彼女は彼をチラリと見た。それは恰かも彼の言葉で、遠い所から呼び返されたかの如くであつた。けれどやがて段々と、彼女の嚴しい顔は無邪氣になつて行つた。やがてまるで子供のやうな甘つたるい言ひ方でかう言つた。

「えゝゝそりやみんな氣を悪くするでせうよ！でもあの人はすぐに解るわ、えゝゝ、すぐ知つてしまひますわ！そして恐らく、あの人は、……わたしを悪く思ふでせう！」

「あなたはそれを氣に掛けてゐるのですか？」

「わたし？あの人のことを？」と彼女は柔かに、けれど不機嫌に訊き返した。

「あゝ、悪いことを訊いたね。」

「いゝえ、……でも、あなたはわたし解らないんですわ……あなたは、わたしがあの人のことをどんなに嫌つてるかそれを御存じないのですわ！どうかするとわたし、あの人を足の下に踏み倒して、その顔を踏み潰してやりたくなるほどの……その口も踏み碎いて、物も言へないほどにしてやりたくなるわ。ほんとに！何ていけ好かない人達でせう！」

憤怒と冷酷とが彼女の眼に實にはつきり輝いた。彼はそれを見て氣持ち悪くなつたほどであつた。で彼は顔を外向けてかう言つた。

「それほどまでに嫌つてゐる人達の仲で暮してゐなければならぬといふことは、ほんとうに悲しいことだね……その人達の中に、せめて一人でもあなたを氣持ちよくする人はゐないんですかね……」

「いゝえ！一體あの人は驚くほど興味の無い人達なんです……どれもこれも恐ろしく鈍鈍な、感

激のない、胸糞の悪くなる……。」

彼は彼女の言ひ方に思はず微笑した。そして自分自身にも解らない皮肉な調子でかう言った。

「そんな風に言ふのはまだあなたには早いですよ。もしお待ちなさい、もしたらあなたは、あなたを満足させるやうな男に邂逅てんこうしますよ……あらゆる點に於てあなたを喜ばせるやうな人が見つかりますよ……。」

「それは誰ですか？」と彼女はわざわざ足を停めて口ばやに訊いた。

「あなたの未來の良人ハズバンドです。」

「でも、その人は誰れ？」

「僕がどうしてそれを知つてませう？」イポリツト・セルゲーエヴィチは、彼女の昂奮した質問を不愉快に思ひながら肩をゆすぶつた。

「でも、教へて下さいね。」彼女は溜息をして、それから歩き出した。

二人は、殆んど肩まで届くほどの叢の中を歩いてゐた。道はその下生の中を、氣まぐれな曲線を描きながら、まるで棄てられたリボンのやうに走つてゐる。と、二人の眼の前に、密林が姿を現はし

た。

「ところで、あなたは結婚する氣はあるのですか？」とイポリツト・セルゲーエヴィチは訊いた。

「……わたし知らないわ、わたしそんなことを考へたこと無いの……。」と彼女は單純に答へた。彼女の美しい眼は遙か前方に注がれてゐる、そして遠い所の親しい何物かを思ひ出すかのやうに、その方にちつと心を集中してゐる。

「あなたは冬は都會で暮した方がいゝですね——都會なら、あなたの美しさは多くの人の眼を惹きますよ……そしてあなたはすぐと、あなたの理想通りの人を見つけることが出来ますよ……多くの男達があなたに結婚を強硬に申し込むでせうから。」と彼は、彼女の姿を思ふさま貪り見ながら、ゆつくりと低い聲でさう言った。

「都會に暮すことは必要でせうね。」

「そこであなたは、結婚を申し込む男達をどうして断ります？」

「えゝ、えゝ、勿論……勝手に申込ませるがいゝわ……。」

二人は黙つて二三歩歩いた。

彼女は遠くの方をちつと見詰めながら、黙つて何物かを思ひ出してゐる。けれど彼は、どうした譯か、彼女のガウンについた泥の汚點しみを數へてゐた。汚點は五つあつた。その中の三つは大きくて、星の形に似てゐた、二つは尖つた句點のやうで、一つは刷毛で塗つたやうになつてゐた。それ等の黒い色の配列の具合が彼に何かを暗示してゐるやうであつた。しかしそれは何を暗示してゐるのだらう——彼には解らなかつた。

「あなた、戀をしたことあつて？」彼女の聲がだしぬけにひびいた、それは眞面目でしかも穿鑿するやうな調子であつた。

「僕？」イボリツト・セルゲーエヴィチはハツとして、「え……ちよつと、すつと以前に、僕がまだ青年だつたころに……。」

「さう、わたしも、すつと以前に。」と彼女も彼のいふことに和した。

「あ……それは誰です？」とボルカノフ（イボリツトの氏名にしてクリスチヤン・ネームと相對するもの——譯者）は、さうした質問の不法法であることも忘れて訊いた。手に觸つた木の枝をへし折ると、それをビューツと投げた。

「その人？それは馬盗人だつたの……別れてからも三年になりますわ。その時わたしは十七だつたのよ……或る日その男はつかまつて。打たれたの。それからわたしの家の中庭へ連れて來られたの。その人は綱にくゝられて倒されたまゝ一言も言はなかつたわ。たゞわたしをちつと見詰めてゐました……わたしはその時、家の玄關の所に立つてゐたと覚えてますわ——まだ朝も早かつたので家の人だちはみんな寝てゐました……。」

そこで彼女は言ひ止めて、記憶を辿つた。

「外套の下には血が溜つたゐました——ほんとに眞黒な血——そして身體からはまだぼてぼてした血が流れてゐました……その男の名はシャシカ・レメゾフと言ひましたの。百姓達が中庭へ入つて來てその男を見ると、彼等はまるで犬のやうにがみがみ罵りましたわ。どれもこれも憎つたらしい限付をしてゐましたが、彼のシャシカだけは、百姓達をほんとうに靜かに見詰めてゐましたわ……その時わたしはかう感じましたの——たとへこの男は打たれて、そして縛られてゐるとも——この百姓共より自分は偉いといふことを知つてゐるに違ひないと。ほんとうにさう見えましたわ……眼は大きくて褐色をしてゐました。わたしはその男が可哀相になりましたの、そして心配になつて來

ましたの……それでわたしは家のなかへ入つて、その男にやる爲めにウオツカをコップに一ぱい注ぎました……それから出て行つて、それをその男にやりましたの。けれどその男は両手を縛られてゐるので、それを飲むことが出来ないのです……するとその男は頭を少し擧げてわたしにかう言ひましたわ——その頭も一面に血にまみれてゐるのです、「お嬢さん、コップをこの口に當てゝ下さい。」わたしはコップを彼の唇へ當ててやりました。するとその男は、靜かに靜かに飲みました。飲み終ると「有りがとう、お嬢さん、あなたの幸福を祈ります！」それから、すぐわたしはその男の耳にかう囁きましたの、「お逃げなさい」と、その男は大きな聲で「生きてゐる限り、私はきつと逃げます、どうぞそれを信じて下さい！」その男は庭にゐる誰れにも聞えるやうな大きな聲でさう言つたので、わたしは非常に安心しました。やがてその男は言ひました。「お嬢さん、誰かに私の顔を洗はして下さい！」わたしはそれをダンヤに言ひつけましたの。ダンヤはその男の顔を洗ひました。洗つた顔には打たれた跡が青く腫れ上つてゐましたわ、ほんとうに！間もなくその男は連れて行かれましたの。馬車が中庭を出る時、わたしはその男を見詰めてゐました。するとその男はわたしに頭を下げて、眼で微笑みました……あんなにひどく傷ついてゐるのに……わたしはその男の爲

めにどんなに泣いたでせう！どんなにわたしは、その男が逃げ出せるやうにと神に祈つたでせう……」。

「それちやあなたは……。」とイポリット・セルゲーエヴィチは皮肉な調子で言葉を抉んだ、「おそれくあなたは、その男がうまく逃げ出して再びあなたの前に現はれて来るのを待つてゐるのでせう。そして、その時は……あなたはその男と結婚するのでせう？」

彼女には聞えなかつたのか、それともその皮肉が解らなかつたのか、單純にかう答へた。

「まア、どうしてあの男が再びこゝへ現はれて来る事が出来ますの？」

「しかし、もし現はれて來たら——したらその男と結婚するのでせう？」

「百姓と結婚するのですつて？……わたしは知りません……いゝえ、わたしはそんなことを考へもしません！」

ポルカノフは怒り出した。

「あなたの血はそのロマンスで汚れてしまひました。それだけはあなたに言はねばなりません、ワアルワアーラ・ワシリウナさん……」と彼は語氣を強めて言つた。

彼の鋭い聲のひよきで、彼女はびつくりして彼の顔を見た。そして黙つて注意深く、彼のきびしい、殆んど叱責するやうな言葉をちつと聴き出した。そこで彼は、彼女の愛した文學が如何に彼女の精神と靈魂とを悪化し、また現實を曲解せしめたかを説明し、そしてその文學が如何に、人間の思想を高めることには不必要であるかを説き、更らに人生の眞の悲哀や、人類の欲求や苦惱には如何に交渉であるかを説明した。彼の聲は、二人を圍む森の静けさの中に鋭くひびき渡つた。そして、道邊の木の枝の間にかすかな反響を起した——まるで人がそこに居るかのやうに。木の葉を漏れる馥郁たる薄明は道の上に注いで居た。そして森を横ぎつては、何かの息詰つた溜息に似たやうな深いひよきがしよつちう聞えて來た。木の葉はまどろんでゐるかのやうに密かに顫へてゐた。

「あなたは、人生の意味を理解することを教へるやうな本、人間の向上心と人間の行爲の眞の動機とを理解することを教へるやうな本ばかりを読んでそしてそれを尊ばなければ駄目です。人間を理解するといふことは——彼等の缺點を許すといふことです。あなたは、人間がいかにも悪い生活をしてゐるかといふことを知らねばなりません。そして、もし人間がもつと賢しくさへなつたら、そしてもつとお互ひの權利を尊重するやうにさへなつたら、如何に立派な生活が出来るやうになるか

といふことを知らねなりません。何故といふに、言ふ迄もなく凡ての人はたつた一つの事——幸福といふものを欲求してゐるからです。けれど人々はその幸福へ到達する爲めに皆迷つた道を辿つてゐます、そしてそれ等の道がどうかすると、非常に汚らしい道であることがあるのです。といふのもその人達は、幸福は何に依つて形成されてゐるかといふことを知らないからです。ですから、ほんとうに眞面目な文學の仕事は、幸福とはどんなものか、また幸福を得るには如何にすべきかといふことを凡ての人に教へることです。さうして、あなたの讀む本は、人間は只嘘をつく、しかも下手に嘘をつくものだといふやうな問題で一ぱいになつてゐるやうなものではありません。さうした本は、英勇主義に對する野蠻な概念を懇々と説きます……それを讀んだ結果はどうなりますか？今のあなたは、さうした本の中に出て來る人間を實際生活の中に求めてゐるのです……。」

「いゝえ、いふ迄もなくわたしはさうぢやありません……彼女は眞面目に言つた。更に語を續けて「わたしは、さういふ人間が實際にはゐないといふことを知つてゐます。けれどさうした本が正しく面白いのは、實際には有りさうもないことが描かれてあるからなのです。平凡事は何處にもありません……凡ての生活は平凡事です……その生活の中では、無暗と苦しいことばかり言はれてゐます

……けれどそれは確かに間違つたことです。それが間違つてゐる、なら實際生活では餘りに妙な事をさういふ本の中に澤山書くといふことが何故良くないこととせう？さう申すと、あなたは、人はいゝ本を読んで……模範的感情と思想を求めなければならぬ……けれど凡ての人は誤解ばかりして、それ等を理解することが出来ないのだと、かうおつしやるでせう……けれど、さういふ書物だつて確かに人が書いたのですわ！そしたらわたしは、わたしの信すべき書物、そして最もいゝ書物はどうして求めたらいいのです？あなたの攻撃する書物の中にも、高尚なことが随分澤山ありますわ……。」

「あなたは僕のいふことが解らない……。彼はいらいらしながらさう叫んだ。

「ほんとうに？その事であなはわたしを怒つてゐるの？」と彼女は悔いてゐるやうな調子で訊いた。

「いや！無論怒りやしないよ……そんな問題はいくらでもあるのですから。」

「あなたは怒つてゐます、わたしにはそれが解りず、よく解ります！何故つて、人は自分のいふことに一致しないと腹が立つのですから！けれどどうしてわたしがあなたの言ふことに一致する必要

があるのでせう？わたしはまたいつもかう考へてゐます。何故たれもたれも、自分の言ふことに人を同意させようとして、いつも言ひ争ひ言ひ張つてゐるのでせう？と。そんなことをしたら互ひに話し合ふことは無くなるでせうに。」

彼女は笑ひ出した。笑つてゐる最中に彼女はバツタリ笑ひ止めて、

「まるでどの人間も、凡ての言葉の中からたつた一つの言葉——「然り——^{イニクス}」といふ返事ばかりを聞きたがつてゐるやうね。素敵に面白いこととすわね！」

「あなたは訊きましたね、どうして僕が、人に同意させる必要が……。」

「いゝえ、わたし解つてます。あなたは人に教へようとしてゐるのでわ。そして誰でも反對論を以てあなたに逆つてはならないものとして、それを當然のやうに考へてゐるのですわ。」

「さうぢやありませんよ、全く！」とボルカノフは悲しさに言つた。「僕はたゞ、あなたの周圍に起つてゐる事、それからあなたの心の中に湧いた事に對する批判力をあなたに持たせようとしてゐるだけです。」

「何故？」彼女は彼の眼の中を眞直ぐに巧みに覗きながらさう訊いた。

「あゝなまげないなア。」何故」とは何です！あなたがあなたの感情や思想や行爲やに對して自己批判をすることを教へたい爲めなのです……あなたがあなた自身を、人生に對して、またあなた自身に對して合理的に生かして行くことを教へたい爲めなのです。」

「さう、それは……六ヶ敷しいでせうね。けれど自分を批判する、自分を批評するつて……それは何の爲めにですか？そしてそれはどうしたら出来ますの、自分の身體を二つに分けるのですか、え？わたしにはちつとも解りませんわ！あなたは御自分にだけ解るやうな眞理を考へだしたのね……わたしも或る眞理を持ち、外の凡ての人も何かの眞理を持つてゐても、それ等はあなたから見ればみんな間違つてゐるのですわね。何故つて、眞理はたゞ一つしかないとあなたはおつしやつたのですもの、さうでせう？ おや、御覽なさい——何て美しい草原でせう！」

彼は彼女を見つめた。そして彼女の言葉には答へなかつた。彼の胸の中には吾れと我が心に對する不満の念が一ぱいに湧いた、といふのは、今まで如何なる反對も退けて進んで來た道に彼女を眞直ぐに反抗さして、そして彼女を正しい道に向はせる爲めに、彼女の考へを暫時でも停めようとして論じた彼の努力を、彼女が少しも受け入れないので、彼はそこに侮辱を感じたからであつた。彼

は自分の意見に一致しないやうな人間を愚人として見ることに馴れてゐた。精々よく考へたところで、さうした人間は自分の思想が立脚してゐる點以上には進歩する能力を持たない人間だと極めてゐた——従つてさうした人間に對しては、彼はいつでも憐憫の伴つた輕蔑を以て對してゐた。然るにこの若き女は、愚人だとは考へられない。また愚人達に對して感ずる彼の習慣的の感情も彼女に對しては感じない。これは如何した譯であらう？ また一體彼女は何者だらう？そこで彼は自分にかう言つた、「それは別に疑ふまでもなく、彼女は素敵に美しいからなのだ……彼女の亂暴な言葉も實際には缺點としては考へられないのかも知れぬ。といふのは彼女の言葉は本質的だからだ。一體本質的といふものは、たまにあるものだ、特に婦人に於て。」

高尚な教養ある人間として、彼は外面的には、婦人を自分と同等のものとして相對してゐた。しかし自分の心の底に於ては、他の凡ての人の如く、女を批評的にまた皮肉に見てゐた。男の心には自分を信ずる心は多くあるが、人を信ずる心は殆んど無いものである。

二人は殆んどまん圓の原つばの中を靜かに横切つてゐた。道は車の轍の黒い二線となつてその原つばを横切り、向うの森の中に消えてゐた。原つばの眞中には、美しい若い樺の木の一叢が立つて

ゐて、その影がレースのやうに、刈つた草の葉の上に投げられてゐた。二人からさう遠くない所に木の枝で造つた小屋が、半分がた壊れて倒れかゝつたまゝに立つてゐた。その傾いた方には枯草がちよつと覗いてゐてその上に二羽の鳥がとまつてゐるのが見えた。イポリット・セルゲーエヴィチには、この二羽の鳥が、四方を神秘的無言の森で暗く囲まれてゐるこの小さな可愛い、自然の中には全く不必要で場所柄にふさはしくないものゝやうに思はれた。けれど鳥共は、道を歩いてゐる二人の人間を横目で見てゐた、その態度には或る平氣さと圖々しさがあつた——それは恰かもその小屋の上にとまつてゐて、原つばの入口を見張つてゐるかのやうであつた。そしてそれ故にその使命を忘れることは出来ないと思へてゐるかのやうであつた。

「あなたは疲れませんか？」とボルカノフは怒りに似た感情でさう訊いた。といふのは彼は、二羽の鳥を見てゐて、その圖々しさが非常に癢に觸つて來たからであつた。

「わたしが歩いて疲れたつて？そんなことおつしやるなんて失敬ですわ。それに、あの二人がわたし達を待つてゐる所までは、もう一バースト（我が國の約十丁）とありませんよ……わたし達はもう直ぐ森の中へ入るでせう、そしたら道は丘の方へ下つてゐますのよ。」

彼女は、二人がこれから行かうとする所はどんなにいゝ景色かを話した。彼は彼で、身も心も柔かた快よいものうさに囚はれて、彼女の話に合鍵を打つたさへ厭であつた。

「そこには松林がありますの。それは絶壁の上にありますの。で、そこはサウヨロフの絶壁と呼ばれて居ます。松の木は大きくて、下の方には枝もなく、上の方にいつて枝があるの、その上は暗い緑の天蓋となつてゐますの。森の中は静かですわ、悲しいやうな静けさですわ。地面一ぱい松葉が敷かつて、綺麗に掃かれたやうになつてゐますの。わたしはその森の中を歩く度に屹度神様を思ひ出しますわ、何故か知らないが……それは神様の玉座の近くに侍つてゐるやうな尊い感激なので……たゞ天使だちが、神様を讚美する爲めの歌を歌はないだけです……けれどそれぢやいけないですわね。神様はどんなものをお喜びになるでせう神様？は御自分がどんなに偉いかといふことをお知りなさらないでせうか？」

素敵な考へがイポリット・セルゲーエヴィチの胸中に閃めいた。

「もしも冒険にも自分の獨斷を以て、この女の靈の處女地を耕したならどうなるだらうか？」

しかし彼は直ちに、神の前に於ける自分の無力に對する内心の告白を立派に打ち消した。自分が

その存在を信じない所の神の力を借りるといふことは恥づべきことであるからである。

「あなたは……神様を信じませんか？」彼女は自分の考へを神聖にするかのやうにさう訊いた。

「あなたはどう思ひます？」

「どうして……學者はみんな神様を信じないのでせう。」

「學者は神を信じません、ほんとうに……」と言つて彼は、そんな問題を話してゐることなどを何とも思はないやうに笑つた。しかし彼女は彼を笑はしては置かなかつた。

「みんなが神様を信じないといふことは正しいことぢやないでせう？ だのに學者だちは何故信じないのでせう？ どうぞ、神様を全く信じないやうな人のことを話して聞かして下さいね……わたしには、どうしてそんなことが出来るのだから解りません。さうした考へはいつから現はれて來たのでせう？」

彼は、彼女の聲の調子に酔つて、快よい假眠まどろみの中に陥つて行つた自分の心を引き立てようとしてちよつと口を噤んだ。それから彼は、自分の知つてゐるまゝに、世界の本質なるものに就て語り出した。

「永遠に活動してゐる偉大なる隠れたる力が絶えず相争闘してゐるのです。そしてその偉大なる活動が、吾れ吾れが眼に見る所の世界に現はれてゐるのです。この世界の中に於ては、人間の思想生活も、木の葉の生活も、同一平等なる法則に支配されてゐるのです。その活動には始めもなく終りもないのです……。」

彼女は熱心に彼の言ふことを聞いた。そしてしよつちう、彼れ此れの問題の説明を彼に求めた。彼女の顔には緊張した考へ深さうな色が現はれてゐるので彼は喜んで説明した。彼女は深く深く考へてゐた。やがて考へ終ると、一寸の間ためらつてから、惻巧さうにかう訊いた。

「それならその活動といふのは、世界が始まると同時に始まつたのではなかつたのですわねだつて世界の始まりは神様ですもの。さうでせう？ 言ふ迄もなく神様のことを鬼や角言ふことはないでせうね。神様を信じなくつては、何も彼もなくなつてしまひますもの。」

彼はそれに反駁しようとした。けれど彼女の顔の表情を見て、それは無駄だといふことがその瞬間に解つた。彼女は妄信家なのであつた——困つたことにも、不可思議な光りに輝いてゐる彼女の眼がそれを證據立てゝゐた。彼女は靜かに優しく、妙なことを話した。彼はその始めの方を耳に入

れてゐなかつた。

「あなたが人間を見て、そして人間の凡ての事は如何に憎むべきものであるかといふことを知つたなら、そしてその時に神様を思ひ起し、最後の審判を考へ出したならば——あなたの心は立派に信仰を持つてせう——何故つて、人はたれでも如何なる時でも——今日でも、明日でも、一時間後でも、確かに、神の御告げを聞かうとしてゐるのですもの……そして、その神の御告げは直ぐにある——といふことが時々わたしにも思はれますもの。それは今日にもあるかも知れませんわ……そして第一番に現在の太陽が消え失せてしまつて……新らしい光明が輝き出し、その中に神様が現はれるでせう。」

イポリット・セルゲーエヴィチは、彼女のかうした讒語を聞いて、胸の中でかう言つた。

「彼女は凡てのものを所有してゐるが、所有せねばならぬ只一つのは所有してゐない……。」
彼女は自分の話で顔を蒼くした、そしてその唇には恐怖が漂つてゐた。かうした沈み切つた様子で、彼女は長い間歩いてゐた、その爲め、彼女の話聞いてゐたイポリット・セルゲーエヴィチの好奇心も失せて、退屈になり出した。

しかし彼女のその氣鬱病は直ぐに消えて、高い笑ひ聲が彼の耳を打つた。その笑ひ聲はそこから近邊にひびき渡つた。

「聞えるでせう、マーシヤの聲ですよ……もう來たんですよ。」

彼女は足を速めてそして叫んだ。

「マーシヤ、おーすー」

「此女は何故嗚るのだらう？」イポリット・セルゲーエヴィチは妙に思ひ乍らさう自分に言つた。

二人は川の堤の上を歩いて行つた。堤は水の方に斜に低くなつて、そこには樺の木や柳の木が快よい一叢を作つては、そこちちに思ひのまゝに立つてゐた。對岸の汀には、高い靜かな松の木が立つてゐて、その重苦しい樹脂臭い匂ひが空中に漂つてゐた。對岸にある凡てのものは、暗く、靜かに、單調で、厳格な威厳を示してゐた。が、こちらの岸には——美しい樺の木がそのなやかな枝を波打たせて居り、柳がその銀色の葉を顛はしてゐた。そして突忽たる雪の塊と、わつさりと生ひ立つた榛の籤が、その影を水に映してゐた。向うの砂原は、赤いこぼれ松葉を輝かしながら黄ろく光つてゐた。この足下には、草の二度生ひが、その光つた莖から露はに芽を出して緑の色を現はし、

木の下に積み上げられた積草の山からは、刈られたばかりの枯草の匂ひが通つて来た。川は、静かにも冷たく、全く遠つた兩岸の自然を鏡のやうに映し出してゐた。

樺の一叢の影にはいゝ色の毛布が展げられて、その上にサモワルが置かれ、サモワルからは湯毛と青い煙とが立ち上つてゐる。その傍には、マーシヤが蹲んで、手に急須を持つて何かしてゐる。その顔は赤く、楽しさうで、その頭髮は濡れてゐた。

「お前は水に入つたの？」とワアーレンカは訊いてから、また「そして、グリゴリーは何處へ行て？」と訊いた。

「あの人も水に入りに行きましたの、でもすぐ歸るでせう。」

「さう、ゐなくつてもいゝんだよ。わたしはお腹が減いて、咽喉が乾いて、そして、……食べたくなつて、飲みたくつて、そればかりよ。あなたはどうか、イポリツト・セルゲーエヴィチさん？」

「お察しの通り、僕も厭とは言ひませんよ。」と彼は言つた。

「急いでよ、マーシヤ！」

「何を先にこしらひませう？チキンの肉パイ……」

「みんな一度にこしらへてしまひなさいよ、そしたらお前も行つてもいゝよ。どなたかお前を待つてゐるだらう。」

「だれも待つてやしませんわ、ほんとうに。」とマーシヤは嬉しさうな眼付でワアーレンカを見ながら柔かに言つた。

「まアいゝよ、たんと嘘をおつきなさい。」

「この女は何て単純な言ひ方をするのだらう。」とイポリツト・セルゲーエヴィチは、チキンをこしらへながらさう思つた。「この女がマーシヤとグリゴリーとの関係がどういふ意味かを、またその細かい事までを知つてゐるのか知ら。恐らく、田舎といふものは、さうしたことには、一あけすけで下賤ばつてゐるのだらう。」

ワアーレンカは笑ひながら、困つてゐるマーシヤをまだ擲擲つてゐた。マーシヤは伏し眼をしてその前に立つたまま、その顔には嬉しさうな笑みを浮べてゐた。

「ねえ、あの人はお前を連れて行くのだから？」とワアーレンカは突つ込んだ。

「それは、勿……論ですの。わたしは身體をあの人に上げます……わたしは……ねえ……わたしはあの人を……」さう言ひかけてマーシヤはエプロンを顔に當て、始末に困るほど笑ひながら身體をゆすぶつた——「来る途中で、わたしあの人を水の中へ突き落したのよ」

「お前が？お伶俐さんだね。そしてあの人はどうして？」

「あの人はボートの後から泳いで来ました……そして……わたしに一生懸命嘆願しながら、ボートの中へ……上げてお呉れよつて……それでわたし……投げてやつたの……綱を……艦から」

二人の女の笑ひがうつて、イポリット・セルゲーエヴィチも笑ひ出さずにはゐられなかつた。けれど彼の笑ひは、ボートの後から泳いで来るグリゴリーの姿を想ひ浮べたからではなく、笑ふのがたゞ氣持よかつたからであつた。奔放な感情が身體中に湧き起つた。そして以前には、さうした瞬間にもさう簡単に喜ばなかつたものが、今は何處か遠い所から自分を喜ばしに来るものがあるやうな氣がした。やがてマーシヤはグリゴリーの方へ行つてしまつた。彼等はまた二人きりとなつた。

ワアーレンカは毛布の上に寝そべつてお茶を飲んでゐた、イポリット・セルゲーエヴィチは、それ

を霧のやうな夢を見る心持ちで見詰めてゐた。二人の周圍には、サモワルが寂しい調子でチンチンと沸るだけ、そして時々草の中で何かの音がするだけで、ひっそりとしてゐた。

「あなた、どうしてそんなに黙り込んでしまつたの？」とワアーレンカは、心配さうな視線を彼の方に投げて訊いた、「退屈なんですか？」

「いゝや、僕は一人で楽しんでゐるのですよ。」と彼はゆつくりと言つた、「たゞ、ものを言ひたくないんです。」

「わたしもさうなの。」と言つて彼女は元氣づき、「静かな時にはわたしはちつともお饒舌りしたくないの。何故つて言葉では何んにも言へませんもの。言葉ではどうしても言ひ現はせない感情があるからですわね。世の中の人をよく——「静寂」つてことを言ひますけど、それは出鱈目ですわ——静寂の意味を壊すことなく、静寂のことを言ふことは出来ないのですもの……出来ませうか？」

彼女は言葉を切つて松林を見詰めた。そして手を舉げてそれを指し、静かに微笑しながらかう言ひつづけた。

「ねえ、あの松の木は何かをちつと聽いてゐるやうに見えますわね。あゝいふのが静寂といふので

すね、ほんとうの静けさですわ。どうかするとわたし、あのやうに沈黙して生きて行くのが一番いゝ生き方のやうな気がしますの。でも雷雨の時もいゝわね……あゝ、ほんとうに素敵ね！空は真黒になり、雷光は閃き、真暗で、風がうなり……そんな時はわたし野原へ出て行きたくなりますの。そして原の真中に立つた歌を歌ひたくなるの、大きな聲を出して。でなければ、風に逆つて雨の中を走り廻りたくなるの。それは冬のそんな日でしたわ、わたし一度吹雪の中に迷つてもう少しで凍え死にするやうな目に會つたことがありますのよ。」

「それを話して呉れないかね、どんなだつたかを。」と彼は彼女に求めた。彼はそれを聞くのは愉快なことだと思つた——それは恰度、よしその言葉は解つても、彼には始めて聞く言葉を彼女が話してゐるやうに聞えるだらうと思つたので。

「それは夜遅く、町から馬車で歸る時だつたのよ。」と彼女は彼の方へちつと近よりながら話し出した、その柔かに微笑んでゐる眼は彼の顔をちつと見据えてゐた。「駈者はヨコフと言つて、そりや嚴丈な百姓爺さんだつたの。やがて吹雪が始まりました。恐ろしい勢力を持つた吹雪が、それがわたし達の顔に真直ぐに吹き當るのです。風は暴風になつて、雲のやうな雪がわたし達の前で渦巻くの

です、馬共も押し戻されるほどに、そしてヨコフは駈者臺の上で眩暈するほどに。四邊の何も彼もがまるで釜の中のやうに沸き立つて、わたし達はその釜の中の冷たい泡のやうでしたの。馬車はほとんど進んで行きました。するとヨコフが頭から帽子を取つて十字を切つてゐるのが眼に入つたのです。「どうかしたの？」と訊きますと——「お嬢さま、神様と、有りがたい殉難者のワールワラ様にお祈りして下さつしやれ、どうぞ俄か死にのねえやうにお助け下さるやうにと、」お爺さんは、わたしを恐がらせないやうにと、何でもないやうに落ちついてさう言ふのです。わたしは訊きました「道に迷つたの？」と「さうですが」とお爺さんは言ふのです。「でも道は見つかるでせう？」と訊きますと「どうして見つかりますべえ、この吹雪の中で。もう手綱を放してしまはうと思つてゐるが。さうすりや馬共が自分で道を見つけ出すに遠えねえだから。だがとにかく、神様にお祈りして下さいまし」ヨコフ爺さんは、大へんな信心やなんですの。すると馬共は足を停めてちつと立つてゐるのです。そして雪は頭の上を飛びます。その冷たさつたら 顔が切れさうです。ヨコフは駈者臺からどいてわたしの傍に座りました、二人で暖め合はうとしたんです。そこで櫓の中の天井にある毛布を取つて被ましたの。さうして座りながらわたしは考へました。「もう、わたしは死ぬのだ

「だから町から買つて来たボンボンも食べはしない」と。でもわたしは、ヨコフがしよつちう饒舌つてゐたので恐くはありませんでした。ヨコフがこんなことを言つたのを覚えてゐますわ、「お氣の毒です、お嬢さま！どうしてお前様は死ななけりやならねえです？」どうしてつて、お前だつて凍え死ぬぢやないかね？」とわたしは訊くと、「わたしのことは構はねえで下せい、わたしはこの年まで生きて来たのですから。だがお前様は……」とお爺さんはわたしのことばかりを言ひつゞけました。お爺さんはわたしが大好きだつたの。お爺さんは時にはわたしに小言を言つたり、怒つたりした程ですのよ。随分の強情者でね、こんな風に怒りますの、「あゝお前様の不信心者、向う見ずやの耻知らずの氣まぐれや……。」

彼女はその老人のやつた通りの様子をして、口をのろのろときゝながら、深い太い聲を出してその眞似をした。ヨコフの話で彼女の話が横道に外れたので、イポリット・セルゲーエヴィチは仕方なくかう訊いた。

「そして、道はどうして見つけましたの？」

「さうさう、馬共も凍えさうなので、自分の思ふまゝの所へ走り出しましたの。そしてどんどん走

つて行くうちに、やつと、わたしの村からは十三露里ばかり離れた村へ着きましたの。わたしの村はこの近くですわ、四露里位しかないでせう。川岸に添つて歩いて、それから人道について森を通り抜け、右へ曲ると谷へ行きます。そこからわたしの家の屋根が見えますわ、でも山道ですから十露里位になりませうね。」

二三羽の圖々しい小鳥が二人の周囲を跳ね歩いた。それから藪の小枝の上にとまつて元氣よく啼つた。それは恰かも、森の眞中にさうしてぼつつりと座つてゐる二人の人間のことを鳥同志で話し合つてゐるといふ風であつた。遠くから、笑ひ聲と、話し聲と、摺の水音とが二人の耳に聞えて来た——それは舟を漕いでゐるグリゴリーとマーシヤからであつた。

「あの人達を呼びませうね、そしてわたし達は松林を通つてあつちへ行つて見ませうか？」とリアーレンカが言つた。

彼はそれに同意した。と彼女は手を喇叭のやうに口に當てゝ叫んだ。

「こつちへ、漕いで、来るよ——」

その叫び聲を出す爲めに彼女の胸はピンと張り切つた、イポリット・セルゲーエヴィチはさうし

た彼女を見て、心ひそかに、素敵だなアと思つた。彼は何かを——何か非常に眞面目なことを——考へねばいけないと感じてゐた。けれどそれは考へたくはなかつた。微かにも現はれたさうした心は、更らに力強い感情の命令のまゝに、おとなしく自由に自分自身を任せることを拒まうともしなかつた。

ポートが見えて來た。グリゴリーは狡さうな、寧ろ悪びれた顔をしてゐた。マーシャは怒りを隠してゐるやうな顔をしてゐた。けれどワアーレンカが、ポートに乗り込んで、そして二人の顔を見て笑ふと、二人も恥かしさうに嬉し、さうに笑ひ出した。

「ヴェナスとその寵愛する奴隷だち。」とイポリット・セルゲーヴィチは自身に言つた。

松林の中はまるで寺院の中のやうに莊嚴で靜かであつた。そして頑丈な堂々たる松の軀幹はその上に濃緑の圓天井を支へながら、まるで圓柱のやうに立つてゐた。松やにのむつとした重苦しい匂ひが四邊に漂ひ、足の下には乾いた松葉がカサカサと柔かい音を立てた。前にも後にも、四方八方に赤い幹の松が立ち並び、そここの根元には、松葉の層を貫ぬいて青白い緑の芽がふき出してゐた。この靜寂と無言の中をこの二人の男女は黙りこくつて、或ひは右に折れ、或ひは左に曲り、或

ひは前を遮る木を跨いだりして、靜かに彷徨ひ歩いた。

「迷ひやしないかね？」とイポリット・セルゲーヴィチは訊いた。

「迷ふつて？」とワアーレンカはびつくりして言つた。「わたしは何處にゐたつて、道を見つけようとさへすればいつでも直ぐに見つけますわ……太陽を見さへすればすぐ解りますの。」

彼は、太陽を見ればどうして道が見つかるのかも彼女に訊かなかつた。少なくとも彼は物を言へたくなかつたのである、たとへ時々は、多くのことを彼女に言はねばならぬと感じても。けれど心の内には肉慾の衝動があつた。そしてそれが彼の靜かな氣持ちの表面に閃めいた。がそれも彼を亂すこともなくて、すぐに消えて行つた。ワアーレンカは彼と並んで歩いてゐた。その顔には靜かにも恍惚たる氣持ちが映つてゐた。

「素敵でせう？」と彼女は始終彼に訊いては、唇を顫はして撫でるやうな微笑を漏らした。

「さう、實にいゝ景色だ。」と彼は簡単に答へる、とまたも二人は元の沈黙に返つて森の中を彷徨ひ歩いた。彼は自分が、戀に夢中になつて、罪深きもくろみにも、吾れと我が心に對する内面の争闘にも門外漢である一青年のやうに思はれてならなかつた。けれど彼の眼はしよつちう彼女のガウン

の汚點の上に止まつた。そして穩やかならぬ影が心の上にさした。彼には、かうした影がどうして湧くのか、それも突然に、全く一瞬の間に湧くのか、それがまるで解らなかつた。でその影が彼の心を包んだ時に彼は、重荷を下したやうな深い溜息をつきながら、彼女に言つた。

「あなたは實に美しいね！」

彼女はどきまぎして彼を見た。

「あなたは何を苛々してゐらつしやるの？あなたは冷靜にしてゐなければなりませんわ、冷靜になつてゐなければなりませんわ——それなのに、だしぬけにそんなことをおつしやつて！」

イポリツト・セルゲーエヴィチの心は彼女の冷靜さに鎮められて、微かに笑つた。

「こゝは實に美しいでせう……ねえ、森は美しい……そしてあなたは森の中の仙女のやうです……でなければ女神、さうしてこの森はあなたの寺院です。」

「嘘。」と彼女は微笑しながら答へた。「これはわたしの森ぢやありません、女王様のものです、わたしの森はすつと向うの川の下にありますわ。」

さう言つて彼女は手を舉げて或る一方を指した。

「この女は冗談を言つてゐるのか……それとも俺の言つたことが解らないのか知ら？」とイポリツト・セルゲーエヴィチは心密かに言つた。そして彼女の美しいことをもつと言ひたい強い要求が胸の裡に燃え出した。けれど彼女は物思はし氣に黙つてゐるので、彼はこの要求を、彷徨つてゐる間中自分の中に制へてゐた。

二人はそれから長い間彷徨ひ歩いた。然し言葉は殆んど交さなかつた。靜かな穩やかな日和が、二人の心を甘いまどろみの中に引き込んで行つたからであつた。そして凡ての欲求はそのまどろみの中に沈んでしまつて、言葉では言ひ現はせない何物かを黙つて思ひ耽けらうと思ふことより外になんにもなくなつたからであつた。

家へ歸ると、エリザウエータ・セルゲーエウナはまだ歸つてゐなかつた。で二人はマーシヤが急いで持ちへたお茶を飲んだ。お茶の後直ぐにワアーレンカはエリザウエータ・セルゲーエウナと一緒にワアーレンカの家を訪ねる彼の約束を確めて、自分の家路へ馬を駆つた。彼は彼女を見送つて、テラスへ出て行くと、彼は自分に無くてはならない或るものが失はれた後の悲しい思ひの湧いて來たことに吾れながら驚いた。彼はテーブルの前に座つた。そこにはもう冷えたお茶のコップがあつた。

彼はその日に刺戟された情熱の凡ての活動を鎮めようとして、厳しく自分自身を無愛相にした。けれど吾れと我が心に對する憐憫の情が湧いて来て、彼は何をすることも厭になつた。

「どうしたのだ？」と彼は自分に言つた。「凡てこれは眞剣なのだらうか いや、それは遊戯であつてそれ以上何物でもないのだ。この遊戯は彼女を傷けないだらう、また傷けることも出来ないだらう、たとへ傷けようとしても。これは自分の生活には稍々矛盾したことであるが……それにしてもこの遊戯には非常な若々さと美しさがある……。」

それから彼は、自分にも遠慮して微笑しながら、自分の精神を向上させようとする堅い決心を思ひ起し、またさうしようとする努力が失敗だらけであつたことを思ひ起した。

「いふ迄もなく、彼女を評するには、特殊の言葉を以てしなければならぬ。彼女の本質的性格は一方に於てその盲目的な原始的な感情の甲冑を被て、理論なるものから避けようとしながら……他方に於ては純理論に對しての眞直さを非常に持つてゐるのである……彼女は不思議な女だ！」

彼の妹にも、彼がワアーレンカを思ふことで一ぱいになつてゐるのが解つた。妹はそれはそれはした元氣いゝ調子で彼の前に現はれて来た——そんな様子は今まで見せたことがなかつた。彼女はマ

ーシヤにサモワルを沸すように言ひつけると、彼の向ふ側に腰を下して、ベンコフスキーのことを話し始めた。

「あの人の古い家の中には、どこの隙間からも残酷な貧乏の眼がちつと覗いてゐて、その勝ち誇つた貧乏が家庭の中を支配してゐますの。家の中には一コベツタの金もなく、眼に見える物としては道具一つありませんの。夕飯に使ふ卵さへ村まで買ひに行かねばならないんですの。そして夕飯の食物もなかつたのよ、それでベンコフスキーのお父さんは頻りと菜食主義を話しますの、それから菜食主義を土臺として、人間の道徳は改善出来るものだといふやうなことを話しましたわ。どこにもここにも腐つた匂ひがして、みんな意地悪になつてゐました——恐らく飢えてゐる爲めでせう。」彼女は、分割してやつた少しばかりの土地をベンコフスキー家から買ひ戻さうといふ相談で行つたのであつた。

「どうしてそんなことをするんだね？」とイポリツト・セルゲーエヴィチは或る興味を以て訊いた。

「そりや、兄さんにはわたしがやらうとしてゐる豫算がお解りにならないでせう。考へて見て下さいね——これから生れるわたしの子供達の爲めですわ。」と彼女は笑ひながら言つて、「それで、兄さ

「達は今日はどうでしたの？」

「愉快だったよ。」

彼女はそれには何とも言はずに、目尻で彼を見た。

「ねえ、こんなことを訊いて悪いかも知れないけど……兄さんはワアーレンカさんに征服されるのを少しばかり怖がつていらつしやらない？」

「何を恐がるつて？」と彼は、自分にも解らない興味を以てさう訊き返した。

「向ふの思ふ通りにぐんぐんと持ち廻されることですよ。」

「うん、それはどうやら免かれたが……。」と彼は怪しいと思ひながら答へた。

「もし、さうでしたら、そりやほんとうに良うございましたわ。ちよつとこのことで——それでみんな良くなるのですもの。でも兄さんは冷た過ぎますわ……厳格すぎますわ……お年の割りに。ほんとうに……ワアーレンカさんが少しでも兄さんを感じさせたのならわたし嬉しいわ……恐らく兄さんは、これからあの方にもしよつちう喜んでお逢ひになるでせうね？」

「ワアーレンカさんは、あの人の家を訪ねる約束を俺にさせて行つたよ。それからお前にも来て呉

れと言ひ置いて行つた……。」イポリット・セルゲーエヴィチはさう彼女のいふことに調子を合せた。

「兄さんは、いつお訪ねしたいんですか？」

「俺はいつだつていゝんだ……お前の都合のいゝ時でいゝよ。お前は今日は御機嫌がいゝね……。」

「そんなに目立ちますの？」と彼女は言つた。

「どうしたんでせう？わたし今日は楽しく暮しましたの。と言つてわたし兄さんに當てつけるつもりぢやないのよ……でもほんとうを言へば、わたし、夫の葬式を済した日から、新しい生活が甦つたやうな気がしますの……我がまゝやだわね——ほんとに。でもそれは牢獄から自由に放たれた人の幸福な我が儘ですわ……それでも悪いでせうか……いゝえ、正しいに違ひないわ。」

「それ位のことを言つたつてどれほどの罪になるといふのだね？お前は喜んでゐるのだから、だから……これからも喜んで行けばいゝんだ……。」とイポリット・セルゲーエヴィチは愛想よく言つた。

「今日の兄さんは親切でいゝ人ですのね。」と彼女は言つた。「でもそれは、小さな幸福——すぐに善良な親切な人になる人間の幸福ですわね。けれど或る賢人達はわたし達を純化する苦痛を考へました……わたしはさうした理論を人々に説いてそして人々の心をその誤りから純化するやうな生活を

したいと思ひますわ……。」

「しかし若しこの女がワアーレンカを苦しませたならば——あの女はどうなるだらう？」とイポリツト・セルゲーエヴィチは自分に言つた。

兄妹は直ぐに別々になつた。妹はピアノを弾き始め、彼は自分の部屋へ去つて長椅子の上に横たはりそして考へ始めた——あのワアーレンカは自分のことをどんな人間と思つてゐるだらう？美しい男だと思つてゐるだらうか、それとも賢明な男だと？彼女を喜ばせるやうな事が自分にあるだらうか？といふものゝ彼女の心を動かした何物か——一つあつた——それは自分にはよく解つてゐる。しかし自分が彼女の眼の中に讀んだものは、自分が賢明な學者としての何等かの價值を持つた者としてではない。第一彼女は自分の理論や意見や訓戒などを凡て認めてゐないのだ。で恐らく自分が彼女を喜ばしたものは單に男としてあつたのだ。

かうした結論に達して、イポリツト・セルゲーエヴィチは誇りかな喜びに燃え上つた。彼は眼を閉ぢ、満足氣な微笑を湛えながら、彼の言ふまゝになり、彼に征服された彼女を心に描いた。そして彼に氣に入られるやうにおづおづと取り入りながら、彼の爲めに何でもしようとしてゐる彼女を心

に描いた。更らに彼女に、物を考へること、生きること、愛することをも教へてやらうといふことまで想像した。

三

エリザヴェータ・セルゲーエウナの馬車が、陸軍大佐オレソウの家の玄關に着くと、だぶだぶした灰色のガウンを被た丈高い瘦せぎすの婦人が現はれて、その發音の中に「ル」といふ音を強く響かせながら、太い聲でかう言つた。

「まア！何といふ嬉しいことぞせう！」

イポリツト・セルゲーエヴィチはこの吼えるやうな挨拶の聲に身顛ひさへした。

エリザヴェータ・セルゲーエウナと婦人とが互ひに接吻を交はした後で、彼の妹は、

「イポリツト・セルゲーエヴィチです。」と彼を紹介した。それから、婦人のことを、

「マルガリタ・ロチオノウナ・ラツチエツキーさん。」と言つて彼の方を見た。

婦人の冷たい棒のやうな五本の指が、イポリット・セルゲーエヴィチの指を掴んで、その灰色の眼がちつとこつちの顔を見た。そしてラツチエツキー小母さんは、餘りお饒舌しないやうにと、自分の言ふことを一つづゝ數へてゐるかのやうに、一つ一つの言葉をはつきりと言ひながらその太い聲で吼えた。

「あなたと、お近づきになることが出来まして、ほんとうに嬉しうございます……。」

それから彼女は身を一方に片寄せ、片手をドアに掛けて、

「どうぞ、お上り下さい！」

イポリット・セルゲーエヴィチが敷居を跨ぐと、何處かの部屋から嘎れた聲の咳き聲がして、つゞいて怒つた叫び聲がきこえて來た。

「この間抜け奴！行つて、見て來い。誰が來たんだ……。」

彼等が躊躇つてちよつと足を停めてゐるのを見た小母さんは、

「お入りなさい、お入りなさいよ、エリザウエータ・セルゲーエウナさん」とはき立て、「大佐が吸

鳴つてるのですよ……將軍、わたし達ですよ。」

低い天井の大きな部屋の真中に、素敵に大きい安樂椅子があつて、その中に、顔中灰色の髭に蔽はれた赤い乾からびた顔をした大佐が、リウマチスの大きな身體を押し込まれてゐた。顔の上部は息の詰つた鼻息をするので陰氣に見えた。安樂椅子の後には、丈高い頑丈な女の肩が見えて、その女は光のない眼でイポリット・セルゲーエヴィチの顔を覗き込んでゐた。

「御機嫌よう……あなたのお兄さんですな……わしがワシリイ・オレソフ大佐ぢや……むかしはトルコ人もトルキスタン人も征伐したもんぢやが、今ちやこの通り病氣に征伐されちまつて……ハツハツハツ。所で君にお目にかゝれて嬉しいわい。ワアルワアラがこの夏中あなたの學問のあることをわしの耳に吹き込み通しだつたぢや、それから外のいろんな事をな……どうぞ、こちらへ、居間へいらして下さい……テクラ、わしを連れて行け！」

椅子の足の車が烈しく軋つた。大佐は前の方にのめつた身體を後方へ引き戻さうとして嘎聲で咳き出した。恰かも振り切つてしまひたいかのやうに頭を振りながら。

「主人が咳をする時は——ちつと立つてゐるんだ！もう千遍もそれを言つてきかしたぢやないか

？」

さう大佐が言ふと、小母のラツチエツキーはテクラの肩をつかまへて、床の上に押しつけた。ポルカノフは、烈しく身體をゆすつてゐる大佐の咳が止むまで、立つたまゝぢつとしてゐた。やうやく皆は動き出して、或る小さな部屋へ入つた。そこには、いろんなものをこちやこちやに入れたズツクの袋のやうな餘計物が一ぱいに在つて、蒸し暑くつて薄暗かつた。

「どうぞ、お掛け下さいまし……テクラ——お嬢様をお呼び下さい！」と小母のラツチエツキーが命じた。

「エリザウエーク・セルゲーエウナさん、ほんとに、お目にかゝれて嬉しいわい！」と大佐は言つて鼻の上まで届いてゐる灰色の眉毛の下の、鼻のやうにまん圓い眼で客の方をぢつと見つめた。大佐の鼻は滑稽なほどに大きい。その頭は紫色に光つてゐて、それが頬鬚のぼさぼさした毛の中に痛ましさうに隠れてゐた。

「わたしもあなたにお目にかゝれて嬉しうございます。」と彼の妹は丁寧に言つた。

「ホツ、ホツ、ホツ、そいつア嘘だわい——失禮だが、中風で足も立たず、無茶苦茶にウオツカばかり飲みたがる病氣を持つた、こんな老人に逢つて何處に嬉しいことがあるかな。なるほど今から二十五年前にやこれでも、このワシカ・オレソウに逢つてほんとに嬉しがつた者もあつたが……いや随分たんとのが嬉しがつたもんぢやが……だが今ぢや、わしは全くあなた達には無用ぢや。またあなた達は全くわしに無用ぢや……だがな、あなた達が来て呉れた時は、わしはウオツカが飲めるので——それでそのわしは、あなた達と逢ふのが非常に嬉しいといふ譯ぢや。」

「そんなにお話しなさいますな、また咳きますよ……。」とマーガリタ・ロデオノウナが彼に注意した。「今のを聞きかな？」と大佐はイポリツト・セルゲーエヴィチの方に振り向いて言つた、「わしは饒舌つてはならぬ——有害だから。わしは酒を飲んでならぬ——それも有害だから——わしは食ひたいだけ食つてもいかなぬ——それも有害だから、とかうなんだ。何も彼も有害なんだ。べらぼう奴！そこでわしはかう考へたぢや。わしが生きてゐるのも有害なんだとな！ホツ、ホツ、ホツ！わしはちと長生きしすぎたんぢや……あなたは、こんなことを言はねばならぬやうな目に會はない方がいいですよ……だが、あなたは若死にするらしい、あなたは肺病らしいから——あなたの胸は恐ろ

しく狭い……。」

イポリット・セルゲーエヴィチは大佐の方を見たり、ラツチエツキー小母の方を見たりしてワアーレンカのことを考へた。

彼は嘗つてワアーレンカの生活状態を心に描いて見たことが無かつた。が今彼はそれを眼に見てすつかり心を打たれたのであつた。彼は、ラツチエツキー小母の鋭い角ばつた瘦せ身を見るに堪えなかつた。また彼女の黄ろい皮膚に蔽はれた長い首を見るに堪えなかつた。そして彼女が話す度毎に、彼は、彼女の廣い板のやうに平らな胸から出る太い聲は、彼女の胸を引き裂いてしまふその前兆ぢやないか知らと思ふのであつた。その上にラツチエツキー小母のスカートの衣摺れの音までが、骨が互ひに摺れ合つてゐる音のやうに彼には思はれてならなかつた。大佐はリキールか何かの臭ひと、肌汗と、下等な煙草の臭氣を立てた。その眼の光りから判断して、大佐はしよつちう怒つてゐるに違ひないと思つた。イポリット・セルゲーエヴィチはその怒つた時の有様を想像して、この老人が厭になつた。部屋は氣持ちよくなかつた。壁紙は煙に煤けて、ストーヴの敷石の大理石に似せて造つたのが、龜裂で縞になつてゐた。床のベンキは、椅子の車の爲めに剝げ落ち、窓框は歪

み、窓硝子はくすぶり、何も彼もが古い死んだやうな困憊の匂ひを發してゐた。

「今日は蒸し暑いですわね……。」とエリザウエータ・セルゲーエウナが言つた。

「雨が降るのでせうよ。」とラツチエツツキーは型のやうに答へた。

「降るでせうか？」と客の方が疑ひ深さうに訊いた。

「マーガリタの言ふことはほんとうぢや。と老人は、しはがれ聲で言つた。「この女は何でもその前に解るのぢや……わしは毎日それを確めてゐる……この女はわしにかう言ふのぢや、「あなたは死にます」とな。それから「ワアールヤは人に盗られて頭を割られてしまふ」とな。さうだらうかな？ わしはその事と言ひ争ふのぢや——オレソウ大佐の娘とあらう者が、その頭を動かすのだつて誰れに指一本觸れさせようぞ……娘が一人で動かすわいと。ところで、わしが死ぬといふこと——これは眞實ぢや……つまりは死ぬべきものなんだからな。そこで、君のことだが、學者さん。あなたはどう感じますかな。この田舎を？ 大きなタンクの中の小さな魚を見るやうに、詰らないぢやらうな？」

「いゝや、どうして、……實に森の多い美しい田舎ですよ……。」とイポリット・セルゲーエヴィチは丁寧に答へた。

「こゝが森の多い美しい田舎だつて？ フン、そいつは、あなたはまだこの地球の上で美しい所を見たことがないといふ證據ぢや。ブルガリヤのカザンリツクの谷は美しい所ぢや……ケラツサンにも美しい所がある……ムルガル河の上流には天國そのまゝといふ所があるわい……あゝ！ わが尊き幼年時代よ……。」

ワアーレンカが現はれて、微臭い居間の空気は急に新鮮な香氣に充ちた。彼女は軽いライラツクのサーピンカ（サーピンカとは非常に立派な綿の一種で、不變の二色を持つてゐる）で造つたマントのやうなものを被てゐた。手には切り取つたばかりの大きな花束を持ち、その顔は喜びに輝いてゐた。「けふいらしつて下さるなんて素敵ね！」と彼女は客人達に挨拶しながらさう言つた。「わたし丁度いまあなた達の所へ伺がはうとしてゐましたのよ……馬の用意をさせてゐました所なの。」

それからワアーレンカは滑るやゝな身振りをして、父とマーガリタ・ロチオノウナの方へ挨拶した。そのマーガリタは、背骨が石になつてしまつてもう曲げることも出来なくなつたといふやうな不自然な嚴肅さで、客人の傍に立つてゐた。

「ワアルワアーラ！ あなたは詰らないことをおつしやるのね！」と彼女は光つた眼をしながら若い

娘の方に嚴しく言つた。

「まア大きな聲ね！ そんならわたし、ヤーコウレフ中佐のことを話させようよ、それからあの人の御立派なお情のことをね……。」

「ホツ、ホツ、ホツ！ ワアーカ、（ワアルワアーラの愛稱）お黙りなさい！ それはわしが話すからいゝんぢや。」

「一體俺はどんな所へ來てゐるのだらう？」とイポリツト・セルゲーエヴィチは困つて、妹の方を見ながらさう思つた。

併し妹に取つては、その口元に輕蔑の微笑を浮べてゐたとは言へ、凡てのことが氣持よかつたことは明らかであつた。で彼はちつとして、見たり聴いたりしてゐた。

「わたしは行つてお茶の仕度をしませう！」とマーガリタ・ロチオノウナは言つて、身體を曲げもせず真直ぐに立ち上り、大佐の方に答めるやうな視線を投げてからそこを去つて行つた。

ワアーレンカは小母の後へ腰を下して、何かエリザウエータ・セルゲーエウナの耳元に囁き始めた。

「この女はどうしてこんなならしない着方が好きなんだらう！」とイポリツト・セルゲーエヴツチは美しい姿勢で妹の方へ傾いてゐるワアーレンカの姿を偷み見しながらさう自分に言つた。

と、大佐はまるで調子の狂つた大提琴のやうな聲で我鳴り出した。

「言ふ迄もないこつちやが、お前は、あのマーガリタ小母は、イスキ・ザグラの戦争で負傷したわしの同僚のラツチエツキー中佐の妻であるちうことを忘れてはならんちや。あの女が言ふやうにあの女は夫と一緒に従軍したんちや。實に強い女ちや。ヤーコウレフ中佐はわしの聯隊にゐたんちやが……優しい若い女のやうな男でな……それがトルコの義勇兵に胸を切られて、それが因で肺病になりそしてたうとう死んでしまつたんちや！さうだ、あの男がその肺病にかゝると、あの女は五ヶ月間も看病したんちや！それをどう思ふな？え？そこで彼の女は、もう生涯結婚はしないといふ約束をその男にしたんちや。その時は彼の女はまだ若くて美しかつたちや、そして非常に人を惹きつける力のある女だつたちや。それでうんと偉い男達が彼の女を口説いたもんちや。眞面目に口説いたんちや——シムルロー中隊長といつて、非常に美しい若い小ロシア人は、それが成功しないんで自棄酒を飲んで軍職を棄て、しまつた程ちや……わしも……つまり、わしもあの女に申し込んだ一人ちや。

「マーガリタ！俺と結婚しよう！」とな……だが彼の女は承知しないちや。そこはあの女の馬鹿な所ちやがしかし一方に高尚なことちや、言ふ迄もなく、やがてわしがこの通り中風に取りつかれると彼の女は自身やつて来て、かう言つて呉れたちや、「あなたも世界中に一人ぼつち、わしも一人ぼつち……」それから、かうだあゝだとな。それからといふもの聖者のやうに交はつてゐるのちや。永遠の友情でわし達はいつも互ひに結び合つてゐるのちや。その女は毎夏こゝへ来るのが極りちや。そしてあの女は自分の屋敷を賣り拂つて、永久に——つまりわしの死ぬまで、この家に住みたがつてさへゐる程ちや。その心はわしにも解る——がそりやちとをかしいことちや、さうぢやらう？ホツ、ホツ、ホツ。何故つてあの女は熱情家だし、わしはまたあの女に飢ゑてゐるんちやからな。火を弄ぶな……ホツホ、そこでと、あの女が口癖のやうに言つてゐるあの女の生活の詩的な所を言つてやらうもんならあの女は怒り出すんちや、そしてきつとかう言ふんちや、「お前のその厭らしい舌でわたしの神聖な心を汚して呉れるな」とな。あゝあゝ！ホツホツホツ。だが實際、その神聖とはどんな神聖だらうかな？心の幻……女學生の夢……人生は單純ぢや、さうぢやないかな？ 楽しく暮せ、そして時が來たら死ぬ、それが凡ての哲學ぢや！ たゞ……時が來た

ら死ぬ。だ。ところでわしは、長生きしすぎたんぢや、あなた達は長生きはしないがいーんぢや……。」

イポリット・セルゲーエヴィチの頭は、かうした話と、大佐から匂つて来る臭氣とで眩暈めまいして来た。けれどワアーレンカは彼のことには目もくれず、また彼女の父の話が彼にいかにも不快であるかも知らずに、小聲でエリザウエータ・セルゲーエウナに饒舌つては、また眞面目に注意深く相手のいふことに耳を傾けてゐた。

「皆さん、お茶にいらしつて下さいまし！」といふマーガリタ・ロチオノウナの太い聲が戸口の所でひびいた。「ワアーレンカ、お父さんを押し立てて来て下さいな。」

イポリット・セルゲーエヴィチはホツとして、自分の前に重い椅子を軽々と押して行くワアーレンカの後について行つた。

お茶の御馳走は、冷たい食物ばかりで、英國風に造られてあつた。大きな焼肉の周囲には酒のコップが並んでゐた。これを見た大佐はさも満足氣な笑ひ聲を出した。熊の皮で包んだ半死の兩足さへ、嬉しさで顫へてゐるかのやうに見えた。彼は食卓の前に押されて行くと、眞黒い毛の一ぱい

生へた太つた手を顫はしながらコップの方へ差し伸し、柳の小枝で造つた椅子が並んでゐる大きな食堂の空氣を顫はして高く笑つた。

お茶の時間は厭になるほど長かつた。その間中大佐は軍隊の珍談奇聞をしやがれ聞で話した。マーガリタ・ロチオノウナは太い聲でちよいちよいと口を挟み、ワアーレンカとエリザウエータ・セルゲーエウナとは靜かに、けれど活々と饒舌りつとけてゐた。

「この女は何を話してゐるのだらう？」と、まるで餌食のやうに自分を大佐に與へてしまつてゐるイポリット・セルゲーエヴィチは悲しくもさう自分に思つた。

今日の彼女は殆んど何等の注意も彼に拂つてゐないかのやうに思はれた。これが愛嬌といふものなのだらうか？ 彼は彼女のことを少し癪に觸りかけて来た。と今度は彼女は彼の方に視線を投げて、ひよき渡るやうな笑ひ聲を出した。

「妹が彼の女の注意を俺の方に向けさせたのだな」とイポリット・セルゲーエヴィチは不愉快さに眉を擡めてさう思つた。

「イポリット・セルゲーエヴィチさん、あなたはもうお茶がお済みになりましたの？」とワアーレン

カが訊いた。

「え、もうとつくに……。」

「散歩しなくつて？景色のいい所を御案内しますわー」

「散歩しよう。お前も来たらどうだ。」と彼は妹に言った。

「い、え、わたしはマーガリタ・ロチオノウナさんや大佐と一緒にゐた方が嬉しいの。」

「ホツ、ホツ、ホツ。わしの半分死んだ身體が轉げ込まうとしてゐる墓場の縁に立つてゐるのが嬉しいぢやと！」と大佐は高い笑ひ聲を出して、「どうしてそんなことをお言ひなんぢやな？」と訊いた。

「この次ぎは、ウアーレンカは俺にかう訊くに違ひない。」わたし達の家にゐるのは退屈でせう？」

と「アーレンカと一緒に家から庭へ出た時にイポリツト・セルゲーエヴィチはさう思つた。けれど彼女は彼にかう訊いた。

「あなた、わたしのお父さんをどう思つて？」

「さう！」とイポリツト・セルゲーエヴィチはやさしく言つた、「尊敬すべき人です！」

「まアさう！」とウアーレンカは満足氣に答へた、「どなたもさう言つて下さるのよ。お父さんは驚くべき勇敢な人ですの。お父さんは御自分のことはお話しなさいませんが、小母のラツチエツキーがお父さんと同じ聯隊にゐたものですから、ゴールネー・ダブンヤークの戦争でお父さんの乗つた馬の鼻の穴が鐵砲玉に貫かれた話をよくしますわ。その馬はお父さんに乗せたまま、眞直ぐにトルコ兵の間へ進んで行つたんですつて。するとトルコ兵が後から追つて來たんですつて。そこでお父さんは向きを代へてトルコ兵から逃げ出さうとしたんださうですの。けれど勿論馬は殺されてしまつてお父さんは倒れてしまつたんですつて。すると後から四人の敵兵が追つ掛けるのですつて……やがて一人が近づいて來て、銃を逆さに持つてお父さんの頭の上に振り擧げたのですつて。お父さんはひらりと飛んで——ポカンと相手を殴り飛ばしたんですね。するとその相手は倒れてしまつたのですつて。そこでお父さんは連發銃を敵の顔に差し向けて——ドンと一發！それからお父さんは死んだ馬の下から自分の片足を引き出したのですつて。そこへ外の三人が突進して來る、つよいて多くの敵がやつて來る、する所へ味方の兵が突撃して來たんですつて、ヤーコウレフも一緒に——ヤーコウレフつて御存じでせう？そこでお父さんも死んだ兵卒の銃をひつたくつて立ち上り——